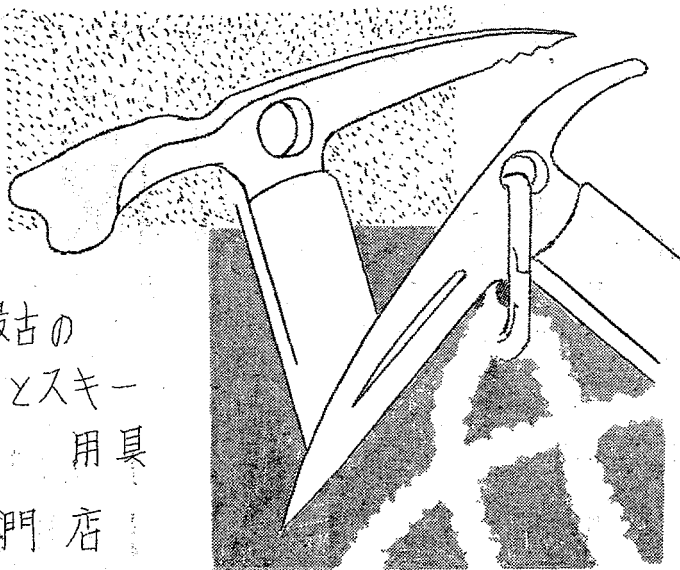

時 報

NO.11

1961.6

大阪大学山岳会



日本最古の
登山とスキー
用具
専門店

大正13年創業

大阪・東京・神戸・福岡

好日山莊

シモン シヤルレ ピツケル 日本代理店
ヘッド スキー 輸入 元
札幌門田作ピツケル・アイゼン 関西総代理店

大阪市北区老松町3-12

TEL (34) 7745

時報 第11号 目次

前 山	篠田軍治 (2)
昭和三四年度を回顧する	野田憲一郎 (4)
1959年度 冬山合宿報告	
Ⅰ スバリ岳・赤沢岳周辺	(6)
Ⅱ 白根三山—大唐松尾根	(23)
1959年度 春山合宿報告	
Ⅰ 薬師岳東面	(29)
Ⅱ 真砂尾根から劔岳八ツ峰I峰	(49)
夏山合宿	
千丈沢反ひ槍ヶ岳周辺	(71)
一般山行報告	(74)
雑 纂	(92)
ピーク29峰遠征	(94)
会 員 名 簿	(118)



篠田軍治

こゝで前山というのは主峰の前にある山だけではなく高山をとりまく周囲の山も含めての意味である。心づうには前山という周囲の山を意味しないが、例えば北アルプスに対する美ヶ原のような山は柯となく前山という感じがある。

私をはじめ北アルプスへ登つたのは白馬だが、その時は戸隠中社から鬼無里きなしを通つて四ッ谷へ出て泊つた。途中に柳沢峠があるが今年から開通する四ッ谷、長野間のバス道はこれより大部峠の方を通ることになつてゐる。こゝは木が多くて思ひのほか眺望はなかつた。しかし、こゝから見た白馬三山は確かにそれまでに登つた山と違つていた。こゝで、始めて北アルプスへ登る心構えができたのであつた。

はじめて南アルプスに入つたのは、台から北沢峠へ出たときであつた。天気が悪かつたせいもあつたが、翌日仙丈の頂上ではどうしても地形がうまく頭に入らない、もう少しで尾根を間違えるところだつたのを覚えてゐる。考えてみると、まだ南アルプスの特徴をつかんでいなかったのだ。

私の松高時代の山登りというと、東の武石峠、美ヶ原へ登つては西の北アルプスを眺める。それから北アルプスへ登つて、又、東の山に登るといふ具合で、言わば観察と実験を繰り返して行つて、その間に観察を加えるといふ行き方であつた。こんなことから前山というものに興味をひかれるようになった。穂高の前山ともいうべき蝶、大薮から霞沢、どれが一番よいかといつと、それぞれに持長があつて一概には言えない。霞沢から見える酒沢坂の稜線の美しさ、大薮からの遠と稜高との対比、初秋の蝶から見た妻さ、柯れを一柱と

も定め難い。

グリーンデルフルトを訪れたときにも、一番行つて見たかつたのはアイガーの北壁が正面に眺められるフアウルホルンであつた。この山は高さは二六〇〇米ほどで頂上にレストランがあり二一〇〇米あたりまでスキーのリフトがあるので至つて簡単である。道は広く、お花畑の中を通り、湖のふちを通つて尾根へ出るようになつており、残雪も北アルプスの比率程度である。こゝを訪れた気持は、武石峠や美ヶ原に登つて北アルプスを学ばのと全く同じであつた。そして、その翌日、ヴェンツタトホルンのグレンツフシユタイン、ヒエツテへ行つたが、その時の雷雨の中での山行に、前日のフアウルホルンでの観察が非常に役にまつたのであつた。富士山は周廻の峠から見ると特に美しいとされているが、それにも増して美しいのは南アルプスから見たものである。逆に富士山から見た南アルプスはあまり立派でない。やはりある程度の高さ（仰角）があつた方がよいのであろう。その意味から美ヶ原から見た北アルプスや入ヶ岳は好い。また南岳と北穂の間で稜線が深く切れ込んでいたり、その大天井という山が常念山脈では主峰であることなど、観念的には地四の上でよく知つており、また歩いてみるもわかっていることではあるがそれがはつきり吞み込めたという気持ちになる。実際、槍の方から南岳へ深走して行くとき起状があまりにも少ないので、つい、この調子で感高へつたがつてしまふのではないかという錯覚に陥りやすいものである。こうして時に周廻から山を眺めておいたとき稜線が役に立つものである。また、とかく山登りをする人の中にはルートだけは根柢り葉ほりレラべるが、その周廻に全く無関心な人が多い。これでは一寸した事故があつても危機の処置はとれないやはり前山から目的とする山を眺めることが必要ではなからうか。これは故国を離れて外国から日本を眺めてみてはじめてその本質をつかむことができることにも通じるものであろう。

昭和三十四年度を回顧する

野田 憲一郎

昭和三十四年度は我々の山岳部が創立されて十周年を迎えた意義ある年であると同時に部の方針の一つの転換期であった。三十四年三、四月の春山合宿には黒沢川上廊下の積雪期初探断が三〇名余のメンバーと後輩上のＢＣ、四つのキヤンプという、我々としては初めの大規模な極地法によつて成功した。このような困難な計画がたった一度の計画で成功した直後であるだけに、この年のリーダーに指名された私としては、又一に一つの大きな目標が達成された後、次の目標が確立するまでの混乱の発生と、オニにそれに伴う部の結束のゆるみ——即ち、山に対して安易な考えが生れはしないかということ——の可能性を恐れた。もう一つの問題は、ここ三、五年来急激に増えた部員の数に對し、これを完全に引つぱつて行くこと、つまりこれまでとは較べたいに大きくなつた部の中でのいかによく各個人の円熟な登山者としての成長を達成するかであつた。前述の上の廊下の計画はこの大人数をうまく利用して

行なわれたものであつたが、極地法には上級部員以外のメンバーの自主性の發揮のキヤンプが非常に少ないという欠陥があるので、これを繰り返す方向は好ましくない。

以上の三つが三十四年度の基本的な問題であつたが、まずオニ、オニの問題についてその経過を述べよう。新しい目標や方針は実際には一タームにして決まるものでもなければ、ＯＢやリーダーだけの考えによつて定まるものでもない。ＯＢの適切なアドバイスと部全体の意欲の盛り上りによつて決つてくるものであつて、相手が時間を要することである。従つてこれは三十四年度一年間かかつて解決すればよい問題であつた。また三年部員を中心とする意欲的研究により次の方向を見出す努力が推進されていつた。黒沢川流域を中心とした我々の山行の流れは夏の上の廊下通行の試み、冬の後立山黒部側さらけの薬師岳東面と着実な発展している。特に冬、春の合宿に於ける現四年部員の強力を推進力は高く評価されてよいだろう。むしろ私にはこの歩みが行き過ぎになることを警戒することが必要であつた。

オニの問題も従つて、私の憂慮したような悪い方向

に進むことはなかつた。この問題は事故という形で現実化するだろうが、成功に至らなかつたいくつかの説みにあつても、それだけ困難さとか力の限界とを正しく評価することにより、事故が防がれていた。へんが今年度になつて数件の事故がみられる。これについては後に考えを述べよう。

実際には、部として最大の問題はオニ三のものでないであらうか。部員数が急増したのは今に始まつたことではなく、現々年部員が新人として我々の仲間に加わつた昭和三二年度からのことである。それ以前にはメンバーが二〇名にも満たなかつたが、現在では倍の四〇名を越える大きな組織となつてゐる。これに伴う体制の再編成は非常な困難事であるとしても、ここ三年、殆んど目立つた解決がないのは残念である。勿論合宿の形態としては三四年冬の後立山と白根三山春には剣と薬師のような分散、特に薬師では放射状登山が行われ、多人数の中にも個人の主体性を生かす努力がなされてゐる。しかし、平生の集会とトレーニングについては殆んど何の進展もなしで居なかつた。

部が小規模であつた時期にはそれだけ各個人の比重

は大であり、集会における討論やトレーニングの際の指導の場合、新人にとつても面白く、「ついで行きやすい」状態であつたし、全体の統制、計画も楽であつたと思われる。その頃は特に「組織」を意識することもなかつたであらうが、現在では「組織」の意識なしには何事をもなし得なくなつてゐる。しかしそれをどのように進めるべきか、上級部員を含む全部員がオールラウンドな能力を解るものが必要であるが、専門的分化によつてそれが阻害されることにはなりはしないかとらに根本的には、新人を教育し、しかも部全体が発展できるような体制が可能であらうか。上級部員の勉強に新人がブレイキとならないだろうか。このような疑問が次々に湧いて、ついに新しい体制の編成を産し得なかつたのである。最近のいくつかの事故はこの様な未解決の問題点をばくろしたものではないだろうか。結局、これはそれまで表立つて現れなかつたオニ、オニの問題が現実に変を思はせ始めたことを意味するものがあり、それは現在のメンバーだけの責任ではない。根本的に我々の部の中に根ざしてゐる規模と組織との矛盾である。我々の伝統を守る為には、この問題を解決することが第一に必要であると思ふ。

1959年度

冬山合宿報告

△ 59年12月・60年1月 △

I スバリ岳・赤沢岳周辺

前回まで数回の積雪期ローラーは、少数の上級部員に高度の能力を期待する一方、他の部員は殆んど受身の山行に終始する傾向があつた。従つて今回の合宿には、各人の自主性を尊重し上級部員の多くにリーダーシップを托せざる為、少人数のパーティを各地に分散させ、拙劣して多角的に行動せしめる形式が望まれた。これに加えて新人を訓練を訓練すること、又ゲレンデ化していない新鮮な目標を選びたいという要求とを巧

I スバリ岳・赤沢岳周辺

1. スバリ岳 西面
2. 赤沢岳 西面
3. 大沢小屋 生活
4. 食料 報告
5. 装備 報告
6. 冬山のための偵察行

II 白根三山—大庭松尾坂

1. 食料 報告
2. 装備 報告
3. 冬山のための荷上げ行

みに組合せることが計画作製の上で荷心した所である。この形式は都としての大きな成果は得られぬがそれよりも個々の部員の単なる技術以上の成長の方が重要と思はれ、これは来るべき業師叙の攻略の為にも必要なことであつた。合宿は北アと南アに別れた。

1 スバリ岳西面

大町トンネルの南通は黒部流域の山々に新しい可能性を与えた。元来これらの山々はアプロチの困難な所から下廊下横断に思われる如く長期間の地味な忍耐

の対象とされていたものが、入山が乗降的に容易になつた為、北アの中核を直ちに突き得る軽快な登山の対象と看做される様になつた。どこかで我部の黒部流域の伝統を新しい条件のもとでとどめるこの地帯がとりあげられたのである。本計画は、33年5月突戸08による赤沢箱之耳周辺の登攀及び新に34年秋の三回の偵察をもとにして赤沢岳西尾根(箱の耳峰を有す)とスバリ岳西尾根(中央稜)を黒部側から登攀することにし、更に新入訓練の為大沢小舎をBHとしてここから直接赤沢スバリ間の主稜線に至る尾根を加えた。西面の尾根は、共に短いが急峻で頂上直下に頭着な岩峰を有し中級技術の満足に適し漸く充実をみせて未だ多くの中堅部員達に好適と思はれた。

12/25 大段巻

12/26 大町からトランプで大町ルートを経てトンネル通過、赤沢口に至る。途中日向山脚電單車所へ挨拶に寄つた。朝日で大沢隊は大沢小舎に向いスバリ隊赤沢隊とそのサポート(村井、金子、米沢)は赤沢口で下車、以後各隊全く独立して登攀行動に入つた。

A スバリ隊 山田村Ⅱ、山本Ⅳ、西村Ⅱ、前沢Ⅱ、

高橋Ⅱ

12/26 晴れたり曇つたり赤沢隊と別れ、村井等のサポートを受けつゝ、工車甲の足場を伝い黒部河畔に降り立つた。作業は林止され巨大な鉄骨やコンクリートが壁に巨大な赤沢の絶壁に亘々どくつていついてゐる。右岸の一部をザイルでへざり、大スバリ沢に入つたが、河原の石の上に軽く乗つた雪は意地の悪い落し穴の連続で崖か五百米崖んで左岸に設置した。この沢は狭く暗く陰鬱でさえある。10:30トンネルに入る 11:00赤沢口、2:30スバリ沢出合 4:30サポート引返す、6:00テント設置

12/27 晴れ雪、本日はテントを直める前段階のボツカである。秋の偵察通り左岸の台地を迂行し尾根の側面に降りついた。猛烈なラッセルで、時には胸まで埋まり踏めども踏めども手ごたえなく程なく消耗した。稜線末端の千八百米附近にテポレ下る。登り5時間のところ下りは僅かに20分で啜然とした。7:15袋 11:15尾根取付き、4:20デポ4、45下山5、10取付点6のテント

12/28 雪、テントを昨日のデポまで進める。昨日のテ

ツセルの爲行程ははかどるが、雪は登るにつれ乾燥
シアワが盛んに足もとを濡れ、せつかんの踏み跡をく
づしてゆく。ブツシユの中なので危険は感じないが、一ヶ所
ナダレひも30m一杯につかつて崖に切つたせいで屋根上
にテント地がみつからず、捜し廻りた拳可断崖につき
出し、道のテラスと木の枝でひろげて我々五人の相ぐ
らとした。足下に黒部を背後に立山級をひかえ猫の耳の絶
壁を仰いで身震いする様な眺めである。10.10巻、6.0。テ
ントに入る。

12/29 小雪、本日は二千三百米までテントを更に進める
準備としてフィクスとボツカをする。秋の偵察で、ド
を上げるのに最も困難と予想される部分である。10xの荷
をもち樹林中の急な尾根はまるで木登りで苦しい。50m
一杯にフィクス、予定の半分も進めずデポ。

7.45巻 2.20デポ、3.40テント

12/30 快晴、昨日に引續いてフィクスをシッ、デポを進
め二千三百米にともかくも達してみることにした。昨日
一日がかりで南拓したルートを一時間ほど通過した。初め
て足跡を印することの難かしさ、「未知」といって重荷
はより大きな試験である。更に三ヶ所各々30m一杯にフ

イクスレデポを進めた。最後の百米はブツシユコギと
ラツセルを重直にやらかした様なものであつた。悪場
を踏えて二千三百に達したが、いまだ樹林帯は終らずス
バリカピーフも見えぬ。得難い快晴の一日、隣の新
之耳は白い怪猫宣しく我々のケチなブツシユ中の苦斗
をあげ笑つてゐる。

以上四ヶ所のフィクスをした。これもテントを上げん
とした爲であるが、予想以上に悪くことに徴収の際思
はぬ困難にぶつかるとある恐れがある。山本と勘藏の結露、
テントはこれ以上進めぬことにし、ここ千八百から二
千八百のスパリまでビバーク營帳で一氣にアタックを
することにした。8.30巻、7.40デポ、4.30二千三百
5.20テント

12/31 小雪後晴、ラジオはしきりに山嶽地帯のナダ
レを注意してゐる。天気図上に三つの低気圧群が手を
つないで我々をうかがつてゐるので警戒とした。気温
は高く10℃ほど

午後から雨となり天幕の底が氷になり始めた。ナイフ
で穴を明け排水するが一面に濡れとほる。今日は大晦
日、夜中にラジオ入れるとオカシシンフォニーをやつて

いる。濡れたシラフに頬を埋めて雑音から台唱をより分け聞いた。

1/1 小雪 デボを回収しようと思ひ出しかけたが夜未の時で雪が不安定なので翌合した。元旦の一日、トラムアにウイスキーをなめ、たら寝喰つて騒いだ。横着な奴程タフだ。

夜、星が見える。アタツク態勢で就寝

1/2 「快晴に起きろ」とキープの西井の声をうなり目前にヌツと朝のソバ区山盛りつぎ出した。ケの巻（アタツク）田村、山本、サポート前次、高橋（満天の星が氷りついでアイゼンがよく見える。暗闇の中へツドラムとアイクスをたよりに悪場を早々に通過した頃、立山がモルゲンロートに映えた。二千三百からワカンをつけ緩傾斜の柴が尾根を高橋と前次をランセにたてて急ぎアの頂上下の岩峰取付さにつく。こゝでサポート区歸し岩場によりついでが、素に相異して粉雪の軽く乗つた岩場は、みかけのいかめしさに似ず殆んどザイルを要せず突破し30頂上。すでにアの頂からがスガ巻き始めていたがこの時にはかなりの風雪となつていた。帰路は往路を志実にたどる。風雪のフライミ

ングダウンは登りの数倍も緊張させられた。しばしば下からの吹き上げに目が氷りつき、若しはみづいてこらえる。途中視界のさかめままとんでこない方向に降りかけ磁針とかすかなアイゼンの跡でもとに突つたがこれが最も恐ろしい瞬間であつた。樹林帯に入つて我に返えり、遅い昼食を取る。めぼしい樹の幹に生ま生ましく大きなナタ目が入つていたので危く初登攀を疑うところであつたが、帰路を案じたサポートの仕わざと判明した。アイクスを一部回収、全所要時間2時頃、成功の夜は話はずんだ。「今夜は無礼講やな！」

4.00 起床 5.00 巻 7.00 二千三百、9.00 取付、この頂から天候悪化 11.30 スバリ頂上 11.40 下降開始 2.30 取付 3.00 昼食 5.00 テント

1/3 曇、微収、入山時より雪が安定してあるきやすい。工事場は全く人影がなく、風雪のやすがままである。荒涼として砂浜に忘れ去られた廃虚の探だ。トシネルを出、タクシーで大町へ。黒部の雪がいつぱいくつついたザックをホームに積みあげた。一斤の雪もない大町ではこの雪はなにもものにもかえがたく思はれた。

1130 赤沢、大スベリ沢出合 5.00 赤沢変電所

〔後記〕赤沢スベリ両西尾根共頂上直下にある雪氷の附着した岩峰の突破にかなりの困難を予想し、この背テントを出来るだけ尾根の上部まで上げてアタツフの行程を短かくしようとした。しかし、まゝ尾根にテントを上ることは容易でない。即ちアタツクの負担を多くしてテントは低きにとめておくか、或いは無理をしてでもテントを上部まで上げアタツクにゆとりを与えるか。我々は後者をとつたのであるが、又者を試みれば、岩峰の困難さを遙大に見積つて不必要に重量でスピーディーな行動を制約する結果になつてゐることには北アの様に冬期晴天のない所ではスローな方法がナヤンスを避がしやす、しかし本年は雪の到来が遅れ岩峰の雪氷が少なかつたので本年の採相が常にあるはまるといふぬという見界もあつた。

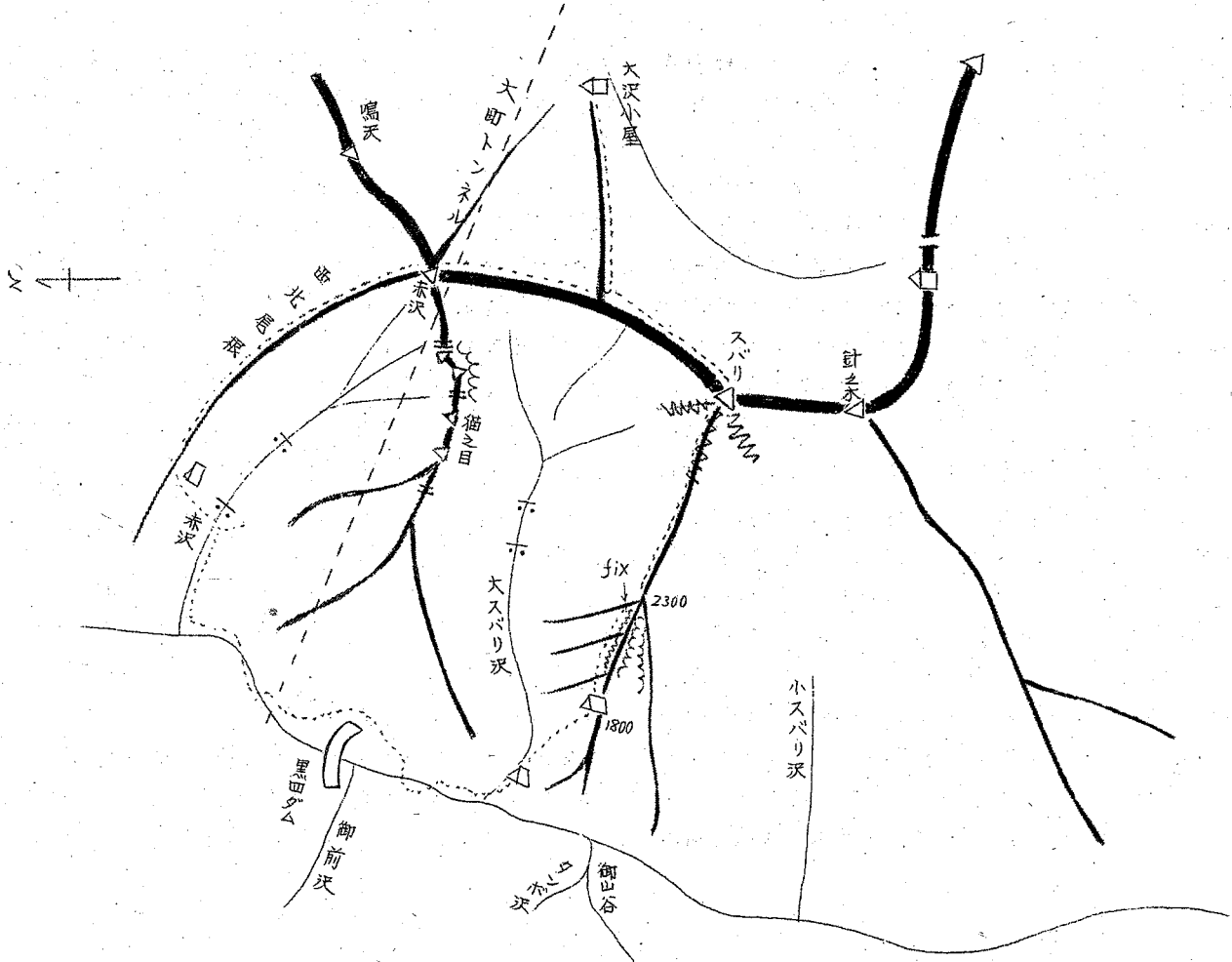
いざれにせよ、久しくスローなポーラ登山をこつて来た我々には一つの方去上の又者の契機を与へてゐる採に思ふ。猫の耳峰の失敗は電力工事の苛き分再攀をばかれないので残念であるが大スベリ沢測から比較的良好なルートが得られそうなので遠からず冬季登攀が行

なはれるであらう。取進した西尾根は変化や困難を求めると味はないが、阪大による鳴沢尾根、猫の耳などを含めた一連の尾根群の登攀を完成する一端として意義を認めたい。大沢小倉は初級訓練の目的を充分に果たした。即ちテントマナーからスキーワカンアイゼンにいずれの舞台をも備へ容易な尾根を得て稜線の経験をもあわせ得た。又大町に近いところから忙しい中であつた。又次々と見え現役との交観が見られたのは大きな収穫であつた。

2 赤沢岳西面

一九五八年五月、突戸、玄瀬OB 現役四名が、主山より黒部へ下り、赤沢にテントを出し、赤沢岳西面の登攀を行い、猫の耳と呼ばれる顯著な岩峰の並んだ西尾根の詳細が明らかになつた。西尾根はピークより大小の岩峰を連ね、その両側は、切り立つた壁となつてゐる。

後主山西面における行動の一端としてこの尾根の途中にテントを一つ出し、ピークへのアタツクを計画した。西尾根の取村良良は猫の耳を含む、岩峰群の突破には



はかなりの困難が予想された。

結果は、赤沢を取村奥迄行くことが出来ず赤沢岳西北尾根（赤沢と鳴沢の間の尾根）にテントを出し、赤沢岳頂上を往復した。

行動概要

期間 12月26より1月1日。

メンバー 田井山、谷垣、米林、玄橋、日、村井山、金子、米沢

12月26日（小雪） 8:35大出着、9:45南極黒田建設事務所10.00大町トンネル着、大沢隊と別れる、10:30トラック、トンネルに入る、10:45黒部側出口着。スバリ岳隊と別れる。11:45出発。きれいに除雪された道路を拓へど下る。赤沢岳西尾根の巨大な壁から絶えずミヤマが落ちてくる。すざましい壁だ。黒部赤沢合会より少し上流の赤沢左岸の能谷証飯場の小屋を借してもらった。15:30

12月27日（小雪）

米林、田井、玄橋、赤沢偵察、9:20出発、赤沢は埋れているが、大きな岩が出ていてそれを越すのに苦

勞する。雪がふわふわでよくもぐる。

ラッセルを走けたが、ピツツはあがらない。10:45前方に5mぐらいの崖が露出しており、危険が予想されるので、引返す（11:15）飯場。かなり高い所に枝トンネルの口が明いているらしいので、午後はそちらを偵察した。（13:00出発）黒部側へもどり、雪で埋つた道路を伝つて、トンネルに入る。送風機室より外へ出してもらった。（15:00）赤沢はかなり低いところにある。30分程上へ登つてみた。行けば事は無いが、雪崩道で、新雪が降つた後の微収の争が心配である。送風機室へ下り、番人に聞いたが三十日より正月中閉鎖してしまうとの事で通行出来ない。赤沢からこゝへ直登するのは不可能である。（17:35飯場）村井は、西尾根を偵察したが、飯場より、西北尾根にテントを出すことは可能だ、との報告だった。以上の状態より西尾根をあきらめ西北尾根よりピークを狙うように計画を変更した。

12月28日（小雪）

全員6:20出発すべ尾根にとりつく。木の枝にからと

に着いた。2ヶ所急傾面にフイツアスザイルを張つた。雪が巨んどん敷しくなつて来た。12.00がスの中でテントを張る。13.00夕名テント入り、他の3名下山。大沢小屋へ

12月29日(小雪) 雪の中を偵察に行く。10.00出発尾根は細くなり、大きな岩がごろごろしている。樹の間の吹き廻りに落ち込んで苦勞する。時々蒸日がさし、黒部や猫の耳がガスの向から見える。赤沢は、険悪な様子を見せている。12.153つ目のヤマツブ。森林限界迄、見通しがついたので、食事をすまして帰る。13.15 テント着14.15 明日は天氣が晴れ出来そう。

12月30日(晴)

アタツク田井、米林、サボート

云橋、谷垣

5.40出発。ライトをつけ、昨日のラツセルを頼りに進む。森林限界へ出る迄、木登りが続く。10.00、10.40食事を、木の向から猫の耳の姿の姿、フアイトを燃やす。11.20森林限界を出た。12.00岩峰が出て来たので、輪かんをアイゼンとはきかえる、サボート隊と別れる。雪をかぶつた岩稜伝つて直上、別に危険な所はない。13.00ピーク、風もほとんど無い。暖い日だし薬師岳が

はるかかすんでいる。スバリ西尾根下部にオレンダ色のテント発見。田村隊の足。連中の苦勞が思いやられる。主稜線スバリ赤沢岳のノルから、数名こちらへやつて来る。大沢隊は、28日下山した村井と再び頂上で握手。14.00迄、春のような暖かさの中を快適に下降。行きそこなつた猫の耳をいつかは登つてやるぞと睨みながら。16.20テント着

12月31日(曇、風強し)

天氣がくずれそつなので、急いで撤収11.00出発、赤折稜線を頼りに、どんどん下る。すべるように赤沢へ13.30 変電所まで泊めてもらう。

ノ月ノ日(曇)

トンネルをぬけ、大沢小屋へ入つた。

〔後記〕

目的とした西尾根に取付く事も出来ず、失敗した雪が予想以上少なく、取付き迄、赤沢に上る事が不可能だったのである。その矣、偵察も足りず、若え方も甘かつた。

テントは出せずとも下からアタツクを行ける所迄出

す事も考えたが、前述のようは事情及び天氣の資で出来なかつた。

未沢岳西面、スバリ岳西面は積雪期、無雪期を問はず、高度の登攀の対象として今後が期待される。終りにトンネル通過に御無理を御願ひした南西電力に添く感謝いたします。
(田井)

3 大沢小屋生活

期間 12月25日(雪)ノ月3日

メンバー 大工原、笠松、打出、錦田、三沢、

峯田、森、大角、村井、金子、米沢

兼清、李中郎、岡本郎、松原、岡田郎

12月26日(曇後雪) 田村産を見送つた後、藪とこれに荷物の山を見て、ランざりした。死角未末のだけの荷を持ち、あとはデポする。//30出発、夏道は台風のためくずれて分らず、河原をランセルする。重荷と深雪にさつぱり進まず、小屋までいやに遠く感じた。5分大沢小屋着。少し休んでから、しばらくお世話になる小屋をさうじして居心地を良くした。

12月27日(小雪) 6.00起床。大工原、笠松は尾根の偵察。我りはデポを取りに行く。目録の尾根はスバリ、未沢の中間から、真直衆へ下りてくるものである。取付は小屋の正面。何のことはない。裏山に登る様なものだ。取付いてみたが深いランセルには参つた。それでも下りがないので高度は確實に上つていく。林をぬけて、いくらか木のまばらな所にテント地を見つけた。//00テント予定地。こゝで列返す。打出達は午後からスキー練習

12月28日(雪) 4.00起床。テント予定地へポツカすることにしてパツキング。8.00出発、所が、きのうのランセルがあつたので、決断に登り10.00には予定地につく。さらには上に上げるべく、ランセルするがここからは難殺する。少し行くと、130mくらいのナイフリッジあり、そこを過ぎた頃から、雪と風がはげしくなつて来た。デポすることにする。12.00デポ 14.10小屋着。今夕から一斗缶利用のルンペンストーブを使ったので、薪がよくもえる様になり、小屋生活も快順になつて来た。

12月29日(雪) 4.30起床、きのうのデポをさらに

上にあげるべく出発。7.30出発 9.00デポ地、デポはそのまゝ、空荷でどんどんラッセルしていく。2000M附近に良いテント地を見付ける。12.00テント予定地。すぐテントを張れるようふみかためた。14.40小屋着。小屋には村井以下のサポーター隊員が、兼清、卯3名計7名が来ていて、にぎやかになつたが、はまい小屋は足の踏み場もない程になつた。

小屋の横にV2テントを張り村井、金子、峯田が入る。12月30日（夜晴）卯が来ると、たちまち晴れた。5.00起床、5.40出発。今日まで見えもしなかつた陵線や爺すら見える。晴れているので増々快調に登り、5.50デポ地着。ここから兼清以下精鋭のラッセル隊が先行あとはボツカする。テントは予定地よりさらに上げ、2.0.0M附近に張る。10.50テント地着、テントに空の中卯、金子、錦田、赤沢が入る。テントを張つてからラッセル区進む。12.00テント地着、途中10M程戻す。あとはただ登るのみ。案外あつけなく、陵線に出た。13.00の陵線。之山、爺、耳が正副内だった。新人の他は赤沢往復、15.50小屋着。村井、森、大角直ちに下山、あとはストーブをかこんで話に花が咲いた。

12月31日（曇後雪後雨）7.00打出、三沢、峯田が上のテントへ連絡に出る。あとは朝霧坊を築しむ。昼から薪取りとそうじをして、新耳を迎える準備をした。門松も立てた。上のテントでは、針ノ木往復を目標に出たが、悪天候のため、スバリにて引返す。堀卯、岡本卯下山。夜になつて雨になつたので小屋の横のV2テントを撤収する。

1月1日（曇）上のテント撤収のサポーターをすべて準備している所へ、赤沢隊の連中がやって来た。そうこうする内に上のテントの連中も撤収して下つて来た。小屋内騒然。食糧探、食い放題を宣言する。

1月2日（曇後雪）5.30起床、小屋の中は、入でござつたがえし、岩の清潔さは全然廻られない。大工原以下名附近の、ゲレンデ、ヘスキ一の練習に行く。食糧はだぶついている。

1月3日（曇）最後のモチをたらしく食う。7.20小屋着、10.10トラック道、トラックが正月でないのでスキーで下る。13.30大町着。ク名与兵衛氏宅へ。あとは直ちに帰阪。

4 食料報告

この冬期合宿は分散の形式をとつたためスバリが五名、赤沢が四名といふ少人数となり、食料の重量に強い制限を受けた。

少し高くなつてお軽くする様にこのことで主に重量を減らす事に努力した。

ノ 概 要

一、重量を減らすに重量を減らす為いろいろ考えをが結局モチを焼くのをやめた。その代りソバ、小麦とした。

二、豚肉を茹であげて使用

三、アタック食は前年同様取つた。

四、梱包はすべて一斗缶を使用し、初めはCI、CIIの食料を完全に分けて荷上げしやすい様にする予定であつたが、パーティーの入数が少く食料の各量が少い為又時直前にもあまり余裕がなくうまく行かず各パーティーに迷惑をかけた。

五、日数はスバリ十六日分、赤沢十一日分とした。

六、朝食を作り始める頃はまだ行動、停滞の区別は

つきにくく、食料でこれを区別するのはどうかと思つたが重量を考へてやむをえず行動食と停滞食とを区別した。

七、乾燥ホーレン草を作つたがこれは色をつけるという以外あまり意味がなかつた様だつた。

二、一日分の重量及び価格(一人分)

一人二千五百円の合宿費の内、食費としては大体二千三百円程度であり平均して一人一六七円程度となつた。

重量は一人一日分の^約六^{ポンド}程度(容器ポリエチの袋等を含めて)であり軽く出来たがその為少々かさばつたが仕方なかつた。

三、熱量、栄養価の表は山日記、時報等を参考として大体の見きをつけて行つた。

主食として小麦、ソバ、パン、カンパン、クラッカーとしたがオートミール等も考へて見たがこれは時間がかかり過ぎる様なのでやめた。(作るのに) 練はサイの目切にして茹であげてカレール粉、コンシヨウで味付けをしておいした。

これによつて豚肉の重量を大分軽く出来た。梱包

についてはすべてをダンボールに仕入れたのであるが夏の例や今までの例から見てその強度を良くすることには自信がなかつたので一斗缶とした。

又少しでも変化をつけるためカンパン、クラツカーをそれぞれパン、大米と組合せた。食べた者の意見ではやはりモチは少しでも食べた方がいいこと又アタック食の袋が弱かつた事アタック食に水分のあるものもつと入れる事、乾燥ホーレン草はあまり意味がない事等であつた。

アタック食について

これは軽くて食べやすい事を目的とし費用の差はあまり考えない事にして計画した。

これはスバリ、赤天各パーティ共に二名づつとし一人ニ袋とし、一袋には大体ニ食分程度を入れた。飲料用としてスキムミルク一箱を用意した。これは濃くとかれて出発前にテルモスに入つてかへ携行する。

これは登用であるが他の食料は一般の食料の中からお持ちして行つてもらう事にした。費用は一人大体二百四十円(一袋百二十円)であつた。

なお僕としては冬山合宿は冬期休暇が初まると同時に出発するし又年末で学校の方も忙しいのもう少し早く決めて旅を決めてほしかつた。

アタック食内容

カンパン	1/4 袋
クラツカー	1/2 本
粟オコシ	一 枚
ラスク	適 量
ビスケット	適 量
角パン	二 個
チーズ	一 個
チヨコレート	一 個
ブドウ糖	二 個
甘納豆	適 量
スキムミルク	一 箱
豚肉(ポリエチ袋入)	一 斤

(但し右表は一袋分についてのもの)豚肉はしよ油とサトウで煮つめたもので全体をポリエチの袋でつつんである。

献立表

(一人一日分)

食	昼 食	朝 食	行 動 日	行 動 日	行 動 日
カレー粉 フラツカー め 米	シヤム 臭ソセージ チヨコレートチューブ ミカン(普通の小型) バター カンパン(三共)	食 糧 切 干 乾燥ホーレン草 フカメ パンスープ バター クランカー		一袋 一本 一箱 一箱 一箱 一箱 一箱 ニケ	一本 一箱 一箱 一箱 一箱 一箱 一箱 一箱 一箱 一箱 一箱
中華ソバ 豚肉 蕨 ホーレン草	又は紅茶 サトウ ミルク バター カンパン	食用油(リボン) 切 干 ホーレン草 豚肉(加工) コンソメ 中華ソバ	五〇〇 五〇〇 五〇〇 五〇〇	三〇〇 二〇〇 一〇〇 一〇〇 一〇〇 一〇〇 一〇〇 一〇〇 一〇〇 一〇〇 一〇〇	五〇〇 五〇〇 五〇〇 五〇〇 五〇〇 五〇〇 五〇〇 五〇〇 五〇〇 五〇〇 五〇〇

スバリ	赤 沢	
一〇 kg	一三 kg	BH
二三 kg	二三 kg	CI
三四 kg		CI
六七 kg	三六 kg	計

重量表

なおみは適量を表わし、昼食のみカン、チヨコレート、チユーブ、シヤムはどれかを選択する。又カレーベルチャハンも同様である。

その他コシヨツ、ネオシロヅンを含む。
 なおサポート隊の食料の一部は黒部のトンネル出口
 附近にデボ中、除雪車に飛ばされ紛失した。

タ	
ベルチャハン	一袋
食用油	$\frac{1}{20}$
乾燥ホーレン草	$\frac{1}{20}$
辣肉(加工)	五〇子
× ガシ	一匹
塩	一〇子
切 干	一〇子
× リケン粉	一〇子
茶	一〇子
食用油(リボン)	
コンソメ	$\frac{1}{15}$
切 干	$\frac{1}{20}$
× ガシ	一匹
塩	一〇子
茶	一〇子
(カレー粉を使用してもよい)	
× リケン粉	一〇子
切 干	一〇子
塩	一〇子
茶	一〇子

5 装 備 報 告

今年度より新しく使用した装備を冬、春まとめて報告する。

テント、テトロン製内張りナイロン

ツエルト、テトロンと綿の混紡の折20マイルを新保氏より寄贈していただいたので図に示すような寸法のツエルトを二張り作った。そのツエルトの下端にはテープを入れて中に入ったものがこれで下をしばることにより尻の下へ巻きこんで風が吹込むのを防ぐ為である。布地には特殊な加工がしてあり全く通気性がない（これは全く雨がもらはないという利点でもある）この為両サイドにベンチレーターを備えた。張線やテースは凍結予防のケールナイロンである。

ザイル　冬山より日本製綱より寄贈していただいたのは22mm、30mナイロンザイル（赤色）二本を使用した。

又フイツクス用ザイルとしてこれまで古い12mm麻ザイルを使用していたが冬期のスバリ岳パーテイは少人数でしかも相当量の麻ザイルを要する為、^{synpa}の麻ザイル

を専用として使用することになった。帝國産業の大量採の好意により原価で300m入手出来た。これが便利であるので春期叙岳パーテイにも400m新たに使用した。このザイルは200m又は300mの長いままで受取るのに適当な長さに切つて使用し、FIXの際の無駄を少し出来るのも利点である。

バーナー　春山用に新しく二つ購入したが予算の削減と試用の意味で一つは国産の中型バーナーを買った。構造、外觀は中型ラジウスと全く同じであり火力が少し弱いが生能も似ている。他の一つは中型プリムスである。プリムスはパーネジからガスが漏れるものがあり既につけたが冬度のも合宿の半ば頃少しもれたがアルミ箔でパツキングダレて止まった。この他に春山用にゴッヘルニ紐、ハーケン2本スキのシュピツエーを購入した。

6 冬山のための偵察行

猫之耳峰は既に我々の詳しく知る所であつた。しかしスバリ岳西南中央稜は横雪期の対称として取上る為

には我々自身の体験が必要と思われたので、次の三日の偵察を行つた。

1. 田村、保母

10月7日 大町より函電ルート、大天小屋を逐て針之木小屋に入る。途中大天小屋裏より赤沢スバリ向に至る尾根を觀察し、良好と見た。又針之木頂上から向題の尾根を眺め、明日の見当をつけた。即ちスバリ頂上からこの尾根を奥部へ向つて下るのである。7:30大出トラツクにより2:00赤沢、10:10大天小屋へ針之木小屋

10月10日 険悪な様相を呈する頂上直下の岩峰群はあつてみると簡單に下降出来ず三時前までアツシエに入つた。こゝから下は立山側から入るパーティーが偵察してくるので逐食後かき返し更に赤沢まで足元のばして尾根を側面から眺めた。結局「未端は急峻だが向題はあるまい向題は頂上の岩峰群に雪氷が如何に附着するかにある」ということになつたが、これは誤りで、後に打出前沢の立山側からの偵察により尾根未端附近に向題があることがわかつた。

4. 偵察 7:40スバリ、10:00引返し赤沢へ3:30スバリ

2. 赤沢 7:40針之木小屋

10月11日下山

2. スバリ西尾根偵察

10月8日、10月13日

メンバー 前沢、白井、打出

出発前、大町で、函電に行つて、奥部や四谷電所ダム現場の立入許可証をもらつておいた。この紙片のおかげで、トンネルも通してもらえた。

9日早朝、富山の函電出張所や安山帽を借してもらい、立山に向つた。丁度、快晴で、バスから見た赤沢ヶ原が大層美しかった。秋という季節は、魔法使いかも知れない、スカートをはき、ハイヒールをはいた女柱が来るからという理由で、立山を山と思つていない山男に見せてやりかけた。

一の越から、トンネルの出来る前のポツカルルートがある。タンボ沢への道を下つた。御山谷よりは、西尾根がよく見えなからである。タンボ沢に入るにあの古いカール状のところを端から端まで木馬道がついており、並に道もないのでその上を歩いたが、久しく練習してはなれたため、こわれていて、歩きに

くかつた。長くば沢のみみじが、又美しく、見わたすと、空の青さと、樹々の黄色ばかり目に入った。

向もなく工事場についたが、上から見ると小さく見えだが、近よつて見て、その大きさにおどろいた。馬鹿でかいダンプカーが普通のトラックに見える程で、一本どこに何千人もの人が居るのかと思つた。

翌日、尾根にとりつてい見たが、ブツシユがひどく、かなり上の方まで登つたが、岩峰につき当り、引きかえして来た。後で検討して見ると、高に比して半分ぐらいのところの氷生した尾根に登り、主尾根に出るとこの岩峰につき当つたらしい。しかしこの経路が、十一月の偵察に役まつた。

尾根は二千米附近で、急な坂がついており、大スバリ沢側の支尾根は、大部分上流が岩峰で坂がついていて、ルンゼも上流はかなり急である。

翌日、平まで往復したが、小スバリ沢の方から取附くのは、トンネルの箇所から無理に思えた。

十三日 朝のバスに乗せてもらい黒田を出発してから登電車に乗れ、大坂に夜着いたのは驚いた。山から帰つたという気がしなかつた。

この山行では、困難のお世話になりつぱなしであつた。(打出)

3. 前二回の偵察を綜合した結果一尾根を未踏で二分する巨大ながしの附近に危険地あり、三又取村奥も明確でない、三更に冬期にトンネルを念めてダム工事現場の事情をも現地ではずねて見る必要がある。等から三度目の偵察となつた。田村、平田、打出

11月2日 大町日向山南麓事務所の御好意により、シーフに履装とせて貰いトンネルを抜け大スバリ沢出合よりや、下流右岸砂洲上にテントを張る。立山側の斜面を少し上つてスケッチをし、ルートを考え、容易ではなさを考へた。

11月3日 大スバリ沢を溯行し、昨日目ボシをつけておいたルンゼをためて尾根に出た。状態はさがる悪く冬の軟雪は更に不都合を倍加すると予想された。しかし充分なフィクスエ作をすればテントを上げ得ぬこともない。

いささか悲観している所に突然な動向の気配がレキモをつぶして遊が帰つた。クマではなかつたらしいが、

ノ月々日、徴収、阿電事務所で平林技師に冬の黒部について詳しい説明を聞き、好意ある御申出をい
たいただいた。(田村)

II 南 ア

1 白根三山—大唐松尾根

冬の合宿計画にきつて、我々がまず考えねばならなかつた事は、わずかに通道の短い日数のうちにいかにして多数の部員が効率的な山登りをするかという問題だつた。一方、部の中でノタケ6年冬の比岳バットレス以来しばらく遠ざかつていた南アルプスへ再び目が向けられた。その結果、後立山黒部側と白根三山という分散合宿の形態がとられ、さらに後主ではより、小人数のパーティによるフライミングが行われたのである。

当初の計画は次のようなものであつた。鈎尾根にACを置いて比岳バットレスの一本の尾根を登り、次に白根三山を縦走して農鳥岳から前年冬神南太にドレーンされたばかりの大唐松尾根を下る。どうして後半に
より大きな比重を置くか、バットレスでは比較的内容

な尾根を登る。この観点からバットレスを研究して結果、ノタケ6年に登つたオウ尾根とその左のオウ五尾根以外はアプローナ等の問題をも含めて、我々の技術や目的には過大であると思われた。そこで一本目的をオウ五尾根と定め、月末から池山小屋への荷上げと偵察とを行つた。その結果、天候いかんによつては二つの目的のどちらをも達成できない恐れもあり、オウ五尾根にそれ程の価値もないと思われた。藤田先生のアドバイスもあり、未知の尾根の下降を含む白根三山の縦走のみに計画を変更した。

計画の概要は次のようである。池山小屋をBトしボーコンの頭附近にBC、これに縦走用の荷物を集積して、新入を中点とするメンバーは下山、他は五名で縦走、下山予定一月六日、他は五名で縦走。

メンバーは野田()、大島、佐藤、保母、西垣、(以上縦走) 五百蔵、森田、白井、黒木、尾本、次田 以上一名

十二月二十五日 富士ト身延線全由で出発

十二月二十六日 甲府着、夕刻 バスで戸安電停前、ここからチャーターしたトラックで霧の濃着、30

夏この地方を襲った台風の跡はまだ生々しいが、何
じか霧の象山までトランクは入る。ここからの急な下
りは雪がうっすらと地面をおおっている。北アルプス
の11月の感じである。荒川小屋到着後、大倉松尾根か
らの下り道を探して行くが見出し解ない。(後で分つ
たことだが、この道は林道工事の飯場のすぐ裏手に下
っていた。)

十二月二十七日 快晴、荒川小屋発6.00 荒山小屋

着12.30

北上針尾根下部の急登は10センチ程の積雪で、部分
的な悪場や、刷木は氷を苦しめた。ルートは氷痕が沢
山あり夫して座うことばない。荒山小屋では意外な幸
井が我々を待受けていた。我々が秋に荷上げした食糧
のうち、ビスケット20食、乾パン23枚(46食)、ソーセ
ージ10本、計46食ほかにローソク大部分など重要な登
食類が殆んど盗難に会っていた。そうして空の缶は小
屋の外に捨ててあった。我々の食糧は全部ブキキ缶に
入れて紙で封をし封金でしばつて小屋の片すみで積ん
であつたのであるが、内容調べたらしく、全部の缶

のフタがゆるんでいた。小屋番の話では11月頃から三
回この小屋へ来たとき、少レググ盗まれていたとい
う。他のパーティの荷上げ岳かあつたが激重にシール
してあつた者か、前ころとした跡はあつたが被害は無
かつた。直ちに今後の食糧について検討して前、オ五
尾根登攀を予定して少し多目に荷上げしてあつたので
朝食用に準備した乾パンを昼食用に替へ、朝は少々貯
向が掛るが他のものでまかなえば、例とか計画遂行可
能であることが判つた。けれども特に昼食用のビスケ
ットについては新しい試みでありその使用については非
常な期待を保持していただけにがっかりした。このよう
な盗みを登山者がするはずはないが、今後とも荷上げ
に当つては注意を要することだと思ふ。

十二月二十八日 晴一時曇 荒山小屋発6.30 10.30

砂松の頭、ボーンの頭中間に設営

森林限界までは刷木が多く、木の上を伝つて行く所
もある。積雪10センチ内外、森林限界以上でも風は案
外寒くない。期待していた砂松の頭からのバットレス
は雲におおわれていた。積雪少く、岩がゴロゴロと露
出していて良いテント地は沖々得られない。設営に選

んど場所は少々吹きだまり気味の所で、風の方向が一定していないようである。これで縦走用の荷物はここに集結し、縦走パーティがテントに入り、五百歳をリダーとするサポーター隊は池山小屋へ来る。

十二月二十九日 快晴 2.30 キャンプ発 12.00 北岳 12.00 縦走隊とサポーター隊別れる。14.00 3052Mピーク下で設営（サポーター隊はAC泊）

池山小屋から上つて来るサポーターを待って出発、縦走隊は約30キロの荷物、八本歯は雪履もそう悪くなく針金なども出ていた。流石に稜線上は激冬の気分であるが寒さは弱い。東の谷は全く雲海に閉ざれているが西側は北アルプスの連峰が眺めかろうな伊那谷の彼方に全内を現わしている。

ここで縦走隊はサポーターと別れ、向の岳へ向う。午後二時近く、ガスが巻きはじめたので早目に行動を中止し、キヤンプ。テントは初使用のテトロンテント、内派はナイロン。

ここでテントのことに小れると、ヤーに非常に薄く整く、凍りつかないので積雪期の縦走には非常に好適である。撤収時に容易に袋に入れられる。但し、ヤ

二に薄いことの一つの弱点としてある程寒風を届す。その為、テント内の温度を高く保つことができない。

この実は少々目のつんど土地を使つことのでいくぶん整さを犠牲にすれば解決できるかも知れない。またその犠牲ははらつても整さを面でもまだ充分余りあると思ふ。また、風を直す理由はナイロンの内派にあつたのかも少しれない。従来のような木綿の内派ならば水蒸気の凍結によつて織維の目が小さかれ、充分に風を防いだかもしれない。ナイロン内派りは凍らぬ代り、上昇して凍つた水分が雪になつて落ちて来るので寝袋や衣類が

湿ることになる。テトロンテントは木綿の内派ならば特にオニ目以後の装備軽量化には少しのブレイキとなるにしても相当に張力であると思ふ。この晩テント内に落ちた雪を、外部から入つたものかと考えたこともあつたが、事實はそうではなからう。

十二月三十日 晴のち高曇 2.50 出発 2.40 向の岳 13.00 西農鳥岳 14.00 農鳥岳 14.40 キヤンプ

南アルプス特有のバカ登り、バカ下りを繰り返して進む、風のない場所ではバカバカと緩く、手袋をおしても大して冷くない。西農鳥の登りは直登したが上部

では可成り傾斜が強い。西方の山々は高い雲におおわれ、この好天つづきもそろそろ降り止むことを物語つてゐる。葎鷲ピークより200メートル程下つてキヤンプ、東斜面なので高くまづ広い松の上にやわらかく積つた雪で坂道困難、曇天とほり急激に気温下る。リポート隊はA.C.から一氣に西山温泉に下る。十二月三十一日 曇時々小雪 8.30出発 13.00キヤンプ。

大唐松尾根はいくつもの大きな起伏をくり返しつつ、大唐松山に到り、次第に高度を下げ、唐松平から急に荒川へ落ちている尾根で、特に大唐松山までは細く両側は急である。

この尾根に入るまではカンバの木の混つた急なレンドを腰ぐらゐのラツセルに悩まされつつ、半ばすべり下る。尾根の背には所々に小さな岩壁があり荒川側の急な斜面をトラパスして行く。ガスがかかり時々晴れる。正午頃ナタ目発見デント地は大唐松山の手前に一ヶ所、大唐松山を越えるとしばらくない。意外にピッチン渉らず、大唐松山手前の森林中にキヤンプ。夏の樫木の跡がある。積雪量約5センチ。

一九六〇年一月一日 小雪
動いて動けない日ではなかつたが、これまで連日の行動であり、新年のことでもあるので厚着。風もなく静かな正月であつた。

一月二日 晴 7.30出発 9.00大唐松山 13.00唐松平。14.20荒川出合 17.00荒川小屋。ザンクに「初荷」の札を付けて出発。大唐松山からの北岳はするどくまつてゐる。これ以後ルートは南面で樹木が極めて多く、特に阿比山へのジヤンプシオンには殆んど主木が残つていない。唐松平からは最後まで前にのめりまうを下り積雪が少いのとナタ目で裏道がわかる。一カ所悪い岩場のトラパスがある。荒川の氷音が聞えはじめる頃アイピンを脱ぐが束つた急傾面は上りやすく再びアイピンをつける者もいた。尾根の最下部は急な草付きで足跡は不明瞭である。

一月三日 晴

夜叉神トンネルを越えて甲府へ、夜叉神峠から鳳凰三山縦走のプランも出たが、食糧畑印の結果、うまいものがないというので中止。夜叉神荘の前でトラツクを捨てる、下山、合宿を築る。

2 食料報告

この冬山は縦走形式なので荷の整理化、朝食の簡便化のためビスケット乾パン等を主にするようにした。ところが秋に池山小屋に荷上げした食糧のうちビスケット全部(ニ〇袋(一袋7枚入))、乾パン23袋、ソーレージ10本等の他計必食分が盗まれていて一時は計画通り出来るかどうか不安であったが、池山へはいりまです停帯のなかつたこと、参加人数が予定よりへつたためその導いた分をやりくりしてどうやら縦走隊を日分5隊約日分を作る事ができた。盗られたのはほとんど昼食の主食であつたがこれには朝食に予定していらぬのをまわした。

食料を荷上げしておく場合、番人のいつもいる小屋はともかくそうでない時は梱包は簡単に聞けられないよう針金でするか(これは紙、頭の黒い筋でない紙をかせる)にもよい、同じ小屋に荷上げした東京都庁のパーティイはかんをうんだまわりをベニヤ板でおおつて釘づけしの上からまた針金で縛つてあつた。それから内容は明示しない方がよいかもしれぬ今度の場合ビ

食料表 (全食料)

乾パン	38袋	ゴンソX	12本	シヤム	70食
フラツカー	30本	ミン	6袋	ミカン	14個
ソバ	40袋	カレS.B	2	餅干	30枚
モチ	30枚	王ネギ	25個	砂トツ	4斤
米	4升	切干	2K	鯨肉	4K
サーモンピゼ	25本	マーガリン	10		

() 内は一人一日分

	主 食	副 食
朝	中華ソバ (1/2)	ゴンソX (1/20) 王ネギ (1/10) 切干 マーガリン (1/10) 鯨 若干
昼	乾パン (1/2) 又は フラツカー (3/6)	サーモン (1/3) シヤム ミカン (1/2) マーガリン (1/6)
夜	モチ (1.5合) 6~7枚 又は米 (1.5合) B.H	ミン (1/10) 又はゴンソX (1/20) 王ネギ (1/10) 鯨 50子 切干 さくら干 (1/2)

ビスケット等のうまくすぐたばられる物の入ったカンドはけがあげられていた。しかしこの様な心配をしなればならないのは非常に残念である。

3 裝備報告

目鉤が鋭走であるので極力重量の軽減に専念し、結果としてはテトロン製のテント、ザイルを携行することになった。テトロンテントは新條去輩のお世話で入手した兩人テトロンです。最初はツエルトを作る予定の所、入手するとツエルトには少しもつけないと考へテントを作ることになった。

型はミッド型5人用、底布はビニロン、内張は最初本編を挟むつもりだったが安いのが手に入らずナイロンタフタを使ったが失敗であった。テトロンもナイロンも水分に対する粘着性がなく又通風性の防水が施してあったので稜線上では風がスースー通り抜けるような感じでも横から風にあおられるたびにローソクの火が消えた。

しかし大変堅く同型のビニロンテントの7割の重量であり、雪もつかず凍りつかないので撤収時間が短かくこの点鋭走には好都合であった。

この山行では雨に遭わなかつたので、防水性は未知であるが、春山でひどい雨に遭えば最悪騒ぎがおこる

かも知れない。

ザイル、三ツ道具、いづれも入本番と大悪枚尾板上での使用を考えていたが一度も使用しなかつた。

バーナーは鋭走に2台持つて行くことを考えたが甘程も短く又荷を軽くする為、最も調子のよいのを極めて慎重に取扱うこととして一台にした。

一覽表は後記の如くである。(大島)

計		冬山裝備表 (日根三山)					隊	サポーター隊		
		テント	ザイル	ミン道真ハマー カラビナ ハーアン	バーナー	コソフエル			靴 わし	スコツプ
一七、〇kg	三三、〇kg	テント 三人用 三台 テリレン 40M 三〇	ザイル マニラ 40M 四〇	一 〇 五	若干 一 〇 五	一 一 〇 八	一 一 〇 八	一 一 〇 八	若干 一 一 〇	若干 一 一 〇

1959年度

春山合宿報告

△60年3月の記録▽

I 薬師岳東面

— ま え が き —

我々、段大山岳部は一九五六年の下廊下横断（鳩沢
— 内蔵之助平 — 三山）に引続き、一九五九年上半年
下横断（赤牛岳 — スゴ沢 — スゴ尾根）に成功し、
がその間一九五六年を双六小屋 — 雲の平 — 薬師岳
ラツシユ（2週間以上の吹雪の為、失敗）、一九五八
年冬、双六小屋 — 赤牛岳ラツシユ（三候小屋横より
14時間のアタック成功）を始めとし、四季を回はず、

I	薬師岳東面	主要録函記告
1	ま行	概記ト
2	行	教報
3	行	報
4	行	偵察
5	行	料象
6	行	荷上
7	行	荷上
8	行	荷上
II	真砂尾根	録告
1	行	告
2	行	告
3	行	告
4	行	告
5	行	告

数多くのパーティを、黒部川下廊下上廊下赤流、薬師
岳、赤牛岳、雲の平周辺に送った。

一九五九年上半年横断に際し、水晶岳 — 赤牛岳の縦
断を、西に薬師岳東面をながめながら行動したが、雪
をまとつたその姿に、大いにファイトを燃やした。

薬師岳東面は、三つの大きなカール、数本の長大な
尾根、浜く切れこんだ谷、多数の岩稜、壁、をそなえ
十三百米程の高度差で急峻に黒部上廊下に下れこんで
いる。薬師岳への東からの接近は長い稜線と、深い上
廊下によつて遠ざられる。その為、有峰より太郎小屋

を迂て、乗師岳頂上附近にB、Cを作ることにした。こ
こから

(イ) A、Cを比較的容易と思はれる南稜才一尾根に降り

し、上廊下を渡つて、赤牛ヘラツシユ坂が上廊下の

偵察

(ロ) B、Cを早晩に出発し、沢あるいは、比較的容易な

尾根を下つて、金作谷北尾根より、南稜末端にいた

る面の各尾根を登攀する。

なお、合宿終了後、一帯パーティは立山へ縦走し残

りはなお数日乗師岳に留ることとした。

八月、十一月に偵察隊を出し、地形がかなりはつき

りしてきた。又同年十一月、太郎小屋へ、一部食糧の

ポツカを行つた。三月十七日大段発、二十三日、南稜

才一尾根頭にB、Cを建設以来、非常な悪天と湿雪に悩

まされながらも、金作北尾根、金作中尾根、中央稜、

南稜、南稜才一、才ニ、才三尾根、金作谷、中谷、か

ラ沢の登攀、上廊下へのアタックに成功した。

天候及び尾根の状態が悪く、テントを下降さす事が

出来ず、赤牛岳へは、アタックを送り得なかつた。

2 行動概要

期間 3月17日〜4月4日

メンバー 田井(CL3) 玉井(SL3) 打出(表)

前沢(表2) 筒齋(表2) 佐藤(表2) 金子(表3)

酒井(表計2) 宇野(表2) 黒木(表2) 米沢(表2)

平田(表4) 田端(表4) 森田(表4) 後発 田村(表3)

並松(表3) 大工原(表3) 保母(表3) 森村(表3)

3月17日 大段発

3月18日 楕谷着 有峯登山 全員折立へ(バス
トランクにより)

夕日(晴) 6.30発四名太郎小屋へ(15.20着) 残りは

太郎小屋へポツカ 太郎16.00発 折之着(表4)

20日(晴) 7.30発、全員折立より太郎小屋へ(13.50

太郎着) 独標よりスキーシールを使用

21日(強風雪) 太郎小屋停泊

22日(晴) 6.50発 乗師へポツカ2回往復 平田

森田は折立へ下山、田井、前沢、南稜才一尾根頭に

雪洞を掘る。(着7.45)

23日(晴) 全員太郎より空祠を拡張して入る

田井、前沢、オ一尾根、中央稜線察

田端、上岳往復

24日(風雪) 停帯

25日(晴) オ一尾根下降、田井、高橋、打出、前

天、酒井

北葉師往復、玉井、米沢

南稜下降、黒木、佐藤、宇野、金子

田端、太郎小屋より下山

26日(風雪)

27日(風雪)

28日(晴)

中央稜、上岳下迄、高橋、黒木、前沢

金作北尾根、中部迄、打出、金子、佐藤

オニ尾根↓立石↓上岳下↓中谷↓B、C、田

井、酒井、後突を廻えに折立方面へ、玉井、米沢

後登、田村、笠松、大工原、探母、森村、太郎小屋へ

29日(曇) 田井と酒井の凍傷を二名、太郎へ連絡

田村、探母、玉井、太郎よりB、Cへ上り玉井は凍傷の

酒井、佐藤と太郎へ下る

30日(曇) 黒木、金子、高橋、太郎へ下る、他は
停帯

31日(風雪) 停帯

4月1日(曇、時々雪) 太郎より酒井他5名下山

2日(晴)

オニ尾根↓ガラ沢↓オニ尾根、田村、探母

金作右稜↓上岳下↓金作中尾根、打出、宇野

オニ尾根下部、田井、前沢

玉井、大工原、笠松、高橋は太郎より葉師往復し一

部撤収

3日(ガス) B、C撤収、太郎へ

4日(晴) 全員、太郎↓有峯↓富山

3 行動記録

金作北尾根

3月28日 快晴、強風↓此次雪後曇

メンバー 打出、佐藤、金子

雪洞登々々、北葉師の手前で佐藤調子悪く引返す

厩跡佐藤は右耳に凍傷を負う。

北葉師より通過し北尾根の分岐点をアビに通過。この分岐点は雪庇のためよから分りにくく少しとまどつた。分岐点から少し下つた所から急な斜面となり上からは斜面の途中の部分は見えな。急になるコルをえぬに通り、そこでアングレインする。雪は新雪が表面に十センチ程積り田子になつてすべる。その斜面の下のコルが1/10。ここで高度にして黒部川までの約半分距離では約1/5程度であり下まで下り得る見通しは立つたが天気と時間を考え、230引返す。そこから下はナイフリックが少し減さその下はブツシユである。稜線は風はかなり強い、デボ地矣、谷、雪洞々の。帰りは坂線までトレースが消えランセルを強いられた。金子左耳に凍傷

金作谷及び金作中尾根

4月2日 夜 晴

パーティー 打出、宇野

春山合宿最後のアタック日である。アタックは3パーティー夫妻葉師東面の異なつたルートを目ざしている。我々二人のパーティーの目標は葉師本峰から金作

のカーブへ下りてそこからさらに金作谷を下り、できれば黒部川との出合まで下つてから引き返し金作中尾根に取付きその尾根伝いに北葉師頂上まで出る。もし下まで降りられないようなら途中から尾根に取付いて登るといふものである。

午前六時三十分ベースの葉師南稜の雪洞を出発する二人の荷物と共にゲグ内外で怪いが早朝の気温はきわめて低い。稜線上を歩いて七時葉師本峰に到着、葉師如來に安全を祈つて七時五分祠の後に下りる場所をみつけアイゼンをかきかせてカーブに下りる。雄大なカーブを背にしてなお下るとたやすく金作谷に下りることができた。谷はさすがにデブリだらけである。気温も上リラツセルがひどいので固く大きなだんごになつたデブリのの上を歩くのだが、足を捻挫しそうに歩きづらい。左手の金作中尾根を見ると、尾根の側面は雪の層斜面で岩峰もあり途中から取付くのは非常に困難である。やはり末端まで下ることにする。

谷を下り中尾根の末端の取付きへ着いたのは八時五十分。そこから少し下ると約十五分程で黒部川へ到着。出合は雪で埋まつているが、少し下流では流水がでて

いる。そこで少し休んでから引返す。九時半中尾根に取付く、取付きは岩場であるが、ザイルも使わず尾根上に出る。そこへ出るのに四十分程かかる。尾根は雪が蒸いのでアイゼンをはずしてフカンをつける。しばらく登るうち、先刻下つた金作谷に側面からあまり大きくはなれぬがナダレがニミ起るのが見られる。やはり早い時間には谷を離れて良かったと思ふ。尾根は谷から見て想像していたよりは中広く、又雪も深くアイゼンの必要は全くない。フカンが棒杓を突撃する。氷雪のたぎに赤牛や木樵山を見てどんどん高度をかせいであるのを知る。途中二十分ばかりで昼食を済ます。ラッセルを交代しながら、早いピッチで登り続け、北葉師直下の行程中唯一の悪場である急斜面でアイゼンにはきかえ、そこもなんとか登り切る。主稜線にでたのは午後五時五分過ぎであった。北葉師頂上でその日の山行に満足しながらゆつくり休んで夕やみのせまる稜線の上をしばしば歩いて六時頃雪洞に降り着く

中央稜から黒部へ

3月28日

メンバー 高橋、黒木、前天
時間

7.0 出発

7.0 中央稜上部岩稜通過

11.30 黒部着、昼食

12.25 黒部出発

4.0 岩稜取付

7.50 雪洞帰着

主稜線は相変わらず強風であるが三日ぶりの快晴で氷が良く見える。葉師頂上の小さなホコラの東側から中央稜に下る。稜線のかげに入ると同時に風はなくなり部分肉にひざを越すラッセルとなるが下りでもあり雪もかきいので苦にならなればかどる。23日にアンザイルンして下つた雪の急斜面は前日までの雪が安定してないので下れない。横の岩の露出した部分を下るがこの方が楽である。23日に引返した岩稜に出る。赤いナイロンザイルがうれしい。非常に細いやせ尾根の上に雪がのっている一番やつかしい場所をすぎ、所により確採用に二本ほどハーケンをうつ。岩稜を通過して時計を見ると九時、今日黒部まで行けそうだ。あと

はなだらかな雪後で向懸はないが、雪は完全にくさつており足をふみだすと大きな煙がずるずる巻ちていく。黒部と頂上の中向あたりで尾根が大きく二つにわかれていたがここでワカンをつけ右つまり南側を下る。岩稜に取りついていて見えていた右のオニ尾根左の金作中尾根のニパーテイも今は見えない。やがて樹林帯に入る。シリセードをして時間をかせぐ、11:30 井戸の底の松を登りの黒部の流れにまつ、少し下手にスノーブリツヂが懸つており徒渉はいたる所出来まじである。早く引返さぬと遅くなると思つてもつい昼食などで一時向近くいる。もつとかゝると思つてい松樹林帯を意外に早くくびに抜ける。ワカンははずすこの頃より雪多くなり風が出て下りのラツセルが着せられる。登りのラツセルは時間を喰う。岩稜下部に夕時着、突然一人が腹を押えて倒れる首觸だつたらどうしよう。しかし30分ほどでなんとか歩ける程度におさまる。気温が下つて岩についた雪が締りとても歩き易く助かるが、一応アンザレンする。岩稜をすざると急にラツセルが深くなる。そろそろ日が暮れだした。ジヤンクシオンまで行かぬうち完全に日が暮れ前方は葉師

の巨大なシルエントにうまつてしまふ方向がつかめない。ピツケルでたいて一番高い方へ登る。ホコシの真下へ出てほつとする。主稜へ出るととらんに強い風で此吹雪を伴つてくる。主峰を南へ下つて雪洞へ帰るの道が丘黒部側へよりすぎると雪死をはずすし右へよるとルートがわかりにくく下手すると葉師沢へ下りかねない。やがて22日の荷上げのときに残したテボを見つけ小おどりする。この時雪洞の方向にランプが明滅しているのを見つける。有難い。これまで出さずにいたランプを出し合図する。むこうも気づいたらしい。あとは雪死をはずさぬように進むだけだ。雪洞帰着の時近い。熱い湯をのむ。とても疲れた。

南稜オニ尾根

3月25日 メンバー 田井、前沢、酒井、打出

高橋

南稜オニ尾根とは、葉師岳東面の中央カールと南稜カールにはさまれた比較的傾斜のゆるく巾の広い、そして岩の少ない尾根である。

以下当日3月25日の記録と合わせ概要を記す。なお

時向は偵察しながらのものである。

さ 30 ABC 巻、ここからはところどころ岩の出ている、まわりの壁がぐい／＼と下る。向つて左側の中央カールに分れる。この辺から尾根上に岩が入りこんで出ていて、所によつては履きもぐる雪、陽の当る斜面では、はいぬまで踏出している。

右から二つ目と三つ目の沢を10m程下つてから直角に右へ中央の尾根を越し、一般、10/10 空はあくまで晴れ、右も左も氷は急で気味が悪い。一方尾根は岩が10m程垂直にせり上り、登つてみるも氷は下るところもない。

1200 左の沢の右はしを岩壁にそつて下る。日蔭になつていて、しかも吹きだまりらしくラッセルは腰迄岩の切れたところを直角に右に曲る。この辺は少しやばい。下は沢の中央迄見通せる急な天、上は岩、ザイルを使つ。沢10m。ここからは重い雪とブツシユと岳障がずっと黒部迄続いている。推定二時間を要すると思はれる。我々は見通しが立つたので帰路についた。

1340 ↓ 1515 ABC

南稜才ニ尾根——上廊下

3月28日 快晴、メンバー 田井、酒井

南稜才ニ尾根は南稜から出ている尾根の中で一番顕著な尾根で、南側はびつしりと岩稜をならべ、二千七百メートルぐらいから肩状になががたつて黒部へ下つてくる。

久しぶりの快晴に強風の中を南稜に下る。才ニ尾根の頭から、コルまでは岩稜伝い、コルから肩(2700)m迄は不定な雪稜を下つた。小りかえると、南稜側面の氷をつけた岩群が頭目の中で輝いていた。肩下の南側はくつきりとしたリッヂを数本形成している。赤牛岳、水窟岳の稜線、雪の手、上廊下がずっと見渡せるが、この尾根の直下立石めがけ、ゆるい尾根を下つた。雪はひざ迄ぐらいもぐる程度、黒部へ出る直前に、立石正面の沢をからんで河原へ立つた。氷はとうとうと流れている。食事をすませ、河原(黒部左岸)を行く。赤牛側から、竜状の小沢が入るあたりから廊下状になつて来たので、高巻きを行つた、このあたり葉吹刺の沢は大きなテマリを押し出し、雪橋となつてくる。

デブリを一つ一つ越えるが岩のそばは空洞になつていて危険である。再び両岸が廊下になつて来た。昨夏下流から来て引き返した所である。ハーケンを打ち、槍で繩をかけ、補助ゲイルを乗つて、へつた。下は青黒いところになつていて緊張させられる。あと3ピッチ料面をトラバースして要場終了。南沢必合を直り、河原広いに中谷出合着。出合は、大きな雪窟がかつている。食事をして、日没を待つ。温度が下つて来て凍り出した。雪崩の危険を感じなくなつたので登り出す。最初はしまつて歩きやすかつた。星がぼんぼん増えて来る。カール尾の上り口附近の星をコンパスとして、ラツセルを讀めた。高度をあげるにつれもぐるよつになつてくる。巖地獄が頭に送る。カールへは右手の岩稜に取り付いてあがつた。いつの間にか、要の流しが、速く星が消えている。塵かつたがチヨコレートをしやぶりながらラツセル。雪庇を避けて、岩稜の根本を伝つて南稜マ線に出た。稜線上は強風で酒井の眼鏡がたちまち白く凍りついてしまふ。磁石を出して見ていると、薄明るくなつて来た。予想以上に時間を食っている。雪洞はすぐ戻つた。

BC 登 7.00 オニ尾根 肩 55 立石 11.40 登 及 20
 要場終了 15.40 中谷出合 15.30 登 16.30 南稜マ線 5.00
 BC 5.30

南稜第三尾根

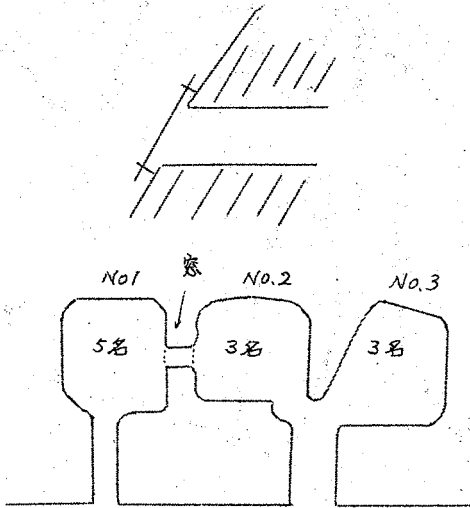
4月2日(快晴)メンバー 田村、保母
 6.00 出発 オニ尾根のコルより沢を下り、7.00 に第三尾根の支尾根に取付いた。下つた沢は広いがかなり急な沢で大小さまざまなデブリがあつた。アイゼンで膝までのラツセルだった。主稜とのジヤンクシヨンまでは平仄な雪稜。雪はアイゼンで踏あたり時に履まで来た。途中一ヶ所だけ急傾斜のところがあり、こゝではじめてアンザイレシムでアツシユに付かまりこれを通過した。以後ジヤンクシヨンまでコンティニアスで進んだ。主稜に入つてからは、つと交代確保を行つた。そこより三ピッチで小さなピークを越して昼食(11.00)。昼食後三ピッチ目が悪くアツシユの生えは岩場に雪がつき下層は氷になつていた。確保用にハーケンを一本打ちあとはアツシユに付かまり瓶力にたよつて30分一個で登り切つた。以後は岩の上に厚く

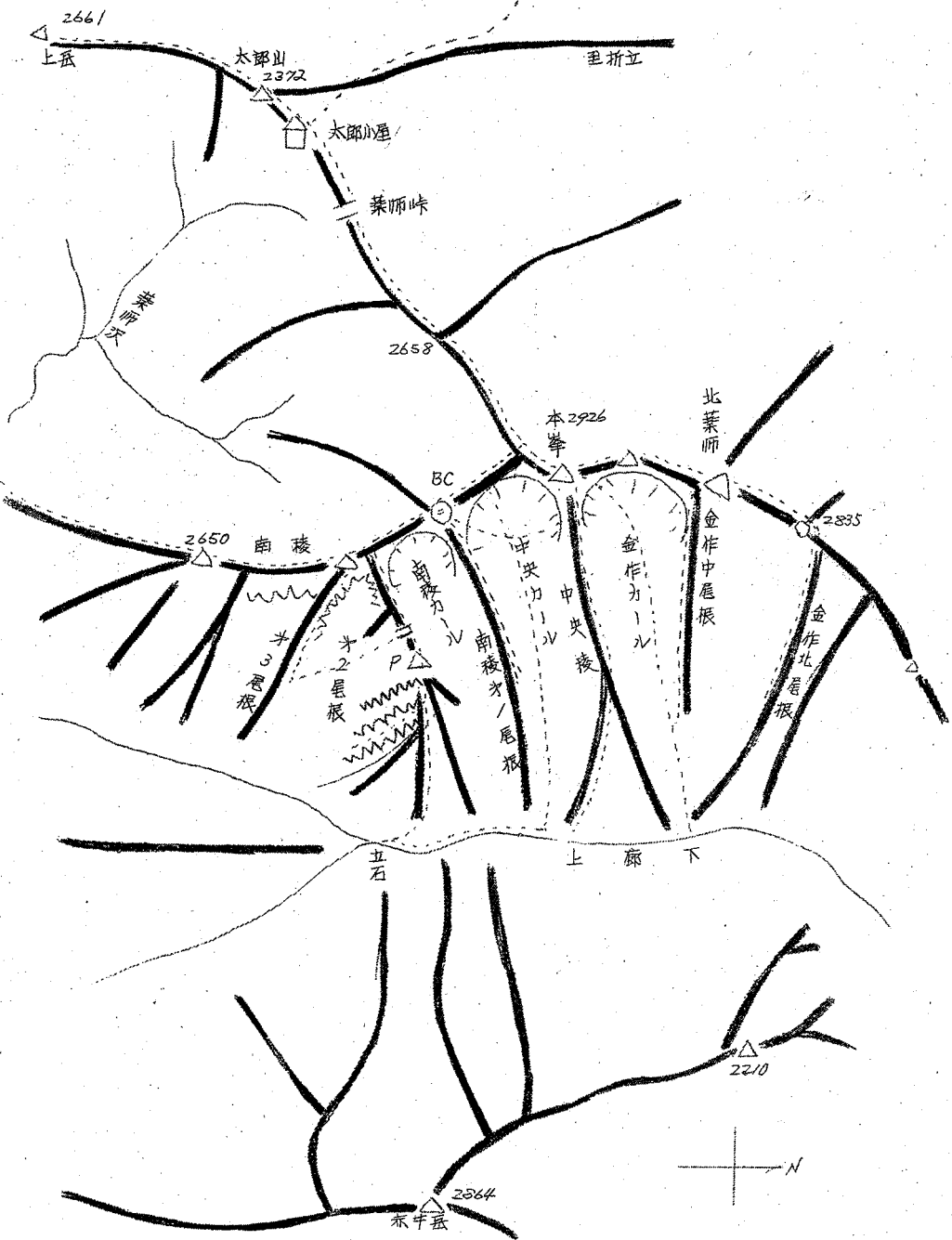
雪の積った両側が岩壁となつて下の深まで切れ落ちて
 いるナイフリツジを三ピツチでピナクル頂上に立つた
 尾根通しに下ろうとしたが雪の状態が悪く下れずニピ
 ツチ引返し南側の急な雪稜を下りコルに達した。コル
 より南側の六十度近い雪面をニピツチ登りこれより
 寒い雪にくるしめながらリツジに出て三ピツチで南麓
 に出た。そのそこには田井君、前沢君が二時間程我々
 の登攀を見守っていてくれた。緊張を解かれのんびり
 と雪洞に帰つた(5.00)、騎かんは持つて行つたが雪
 の状態が場所により非常に異なりかつ傾斜がきつかつ
 たので用いなかつた。(原母)

装備及び雪洞について

雪洞は、葉師岳南稜唯一尾根の頭に十一名用のもの
 を掘つた。やたらに大きなものは、天井がすくなく女
 る危険があるもので、下四のごとくねずみ穴式とした。
 入口をNo.1、No.2のように、共通構造としたこ
 とは成功で、雪頂も良かったが二十日近く使用したが

天井は、ほとんど低くならなかつた。
 入口の通路は、左四のように、斜面にそつて、布を張
 るべきである。通路の上を、破つたり、雪洞の中に入
 口布を張ると、雪が吹き込んだり、上から滑つて来る
 雪が、引つかかつて、埋没の原因となる。





行動予定表

	折立	太郎小屋	兼師徒B.C	A.C	赤井
3月18日	14	10			
B.Hへ荷上げ 手廻り開始日		4	10		
B.H集結 " " 日		10	4		
B.Hへ荷上げ " " 日	3		2	12	
B.C 集結 A.C 偵察 " " 日	3		12	2	偵察ルート開拓
A.C 建設 B.C 行動開始 後発入山 " " 日		5	2	5	4 偵察
赤井アタック " " 2日			5	2 連絡	2 東面 2 73% 2 73%
上廊下偵察 B.C 行動 後発B.C入り " " 2日				2 連絡	2 東面 2 73% 2 73% 3 上廊下
A.C 撤収 B.C 集結 " " 日				5	撤収 2 サポート 2 2 2
この次の日曜日 2名 有峰へ下山, 19名 立山へ出発, 5名 残留 残留者は, 4月8日朝 有峰へ下山					

行 動 表

	折立	太郎小屋	葉師抵B.C	
3.18 曇	14			
3.19 晴		4 10		
3.20 晴		2 10		
3.21 風雪 停滞				
3.22 晴		2	2 10 8	
3.23 晴	2		2 上岳	2 *1尾根 中央稜
3.24 風雪 停滞				
3.25 晴	1		5 2 4	*1尾根 北尾根 師稜
3.26 風雪 停滞				
3.27 風雪 停滞				
3.28 晴		後 氷 5	2	3 3 2 中央稜-葉部 金作北尾根 *2尾根-壱下 -中谷
3.29 曇			2 3 3	
3.30 曇			3	
3.31 風雪 停滞				
4.1 曇	6			
4.2 晴			14	2 金作中尾根 2 *2尾根 2 中谷- *3尾根
4.3 曇			6	
4.4 晴	10			

葉師岳東面の南拓という處では、一応の成功を見ることが、多くの反省すべき處がある。

テントを下す予定のオ一尾根は岩峯には成され、中次根は、雪の状態が悪く、メンバーの肉縁もあり、テントは出せなかつた。その後、こよりラツシユでアタックを考へたが、遂にその機会を得なかつた。後でわかつた事であるが、金作中尾根、末端にテントを下るす事は可能である。上廊下へ下るには、金作谷を更に下らねばならぬが、夜明け前ないし深夜ならば、匪難傾斜共に少ないし、危険は避けられるものと思はれるにだし高戻二千米附近では、三月でも雨が降るようなのでその裏、テント時注意が必要である。

縦走はミ山へ行く予定であつたが、縦走メンバーに東陽者を出したので中止した。東陽は三月二十八日の強風下の長時間の行動による。

今回の合宿で特に問題となつたのは、下廊下、上廊下の横断の順よりよく言われて来たことだが、下向の登山の主要性である。通常のアタックでは、下の

BCから、ピークに向け、行なはれるが、我々の場合は、まず稜線から下に向け出発し、しかる後、上向けに帰つて来なければならぬ、午前中は誰しも元気で良いから、これにつられ、必要以上に、下つてしまふ。又下りに急いで、かくく足を傷めたりしやすい。その時、登りになつてから、苦しい登攀をしなければならなくなる。その失敗例が三月二十八日の行動にあらわれている。

高戻差が主稜線と黒部川との間を千三百米もあるのであるから、多数の事であるが、上と下でかなり、天候や雪質がちがつている。上で雪が降つている時、下でかなり雨が降つたようである。その時、次の晴天に次の下廊はかちかちにフラスト、上廊はフワフワで、ラツセルにてこずるような事があつた。

我々はここ三三年主としてホーラー形式の山行を主として来たが、それに対し、今回のようなやり方は、個人、個人の天候、雪の状態に対する判断力及び技術の向上という處で得る所大であつた。

なおスムーズに出入り出来たのは、全く前田建設の御好意によるもので、ここに深く感謝します。(阿井)

6 食料報告

春の合宿は、アプローチの長い事及びABC以後の行動がアタックの要素を多分に含んでゐる事を考慮して、食料の軽量化、調理の簡素化に努められた。

1 概要

一、朝食、昼食に全部、毎日糧粟製造の乾パンを用いた。

二、朝食の副食物としては、簡単な飲物のみとし、

出発の際の調理時間短縮に留意した。

三、乾パンと餅を併用した。

四、行動食、停滯食の区別はななくした。

五、各自非常パンク澱粉を求めたので、アタック食

に類するものはつくらなかつた。

六、近頃合宿で使用量の増してきて滋養の含まれない科学食后（例えば入エ甘味剤、香々しい色のシ

ヤム等）を極力廃除した。

2 乾パン

選定の乾パンが秋に試作試食され、まづまづの成績だったのゝ、今回は朝、昼食に全てこれを用いた。

長所

一、梱包に便利、又かさばらない。一斗缶にゴムパン

で約30ヶケ食分、フラスコで22杯33食分入るが、

乾パンは約200枚（朝食分で40食、昼食分で23食平均）

二、配分に便利、毎日糧粟ではこちらの希望通り一食

分づつポリエチレンの袋に入れてくれるので大変利

便。

三、越年しても変質していない。

四、特に朝食では、湯さえつくれば食事が始められる

五、乾パンにいろいろな栄養分を入れる事によつて、

副食の量をへらす、あるいは全廃も可能

短所

一、どうもあまりうまくない。一般に味が薄い。又も

つと甘い味のもの種類が多くなる必要あり。

二、値段が高い。即ちノ枚々円なので朝食で25円、昼

食35円では他と比較して高い。（ゴムパン27円、中

華ンパン225円、フラスコ16円、三立の乾パン20円）し

かしこれは副食を減らす事でおぎなえる。

なお今回用いたものは、ピーナツ入、バター入、レ

ーズ入、ミルク入、ゴマ入の五種類であるが特別に注

文する事も出来る

各成分分析表は再三の請求にもかかわらず入手出来なかつたのは残念である。

又、朝食5枚、昼食7枚の量は十分であろう。

3 献立

献立表を参照されたい。

4 社分、梱包

梱包は、秋春共全で一斗缶使用。

太頭小屋においてある秋の荷上品と春上げしたものとの社分け梱包は充分の準備により四人で四時前足らずで着ます事が出来た。その際特に注意した点として、

一、一面目のボンカで上げる食料及び雑食用食料はどの缶をあげても主副食共に含んでほとんど同じ内容物である事

二、どの缶もほぼ等しい重量である事

三、缶の外側に内容物の一覽表をはる事

四、ボンカあるいはボンの際、缶にかけは縄がよくぬれて内容物がはみ出すので全部缶の小たに目張り紙をはった事

等である。

計画がボーラーでなく、ラツシエ師だったのだから昨年に比し非常に楽だった。

5 費用及び重量

一人一百六十円の割で立案したが、装箱雑費を除くと百五十円見当になる。それに各自の行動予定日数だけ掛けただけを集め使用した。昨年のように人の分の負担は止めた。

秋の荷上げは主食を主に120kg、春に上げたものは200kg足らずだった。

6 使用状態及び残余食料

合宿中の計画変更で、一方では食い放さないのに、一部では食料不足となった事は、食料尿のミスであつた。常に流動性を持たなければと痛感した。

合宿終了時の残余食料は

折立・撤集用のものゝ食分

太郎・此パン3缶、副食品1/2缶

兼喇・乾パン約5缶、副食品約3缶

別年残余の多く出るマーカーンは、それを見込んで普及の程度しか持っていかなかったが、それで

も余った。(金子、佐藤、高橋)

7 葉師岳気象報告

先年の春山の際、エボシー未岳前の稜線を行動して
いるときこちらが良い天気であつても黒部をへだてた
葉師岳方面は午後になるといつも雲がわき上り、直接
日本海に面した葉師岳の天候の悪さ、敏感さを思わせ
た。今度の合宿の前は先年葉師周辺で合宿を行つた京
大山岳部の気象隊田中健一氏にその特徴などについて
知らせていた。ださ参考になつた。

気象報告と云つても毎日の天候のくわしいデータ
はとつておらず、ただ天気図と実際の天候、予報との
比較などである。次に毎日の大体の行動と共にこれら
について記す。

なお天候の変化した時向は大体のものであり特に序
の日などあまり外へ出ないので必ずしも正確ではない。

3/19 折立心太郎小屋

○ 無風

20 ↓ ○ 微風 ↓ 12h ① 強風

2/ 停滞

↓ 10h
● ↓ 15h
◎

22

太郎山葉師雪洞 ○ 強風 ↓ 主稜正烈風 (風速15) 20h、歩行困難。しかし少し下つた太郎側の樹林帯は無風。

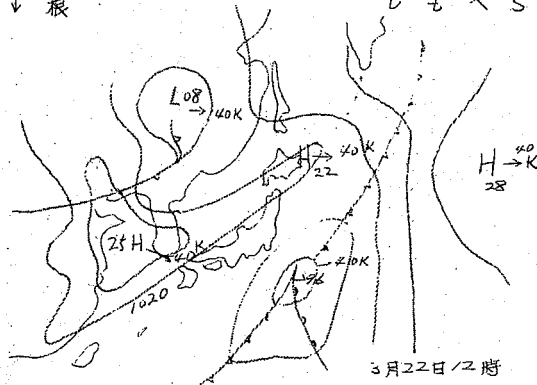
葉師ではWS S 風が殆んどすべつてであり雪庇も東より北に発達しているがこの日は逆だつた。

23

雪洞より一尾根迄 ○ 微風 ↓

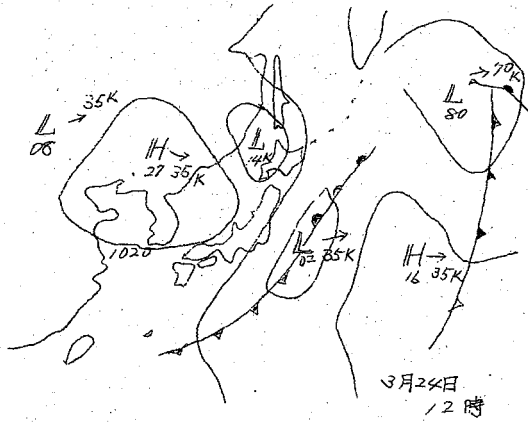
14h ① 強風 ↓ 14h ② 強風

寒冷前線接近の昔々刻より天候悪化



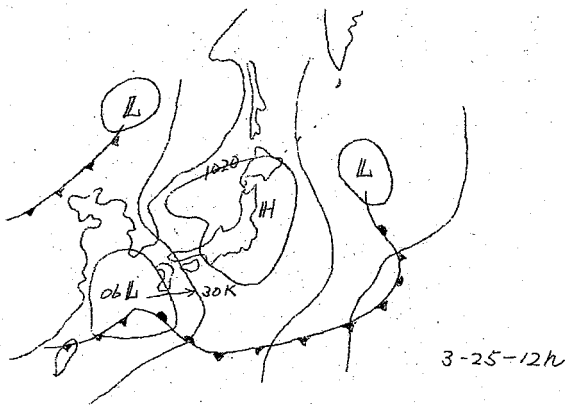
44 停滞

44の強風↓17h ⊙ ⊕
 前日の天気図から比較的良好い天気になると考えて
 いたが高気圧がずつと北上進つたため天候悪化



25

雪利キ一尾根 etc
 が吹いていても少し下ると無風。気温高く雪の状
 態はどんどん悪くなる。



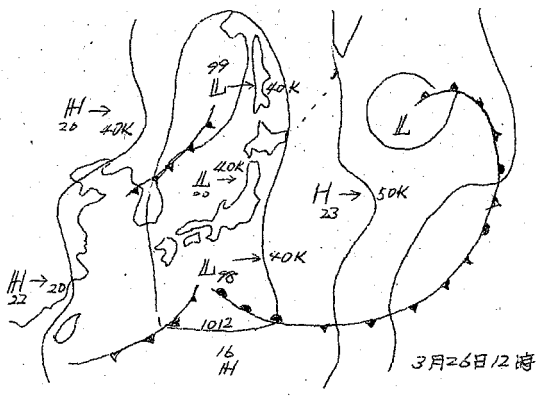
26

停滞 8h ⊗ ↓ 15.30 ⊙ ↓ 17h 再び ⊗ 弱風
↓ 15h ↓ 16h 弱 ↓ 17h W 風。気圧の谷に入り全面的に

27

停滞 一日中 ⊗ 前日と同じ様な天気雪洞入
口がしよつちゆう埋る。
雪洞の裏部は 7h ⊙ ↓ 12.30 ⊙ ↓ 14h ⊙ ↓ 16h ⊙ ↓ 19h ⊙ 主

後上はSW風が
径日吹いてい
たが少し下る
と悪風になる
前日の天気図
で移動高が丸
州の南を通る
ことから好天
が予想された
が、5h 頃は全
天雲におおわ
れ風も出て心
配した。これ
は地形性のち



29

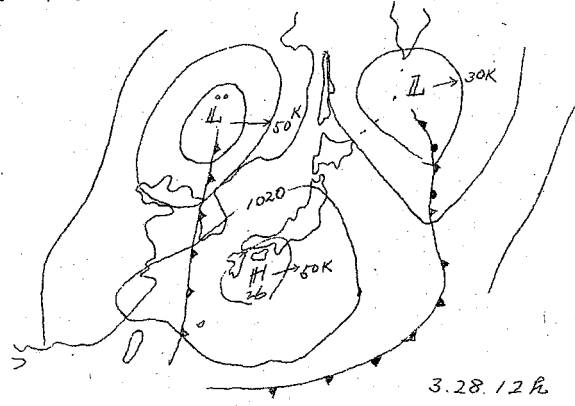
停滞 8h 濃いガス SW風かなり強 11h ⊙ 14h ⊙ ↓
の 16h には回復し始めた。
⊕ S ⊙ 前線に伴った低気圧が接近した為悪天候
となる。

前線が ENE
へ走って
おりすぐ後
に別の低気
圧がひかえ
ている為悪
天氣に続く、

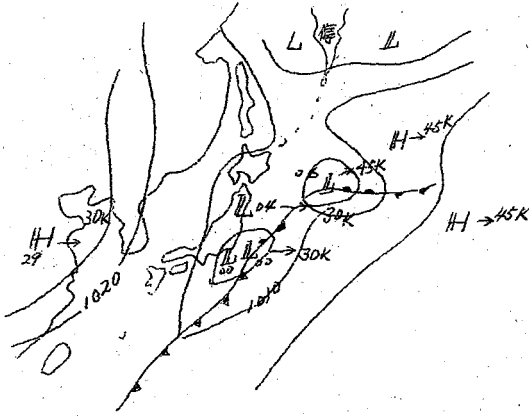
30

停滞 濃 ⊙ ↓ ⊙ ↓
停滞 7h ● ↓ ⊙ 悪風
↓ 16h ● 気圧
が高くなり方
から雨が降り
続く。一番北

31



寄りの悪人の雪洞は雨もりしている。30日から前線が東西に走りこの上を松尾正が走り天候回復の様子が悪い。移動員を持つ。



4.1. 6h

夕

唐糸

4h ⊗ ↓ 2h ⊙ ↓ 16h ⊙

華北に張り出

して来た高気圧に期待したが大候はいびり回復しない。たけ気温が下つて来て雪になつた。朝6hの天気図ではすくなくなる様に思へたが日本海に低気圧が発生した為又悪化する

2

オ12金炸尾根 etc 4h ⊙ ↓ 13.30 ↓ 4h ⊙ ↓ 15.30 ⊙ 細水

干前中これ程の好天になるとは前日考えていなかった。これといつ移動員もなくたけ天気図で西の方から積れて来ているのをあてはれていた。午後から又曇つたが16h頃晴れだし、空中に浮遊する細氷がチカチカ光つて美しい。

3

雪洞 ↓ 太郎小屋

4h ⊙ ↓ 10h ⊙ ↓ 12h ⊙ ⊕ ↓ 14h ⊙ ⊕ ↓ 14h ⊙ ⊕ ⊕ 葉師から太郎への屋根はまるくここで完全にが入にまかれ

片一踏は方向を誤るほどだった。樹林帯では無風

4

太郎 ↓ 折返 ↓ 猪谷 6h ⊙ ↓ 2h ⊙ ↓ 12h ⊙

以上である。主隊へ出てからの行動日数の割合は 3/2 / 4/3 までと考えるとこの中行動日数が6日であるから約半分となる。

(前次)

8 太郎小屋へ春山用荷上げ、葉師岳偵察

期間 11月3日〜11月7日

メンバー 田井、大工原、高橋、前沢、西井

黒木、佐藤、米沢、小山

葉師岳東面での春山合宿にそなえ、相当量の食糧、装備を荷上げした。その後、葉師南麓にテントを出し、南麓オノ尾根の岩場を偵察。雪平よりの写真偵察とはかなりちがっていたが、豪快な岩稜群を発見した。

11月3日 (晴のち雨) ス30チヤーターレに小型トラックに乗り小屋出発。8、30有峯着。ス2の折立着。ス10、ス1一部を荷を飯場にあづけて全員30時、ゴツで出発。雨にぬかるんだ道に、予想以上時間とられる。ス13、ス13三角尖。ス14、ス14雨の中を健む。ス15太郎小屋着。泊る。夜家泊。

11月4日 (雨のち曇) 雨がおさまって本日のス12、ス12小屋発。ス13、ス13ス14の太郎平を飛ばす。ス11、ス12三角尖。ス12の折立着。

11月5日 (次第) ス00残りの荷をまとめオノ尾のボツカ出発。ス11、ス11ス12ピツチ上る。ス13、ス13三角尖。ス14

ス00太郎小屋着。偵察メンバー(田井、前沢、高橋、西井)は南麓にテントを出すべく出発。ス12、ス12南麓。ス13マンクシオン。カールは斑状に新雪。南麓オノ尾根。頭附近にテント張る。ス14、ス14残雪が尾根の上はまだ残つてゐる。

11月6日(晴) 天気の様子がおかしいのでス20、ス20テント発。オノ尾根。ス20、ス20尾根は岩稜とブツシエが交互にあらわれる。ス20、ス20中央カール側にチムニーを降り、ユルにス20、ス20ここから本格的ブツシエ。ス20、ス20怖る。オノ尾根の肩より更に單村さの急斜面を下る。ここからオノ尾根は黒部に向い多数枝別れしている。すばらしい岩稜が棟つてゐる。その中央部日枝の頭に面白い岩尾根を伝つて下る。頭、ス20、ス20頭から下を照るがハンダレているようだ。面白い岩だ。天気は怪しいのでス20、ス20帰途につく。ス20、ス20は乙本こぎを流れる。ス20、ス20ス20、ス20南麓。ス20、ス20テント場着。ス20、ス20徹夜。ス20、ス20太郎小屋着。池のメンバーは今日午前中葉師岳往復。ス20、ス20太郎小屋発。ス20、ス20折立。飯場に泊る。

11月7日(雨) 前連の入々の御好意でトラックに便乗させてもらふ。ス20、ス20折立。ス20、ス20小屋 (田井)

II 真砂尾根から劔岳ハツ峰 I 峰

1 行動記録

積雪期の劔岳ハツ峰、といつてももう新霽とはとつ
の昔に失われている。だが先人たちは例外なく、二の
コル又は三、三のコルへ上つて、一峰へ直登するといふ
巽に末端からの記録はまばない。末端から頭まで、我
々はこれを狙つた。我々は当然、未知の窟所、一峰の
東面に目をそそいだ。一峰のピークから四本の尾根が
劔岳におちている。マイナーピークで二つに別れてい
る尾根（一稜、二稜）。ダイレクトに劔岳に達してい
る尾根（三稜）二股に至つて長い尾根（四稜）三
稜とつた場合、劔岳から一峰まで高度差 800 M。四稜
の場合は 1040 M にもなる。一峰東面が意外に大きなス
ケールを持つてゐるのを知つた。傾斜も 2000 米以上は急で
40°、45°、ことに 2000 M ~ 2300 M は 45° を越えている部分もあ
る。

さて、「末端から頭まで」このために強股しなけ
ればならぬ向題

一峰東面について、われわれは何も知らなかつた
積雪期のその場所については文献も見あたらずなかつ
た。だが O 年三教大雪山探検報告に一枚の写真があ
つただけだ。

2. 積雪期において一峰東面の下に到達する方法

3. 一峰東面では、非常に困難な登攀を要されるこ
と。そして非常に長いアタック行。

1. 2. の向題を解決するため、8 年秋十一月初旬、
植桑と劔御前小屋への荷上げを行つた。大島、白井が
劔岳から一峰東面へ、村井、谷垣、峯田、三沢が真砂
岳からハシゴ段取越を経て裏郡別山に至る尾根（以後、
真砂尾根と仮称する）を降つた。だが、結局、一峰東
面については何も具体的なことを知り得なかつた。唯
三稜か四稜が登攀可能ではないかという臆測はついで
2. について、もちろん劔岳を通るのが、もつとも近
道にちがいない。だが雪崩の危険がある。それに荷物
を運ぶことなどのために何處も往復する、いわば許容
だから安全にあるに越したことはない。それ等の理由
から真砂尾根を使うことに決めた。

結局、次のような計画を立てた。劔御前小屋を BH、

真砂尾根の約2300呎の高度の場所にC 真砂尾根から敵
軍へおりているいづれかの尾根(それは一峰東面のど
の尾根を並ぶかによつて異なつてくる)の末端にC(一
これがアドバンス ベース キャンプになる) 一峰
東面のいづれかの尾根のなるべく高いところにC(ア
タック キャンプ)をそれぞれ建設する。

C(三)からアタック隊はハツ峰、その頂、本峰を通過して列
山系越へ行く。サポーター隊の一つはC(四)から一峰、又は
五六の麓まで。他は別山系越から本峰までアタック隊
を迎えに行く、

メンバーは三年部員が三人、二年部員が二人、新人
が四人、そして早く早く帰る四年生一人と先輩一人、少し
すくなすぎた。モウアし多数予定していたのだが、左
とえばリーダーに予定していた大島が頭首失を参加不
可能になるなど、不利の事情のため減少した。

成功に至るためには解決すべき疑は多くあった。
一、偵察と登頂の二つを行わなければならぬこと。
一峰東面と真砂尾根からの下降ルートについての偵
察。また一峰東面に要する時向と困難度がよくわか
つていなかっただけで、もし、一峰をそれ自身が登攀の

対象である場合ハツ峰は放棄し、計画を一峰のみに限
定すること、を前もつて申し合せた。

2. 雪崩の危険。なるべくこれを避けるためルートは
多く稜線にとつたが、なおかつ、これの予測の必要と
危険はつきまとうにちがいないこと。

3. 真砂尾根の大部分は曲折したナイフリッジの連続
であるが、ここを多くの荷物をかついで新人が通るこ
と。このため250kgのフィックスを要した。

4. C(三)の建設。急峻な一峰東面にキャンプを上げるこ
と、又、おろすこと、なるべく軽重にするため、ア
タック直前に建設し、できれば雪洞にすることと考へ
た。

5. 長い困難なルートをとるアタック
5.6については、かなり詳しく準備したが結局、行
い得なかつたことなので、ここに詳述する必要もない
と思う。

………だが、われわれのなし得たことは、偵察だけ
であつた。

期間 3月15日() 4月2日

メンバー 佐藤、玄瀬、村井、谷垣、西垣、白井

鍋田、丸尾、五百蔵、三天、堀本、坂田、森

榊木村、卯之花

(行動記録)

3月14日 玄瀬、五百蔵を除いて全員大沢発、富山へむかう。

3月15日 (晴のち吹雪) 美女平7:30発、弥陀ヶ原ホテル前14:00~14:40 天狗平小屋18:00、ホテルまでは荷物はずべて雪上車であげた。荷物の半分をホテルに残し、それぞれ30kgばかりので天狗平へ。天候次第に悪化、美松場をすぎるところから吹雪、視界はきかなくなり。スキーを、ついでに荷物の多くをデポしようやく小屋に入る。

3月16日 (吹雪) 吹雪のすきをぬけて前日デポした荷物をどりに行く。小屋から200メートルぐらいの距離であった。停帯、高、この日玄瀬、五百蔵、みだが原へ入る。

3月17日 (吹晴) 入向と荷物半分は天狗平に、残りの荷物はホテルに残っている。入向も荷物もすべ

て地獄谷まで持つて行き、真砂岳から出ている尾根をも偵察しようと思つた。夕時雲空の下、天狗平を出発、深いラッセルののちホテル着6:00 玄瀬、五百蔵と合流、ホテル発7:05 天狗平隔着10分、ふらふら、玄花、木村、佐藤が12:30 村井ら12名は少しおくれで天狗平発、玄花らは夏道より数百メートル上手で沢を横切り、14:20 村井らは室堂経由で16:00 地獄谷房岩温泉着、先行した佐藤の誤った指示によりこの遅延を生じたのである。玄花ら3名は15:30地獄谷発、密着沢の右岸の尾根を這つて列山乗越17:45、途中からアイゼンが必要になる。すでに日没寸前であつたので雪痕を調べたのみで下山。19:05地獄谷着、この日は全員房岩温泉に泊る。荷物はまだ半分天狗平に残っている。

3月18日 (曇) 玄花、村井、谷垣が真砂尾根の偵察に向う。他の12名は5:00発。天を横切るルートをとつて6:10天狗平着。残りの荷物をもつて6:45天狗発。

7:00~10:05房岩。乗越へむかう。登るにつれがすは次第に濃い。風もつのである。乗越は吹雪 13:30着。村井らは偵察に行けず乗越小屋にいた。

3月19日 (吹晴) 玄花、村井ら、乗越小屋をあ

とにし、真砂尾根へザイルフイックスと偵察に向う。
約2200米まで下る。1400乗越帰着、佐藤ら10名は此處
谷へ荷物とどりに下る。6、10巻、7、40、9、25巻迄、
13、50乗越。白井、錦田、森は秋に荷上げした食料を整理
するにめ小屋に残る。やつと荷物のすべてを乗越へ
上げにと思つたら共同装備の缶を忘れたことばかり
丸尾と五百歳をとり下らせる。

3月20日(強風のち吹雪) 天気凶に台巻坊主があ
らわれたのでC工建設を見合わせ、白巻坊主による遭
難は数多いことであるし、真砂尾根はかぎり困難なナ
イフリツツジであり、しかも帰途は登りになることを考
えて、真砂岳頂上、東面に雪洞を掘りC工用荷物をデ
ポする。6、40乗越、7、50、10、10デポ地、10、50乗越、雪
洞を掘つてデポするというやり方はよくなかつた。埋
まるおそれがあるのだ。幸いこんどの場合は埋まらな
かつたが、尚、午前中に立花、森、木村下山す。12、40
吹雪の中に丸尾が共同装備の缶とともに上つてきた。
五百歳は帰隊をもちめる電報のため下山した。

3月21日(風雪) 停滯。計画はすでに4日もおこ
れている。今日からは全員でノ名。

3月22日(快晴) C工、C工用荷物をもつて全員で
B工乗越小屋を出発。5、50、アイゼンをつけて、わか
んは使用せず、デポ地8、10、C工用と入れかえる
村井、玄瓊がレックカリしたトレースをつけるため先行
する。鋭いナイフリツツジ、急斜面のトラバースをくり
かえず、雪庇はすべて内蔵助谷側にかなり大きく出
ている。進むにつれて、ハツ峰と急峻につきあげている
その一峰東面の巨きな三角形の相籠があきらかになる。
13、50C工建設地につく。約2240mの地矣。真砂沢側の斜
面の上端には人用の雪洞を掘る。ここまでに獲れたフ
イックスザイルは250mに及ぶ。村井、玄瓊、佐藤はハ
シゴ段乗越の手前まで偵察に行く。やはり三稜か四稜
どちらかといえど三稜が登れそうに思われる。四稜
の北側を見るにめには黒部別山まで行く必要がある。
三稜のまん中より少し下にはテントの張れそうな白い
台地が見え、まん中より上は凸凹のない斜面が白炭の
帯中のようだ。

3月23日(晴) 村井、玄瓊は偵察。黒部別山より
一峰東面をスケッチ。三稜とニ稜をマークし、真砂尾
根より沢沢への下降ルートとテント地をみつめてくる。

ハシゴ谷の西側の尾根を下り、その末端の白地がテント地、しかもそれは三稜と歟天をへだてて対峙している場所だ。他の夕名はス20C I 終、デボ地ス20より20C I 着、始終、これで荷物も入向もすべてC I に揃う。うまくいさそうは、われわれは希望にもえた。雪の状況も良好。

3月24日 (風雪) 停滯。前夜のたぬ、前夜通順後の気圧の谷のせいで詰居一日降った。

3月25日 (晴のち曇) 6.07C I 終。真砂尾根を下り、ハシゴ谷西側の尾根を下る、フラストの上には氷肌だらけ雪がついてあるきにくい。(ワカン)。

8.40C II。この日のうちに一峰東面を偵察する予定だつたがだめだ。三の沢を上って三稜に降りつくことになるとは、天は雪消れつつけている。一峰東面の沢にも、別山尾根につきあげている天にもたままなく雪がおちている。表層雪崩である。C II には村井、玄狼谷垣、白井が入る。池はス40C II 終、ス40C I 着。

3月26日、27日 (ともに風雪) 停滯。文字通りのドカ雪。雪洞の雪かきがしんどい。3肌も剥くなり、結局通路は氷肌だらけになつてしまふ。真砂天から張

風とものに雪がまいあがつてくる。C II のテントは雪にうずもれ雪かきのためねむるひまさえない。

3月28日 (晴のお曇) 朝、快晴、気よくしてC I を出発ス20 深いラツセル。C II は夜中の雪かきのためみんなねぼけ面。雪崩の危険のため偵察は不可能。今日も又、一峰の真下で一峰とにらめつ二するばかり。タバユもきれだ。

3月29日 (曇) C I ス30 終。くもり空。時折吹雪が襲う。夕時すぎC II につく。下る途中、雪がスロツクになつて落ちることを知つた。直径10m 以上の雪の粒がころがるうちにみるみる直径1m 以上の円盤になるのだ。こういうスノーボールにあつたらしまいどと想うが、一方スノーボールのさきるときは大きな雪崩の心配はない。C II に着きおきがある。玄狼の字だ。庄兼君へ、シッ、5.00 出発。悪天のため引き返すス30再出。アマシイ天だが一谷村井、白井は三稜、ヒロヒ、谷垣はマイナー^{三稜}なトレースする。明日アタック態勢に入つてはいかがかね。小察尾根で横須市犬がやつたらしい、初心志るべからず。ゼアミ。

三稜については、村井の記録にしがつて書く。

叙次と試合から約30分三ノ天を登る。このあたりは傾斜約30度、そこから三稜にくだり込んでいる天へ傾斜約45度に入ります。この天はスベリ台のゴルヘつさあびているルンゴに通じている。腰までのランセル、おちてくる雪のブロックを身をもつてさげながら登る。表層雪層はたえまなし。試合から約10分。ここから(A)のまがつてスベリ台のゴルへのフロワールに入る。フロワールは約60度つづく。雪崩道のため(53)底がつるつるにみがかれている。音もなくスロツクがすべっている。林は無気味だ。C附近に教本の岳樺。ゴルからスベリ台のピークまではブツシエを手がかりに直登約10ノピツチ。ここから鋭くさりをたつたナイフリッジのピークがつづく。三の天は垂直にされている。四の天側はゆるい度。雪底は三ノ天側に出ている。リッジの上全部は雪面、下層は岩稜、となり中約50分、スベリ台のピークから約ピツチでオニのピークと次のクロワールとの、ゴルに出る。そこには前口5分興行20分くらいの岩穴がありビークは好適だ。十三時引返す。街裏の暗面なのでつづくフロワールが登攀可能と見定めてからこのゴルから四ノ天へ下る。かなり容易に下

れる。

二稜についで

マイナビーク東面の岩壁はびょうぶのようにおれまがりながら、きりにつたまま三の天側へおりている。その岩壁の下方向にくだり入っている雪の天、そこを登つて岩壁の上へ出ようと試みたが、実は岩壁の上はナイフリッジ。しかもブツシエがありその上に雪がのつている。おちこんだらブツシエの下はがらんどろではい上れない。

14時すぎまで小さな雪崩がおちつづけを。16時半所パーテイ前後してC上へ帰る。この間、西面、三稜程本は裏塚別山へ登る。他はC上を玄瀬、村井らの行跡を見つけた。偵察の結果、二稜は放棄した。三稜から登れることは確定だと思はれた。村井、白井の到達点からフロワールを登れば白い白地。次いで小さなピークを二つ越せば山頂のない白い斜面に出る。そこは登れるだろう。あとはピークへ三の次の頂上へ直下の急斜面が、それも見たところ越せそうだ。

しかし三稜は登踏といつたままやせしいものではなくあきらかに登攀の対象だつた。だから当初の予定にし

たが、つて熊夷を一峰のみにしぼることにした。それにもと通りの計画を遂行するにはメンバーも減つていられ日数も満足でなかつた。

3月30日(曇のち雨) C工を撤収してC工の食料とともに全員C工に入った。C工では村井、玄瀬、谷垣、白井が三稜に向つたが、雨のため引返した。

3月31日(雨) 全員2時起床の予定だったが/時にはみなおきていた。一瓏おひれなかつた者もいる。雨と風のためテントはゆるみ、雨もりも殆んど全員がシユラフがずぶぬれになった。テトロンテントの女人はまつたくぬれてしまった。尚、雨はふりつづいてゐる。雪がとけて、向いの一方からはしげしげ大磁のよな音がきこえ、雪がおちつづけている。テントはあたりの雪面より40cmも高くともつてゐる。もちろんアタックは出せない。食料は4月3日までしかない。翌日行動できるようなら、丸尾、堀田、三沢、堀本、浜田は村井、西垣とともに乗越へ帰つてもらうことにする。残りの、佐藤、玄瀬、谷垣、白井を一峰をアタックすることにする。食料をC工に長く残すためだ。とにかく一峰のピークを踏むために田の沢から上

つて岩穴へ行くルートをとることにする。

4月1日(雨、一時曇のち風雪)一時起床
三時にアタック出発の予定だ。だが、少しこまかく

なつたがやはり雨だ。もういくらぬれても同じだがぬれぬれないのが困る。たとえはテトロンテントにだけ西垣は一瓏中シユラフをしぼつていた。他もだいたい同様のありさま。帰る方のメンバーは華実弱体だ。村井と西垣を支えられるかどうか。それにぬくれない。帰りのルートは登りである上に三坪がトツプになつてラッセルしなければならぬ箇所が多い。雪は必ずぶすぶす落ちてくる。白く輝いていて一峰も、今や陰惨で畏れおちている。今までの例で晴れても雪崩持ちに一日つぶさなければならぬことが多いと思われる。もはや、アタックよりも全員無事につれてかえる方が向題だ。……と思われた。食料は三日迄だから、二日に撤収しなければならぬ。アタックメンバーだけになればひきのばすこともできる。しかし、アタック4人だけ残すのは撤収する方も心証だし、アタックメンバーの方は撤収パーティが心証だつた。今時になつても

天気が悪ければ、7時になつても、8時になつても、
……と少しづつひきのびしたるが遂に8時、アタツク
と断念せざるを得なかつた。一峰まではどんなに少く
見廣つても8時前にはかかる。8時に出発せざるを得な
致し方なかつた。

10時ごろ、晴れ向がみえた、撤収の準備をはじめた。
柯林なら、天気図は天気が決方にむかうことを示して
いたから、13時CIIをあとにする。風雪になつてくる。
茶いラツセルの鳥糞砂尾根上に出たのがすでに17.30
CIIの雪洞に泊る。シエラフが凍っているのでバートナ
ーで残をとりながら坐つていた。

4月2日 (快晴) 一峰とその東面は再び白銀に
覆われていた。風もなく一片の雲もなかつた。だが、
東側の雪は予想通り不安定だった。8時CII出発。真
砂岳頂上1400、17時すぎ、地獄谷へ帰着

失敗の原因

1. 天候が悪かつたこと。たとえ、最後の一週間の
うちCIIが行動できたのはたった一日であつた。
2. メンバーの不足。もともと不足気味だったうえに

尚、減つたこと

3. 雪崩。一峰東面が急傾斜であるため、降雪の翌日
は天候の如何に拘らず行動できなかつたこと。風は
面から東へ吹く、そのため西面の雪はかなり堅いが
東面は不安定であることが多い。

4. 氷死ヶ原のボツカを軽く考えていたこと。

計画では三日で果越へ荷物とともに全員が入る予
定だったが五日しかかっていること。

5. 今まで、新入区主にボツカにつかつただけを囁ら
したが、こんどはしまいまでつれていったこと。そ
のため計画の終りの方で人数がたがつき、いだから
に食料を減らしたこと。

6. 雨、テントの雨に対する無防備性。シエラフがび
しよぬれたなり、ぬることもできなかつた。春山の
雨とテントについて、次の山行までには考えなければ
ならない問題である。

7. テントを雨は殆んどそのまま素通りする。
ビニロンはいくぶんましだが余りかわらない。

8. 悪天候、氷死ヶ原ボツカの誤算等により計画にお
くれがちであつたこと。

8 偵察と登頂、この二つの課題があつたが、それは
我々には少し負担でありすぎた。

(後 記)

われわれは五月初旬にもここを訪れた。メンバー、
佐藤、玄嶺、五百蔵、西垣。剣沢を下り、かつての
工建設地をベースにして、四の沢から三稜の岩穴へ
のルート(春の村井、百井の下降ルート)をとり、ク
ロワールから白い台地へ出た。そこはテントを張る位
けの広さはどうやらある。そこから上は急峻なナイフ
リッジ。ところどころ雪がはげおち岩稜やブッシュが
露出してゐるが、岩稜は文字通りナイフで頂後の中は
まったくない。結局、台地からムピツチに五時前を賞
し、雪崩れ待ちとピバークの末引返した。今後、ここ
を狙うには、やはり雪の多い三月、四月初旬、そして
好天の比較的好くつづく四月はじめがもつとも適して
いるだろう。

われわれが真砂尾根をつかつたのは、剣沢の雪崩を
恐れたこと、一峰を偵察することのためだが、この行
路は余りにもしんどすぎる。夜間にでも一峰に剣沢を

下つてしまつた適当な手段を考えなければならぬ。
三稜についで云えば、もし雪質がよく雪崩の心配がな
ければ、例の台地にテントをあげる事も可能であるし
一峰のピークへの、さらにそれを通つてのハツ峰への
アタックも可能であると思う。結局、問題は天候の、
ひいては雪質のよい時期を捉むことにあると思われぬ。

めん類と

洋食

アーチ下

ニューフレンチ食堂

行動予定表

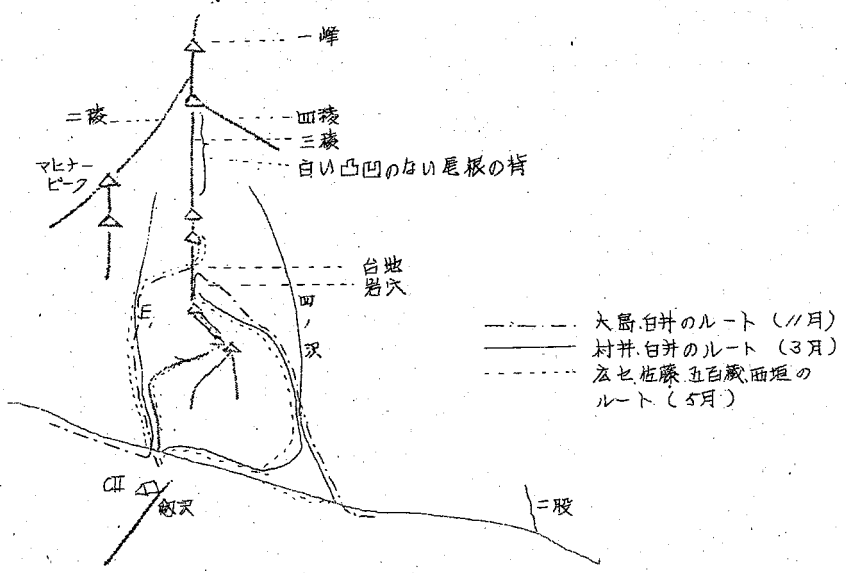
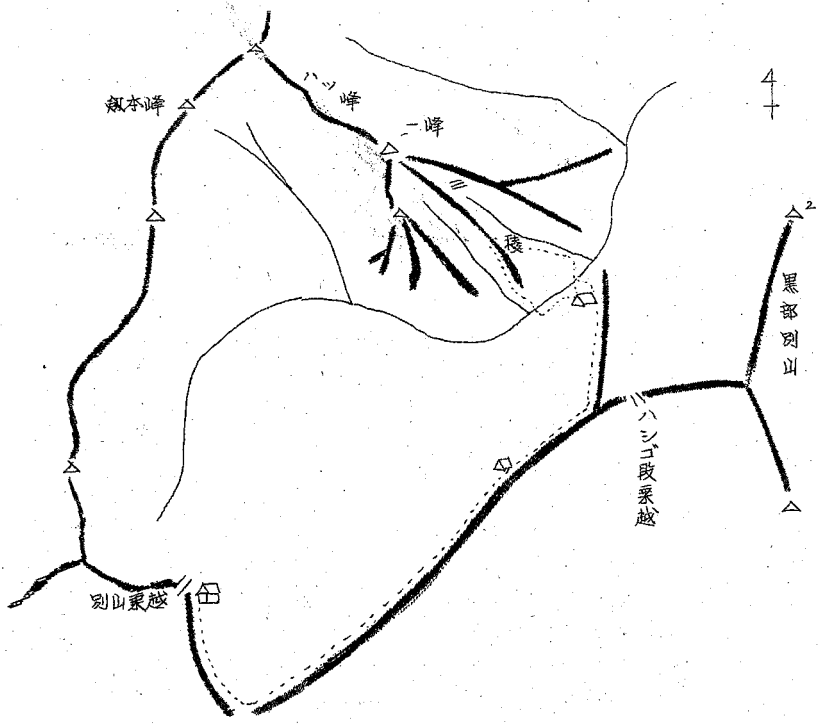
大阪出発 3月14日

美女平 — 別山東越 15日、16日、17日

		飯本峠	BH	CI	CI	CI	飯本峠	
偵察期	1			4 ←				
	2			4 ←	2 ←	2 ←	四稜三稜とリッポの偵察と一峰をスケッチすること。	
	3		2(下山) ←	7 ←	6 ←	2 ←	三四稜の偵察と偵察隊の行動を見ること	
	4 (24日)				7 ←		休日	
アタック期 I	5			3 ←	3 →	2 ←	CI建設 BHからのサポートを依頼	
	6	アタック2 →	2 サポート ←	2 ←	アタック2 →	3 サポート ←	アタックの日 CI→CIの2名は見直しのためCIからアタック隊に戻る	
	7 (31日)			4 ←	3 ←	3 ←		
アタック期 II	8 (2日)				5 ←	7 ←	2名アタック 3名サポート	マ付ーヒックアタック日数に増加倍と与えられたりつが加えたもので必ずしも行う予定ではなかつた。
撤収	9 (3日)			12 ←				
下山	3日							

行 動 表

	美 大 平	以 信 が	天 狗 早	世 家 谷	B H	C I	C II	
15	①→⊗	→	13					
16	⊗	→	2				大瀬沼へ入	
17	○		→	11 2				
18	◎		→	12 3				
19	○		→	10 3	←	2		
20	◎ ⊗	←	3	1 下	←	11 サホ	立花、森、木村下山 五百歳下山 真砂原上ニテサホ	
21	⊗	停滞						
22	○				→	11		
23	①				←	9 サホ	←	2
24	⊗	停滞						
25	① ◎					←	7 4	
26	⊗	停滞						
27	⊗	停滞						
28	○→◎					←	7 4	
29	◎					←	7 2 2	村井、自井、三稜へ 志比、谷垣、三稜へ
30	◎→●					←	7 4	
31	●							
1	⊗					←	11	
2	○				←	11		





《ハミゴ段乗越上部からのスケッチ》

2 食料報告

全般的に見て今回の食料計画で留意した点は職立に
変化を付けたこと、行動食停帯食の区別を作らな
かつに争である。

職立に変化を付けるといつてもむしろ重量及び費用
の点で制限があるが、特に長期面山に入っている場合
食料の影響は種々な面が非常に大きいため、この点に
特に注意を払った。停帯食は行動食より少くてもよ
いという見方もあるが、次の日の行動に乏なえる
といつ意味から区別はなくて良いものと考えた。又い
たずらに食料計算がややこしくなるということもあり
食いつ延しなどの必要が生じた時果敢で適当に行えば良
いと想ふ。

以下今回の食料の各点について記す。

重量、今回はポーターシステムであり、ポツカも
二回行うことが定まっていたので重量にのみ特に注意
を払うことはなかつた。

秋のポツカで山の荷上げを行った。春には
220kg荷上げし重量は約30kgある。又一日一人当り

の食料の重量は13kg弱である。この重量は梱包重量を
含めてのものであり、まず、荷足すべきものといえ
よう。

費用

一部の者を除いて入山日数が同じであつたため、入
山日数に従つて食料費を求めた一日一人当りの食料は
60円となつた。

献立

前に述べた様に食料に変化を付けるため朝昼晩共
三通りの献立をした。しかしあまり変化をつけすぎる
と食料計算が複雑になり、無駄も生じやすいため、注
意すべきである。味を良くするため、豚のてんぷら及び
乾燥野菜を自家製で作つた。豚のてんぷらは100gの肉
身をしようが味味等を加えた醤油に一日向つけころも
を付けててんぷらにしたものである。これは比較肉長
期間保存することもできるのる便利である。合宿では
前期に豚を用い後期にはコンミート、カンツメを用い
る様にした。乾燥野菜は大根の葉及びほうれん草をゆ
でて乾干したものである。今回は一人で作つたた
め少量しかできずABC以上用とした。

乾燥野菜は原料が多くても出来上つたものは非常に少重となつてしまふため食料係以外の人にも分拒して作つてもらへば良いと思ふ。特に重量が大切な場合は全面的に採用して効果のあるものと思われ。

次に具体的に朝食について書く

朝食、中華ソバ、自家製ビスケット(5枚入り)、フラツカーを用いた。フラツカーはソバの予定であつたがこれでは不足を必すを必要とした。ビスケットは朝食についても共通のことだが、なるほどフラツカーに比べてつまいし又体積も小さいが、乾パンに比べると値段が二倍もし又これだけでは食べにくく副食を必要とするので値段を考へた場合非常に不利である。しかし味、値段をもう少し考へたなら十分受けるだろう。朝食は調理をはやくすませることが出来る炊モチは用ひなかつた。費用の省でメザシは全廃した。今回はこれについて特別の文句も出なかつた。炊パン、カルシウムの補給にはスキムミルクで足るし、蛋白質の省では競争で行うことが出来る。しかし食事の後でメザシをしゃぶるのが何とも云えぬという人もある。炊パンなので、時に応じて考えればよいだろう。

昼食、従来ウインナロールを廃して、ビスケット、乾パン、フラツカーを主食に用いた。乾パンは袋で十分分じり値段も安くホケツト等に入れ簡単に食べることで出来るので便利である。しかしこれだけを用いてゐるとあきるので三種の主食を用意した。三種とも副食は同じにしたのでビスケットの時がいちばんうまかつた。マーガリン、真ソーセイジはやはり不評であつたが、肉食値段の省からこれに代るものがないので、できるだけ全部食べる様にしている。夏みかんは重くかさばるので不利であるが皆の希望もあり、一部採用した。春は特に水分が不足がちなのでやむを得ないだろう。ジヤム、ピーナツクリーム等はなるべく味の良いものを用ひ、主食を食べやすい様にした。

夕食、主食には調理が比較的簡単で食べごたえのあることからモチを用いた。水を作るのが困難な春にはモチを用ひるしかれかたがなく米に比べて割高に用いた。調味料にはカレー、ハマシ、ポタージエを用いた。カレーは今ままで異り固型のものを用いた。これはかさが低く、そのままあげつて湯に入れれば良く又味も良いことが秋のポツカの時に採用して分つてい

ためである。しかし同じ型でもハヤシの方は味が
 数敗劣るのだ。これを用いたのは失敗だった。

その他、献立外に切りコブ、メリケン粉などを持つ
 て行つた。切りコブは塩を加えてコブ茶にするだけ
 コウライのができた。又一時給にせよ満足感を得る
 ことができた好評だった。メリケン粉はカレーをこくす
 る目的で持つて行つたのだがその必要は全く停滞の日
 にホットケーキにしてたいくつはまぎらしていたのだ。
 アタック食、今回のアタックにはテントを待つて
 行けないので調理ができず、すか食べることができ
 るものを用意した。又アタック食の性質上軽くすること
 に留意し梱包にもよくめて一人一日ノ倍とした。又梱
 包はすべて二人分とレポリエナレンの袋に一食分をま
 とめて入れた。又特にサラミソーセージを用いて味は
 が栄養の改善に つとめたが高価なので多量に使用する
 分にはいかなかつた。今度の春山の計画自体が失敗に
 陥りアタック食は使用されなかつたのでこれについて
 の良否の判断を下すことができないのは残念である。

アタック食 (一人一日)

(朝)	(昼)	(晩)
フラッター 1/2	カンパン 1/2	フラッター 1
ビスケット 20g	ビスケット 30g	ビスケット 30g
バター 1/4	チョコレート	コンビーフ 1/2
コンビーフ 1/2	アメ 2ヶ	チーズ 1/2
シヤム 1/2	ココア(朝用意)	サラミソーセージ少々
サラミソーセージ少々	バター 1/4	シヤム 1/2
ココア	シヤム 1/2	ココア
レーズン	レーズン	バター 1/4
	ソーヒー 1/2	

献立

	A	B	C
朝	中華ソバ 1/2	ビスケット 5枚	フラッガー 1/2
	コンソメ 1/5	ミン 20g	ミン 20g
	食用マーガリン	食用マーガリン	食用マーガリン
	玉ねぎ 1/8	玉ねぎ 1/8	玉ねぎ 1/8
	切干	切干	切干
	鰹	鰹	鰹
昼	コンビーフ 1/4	コンビーフ 1/4	コンビーフ 1/4
	カンヅメ 1/5 (12日)	カンヅメ 1/5 (5日)	カンヅメ 1/5 (7日)
	ビスケット 4枚	鬆パン 1/2	フラッガー 2/3
	マーガリン 1/5	マーガリン 1/5	マーガリン 1/5
	ソーセイジ 1/3	ソーセイジ 1/3	ソーセイジ 1/3
	シヤム 1/3	シヤム 1/3	シヤム 1/3
晩	レーズン	レーズン	レーズン
	夏みかん (8日)	夏みかん (8日)	夏みかん (8日)
	モチ 300g	モチ 300g	モチ 300g
	カレー 1/5	ポタージュ 1/6	ハヤシ 1/5
	食用マーガリン	食用マーガリン	食用マーガリン
	玉ねぎ 1/8	玉ねぎ 1/8	玉ねぎ 1/8
晩	切干	切干	切干
	鰹	鰹	鰹
	コンビーフ 1/4	コンビーフ 1/4	コンビーフ 1/4
	カンヅメ 1/5	カンヅメ 1/5	カンヅメ 1/5

注意 {印をつけたものは、そのうちいずれか一つABC以上では玉ねぎの代りに
乾燥野菜 以上の他に、スキムミルク、証菜、コブ等を用いた。

全 食 料 表

品 目	全 体 量	ボツカ	BH	MC	ABC	AC	Attack
モ チ	100 kg	13 kg	30 kg	35 kg	15 kg	7 kg	—
中 華 ソ バ	64 個	7	28	30	13	6	—
フ ラ ッ カ ー	13 個	13	41	45	19	13	8
カ ン パ ン	64 袋	14	13	20	9	4	4
ビスケット(晋)	1224 枚	—	53 × 7 32 × 5	44 × 7 23 × 5	19 × 7 11 × 5	7 × 7 4 × 5	—
ビスケット(上)	520 枚	—	—	—	—	—	520 g
コ ン ミ ー ト	112 個	6	37	39	10	4	6
ソ ー セ ー ジ	116 本	15	36	36	17	7	4
カ ン ツ X	20 個	7	—	—	9	4	—
煎	6 kg	600 g	2000 g	2100 g	900 g	400 g	—
コ ン ソ メ	11 本	1	3	4	2	1	—
カ レ ー	20 個	2	7	7	3	1	—
ハ ヤ シ	20 個	3	6	7	3	1	—
ポ タ ー ジ ュ	20 箱	2	6	7	3	2	—
ミ ヲ	10 袋	1	3	3	2	1	—

(96)

マーガリン	45箱	6	13	14	4.5	3	2.5
シヤム	118袋	14	36	38	17	7	6
食用マーガリン	16箱	2	4	5	3	2	—
スキムミルク	5箱	1	1	1	1	1	—
王ねぎ	84口	9	27	30	12	6	—
切干	4kg	300g	1500g	1500g	500g	200g	—
乾燥野菜	500g	—	—	—	350g	150g	—
フカメ	7袋	1	2	2	1	1	—
チーズ	3口	—	—	—	—	—	3
塩	3袋	0	1	1	1/2	1/2	—
コシヨブ	3ピン	0	1	1	1/2	1/2	—
砂糖	16袋	2	4	5	3	2	—
メリケン粉	4本	—	1	1	1	1	—
茶	5本	1	1	2	0.5	0.5	—
乾ブドウ	700g	200g	200g	200g	100g	100g	適量
夏みかん	35口	5	12	11	5	2	—
アメ	16口	—	—	—	—	—	16口
ココア	1袋	—	—	—	—	—	1袋
紅茶	7箱	1	2	2	1	1	—

3 装備報告

装備の報告についてまずオーに書かねばならない事は装備の缶がE.H.に上つていなかつた事である。諸君としては気がついた時すぐ取りにもどり天狗の小屋にあつたの姿そのまま針圍を發行出来たのであるがこれは明らかには装備袋のミスであつた。これは梱包缶の資材の時食料缶ばかりに気をつかつて装備の缶の方がおろそかになつたと言う事、又装備の缶には表面に何の表示もしてなかつた事等がこの原因としてあげられる。やはり食料の缶のように内容物、重量その状態一目でわかるように明示しておくべきであつた。装備の缶はすくなくないのでよもや匯が忘れられるという事はないだろうと思つていたのがまちがいの因であつた。(一)

今後装備袋をやる人はこの経験を生かして總体にかつたような事のないようにしてもらいたいと思つた。

次に雪洞の入口についてだが入口にグランドミーンの古いのを使つたのだが、三日ほどつともう入口が2mほどあるがこの臭も大いに研究する余地があると思つた。

れる。

テントは二張りもつていつにテントの右は雨が降ると直接もるようだし又雪が強く降るとこれ中まで入つてくるような有様で使ひものにならなかつた。このため合宿のおわりごろになるとこのテントに入つたものは全員シユラフがびしょぬれになつてまい。撤収でシユラフを乾すという始末であつた。これが全員のフアイトをすくなくならず消失させた事は明らかである。

又雨が降つてテントの中が水がはしになつた場合處をすくし、被つて水を雪に吸ひ取らしたのだがやはりこれは處心出来なかつたと思つた。テントの底のゴミ取りの穴を裏河から真中のあたりにつけておくと水の入つた場合テントを破る必要はないと思われる。それから雪山は雨が降ると言う事時に今度の合宿の場合のように比較的極地でテントをばり生活をする場合雨に對しての処置を考へてシユラフカバーを完全防水とするかビニールシートを出来るだけ多くもつていくとかして合宿にのぞむべきであると思つた。

その他ケロミンは、立缶を用いたがこれを匯ぶ場合必

ずもれてザツクとは世のものか油でぬれるのであるがこれらもろくないようなく小うはないものか。
また、テルモスが一ツ被えなくなつたのがテルモスだけは別にして一人が注意して煙ぶよりにするとよいと思ふ。

以上簡単ながら思ひつくままに感想を書いたわけだが今後裝備係を受けしつ入にとつて参考になれば幸である。
（谷垣）

4 氣象報告

三月十五日入山早々、快晴に恵れて美陀ヶ原のボツカを始めた午後天候が急変し、北吹雪の善天狗の小屋へ迷が込んだ。前日夜又は十五日朝の天気圖を確かめていれば少くとも未浴のある行動がとれたであらう。天候に対する不注意、考えの甘さによる一大失敗であつた。十六日も前線通過による強風で躊躇したのが後三日間はフルに行動出来た、二十日朝台巻坊主の北上を知り、空模様の險悪とも氣の所替かと思われる程度であつたが思い切つて午前中だけの行動に決定。この際

自虐ある判断が出来ぬ時、「一日を無駄にしてしまふのではないか」という不安が感かつた。中途半端な氣象知識は害になると痛感す、後二日間は晴れ、積雪状態も絶好となり氣を強くしたのが次の四日間の悪天でト力雪が降り形勢不利となる。次の二日間は晴れたが表相雪崩れが激しくアタツクは出社ないまま、二十九日から氣温が上り、フツパにも雪面子が出来る程になる三十日午後より四月一日まで雨が続き、ツイニロンテント内は濡れとなつた時、一日十時晴天を少し見て撤収を決定したが、殊いラツセルと降雪の為、M.C.味の雪洞で一夜を明かした。この日は大陸に強い高氣圧が本州太平洋沿いに前線を持つ低氣圧群があつて季節風が強いのは当然で、普通の条件下では高度を増して行く行動はとらなかつたであらう。

今合宿中で所心のアタツク期である二十四日、三十一日の間のみ、春特有の四日通期が全く崩れ、さらに前線が三日間停滞し、善雨に昇舞れたのは余りにも皮肉な気象条件であつた。表層雪崩の著しい岩壁を對象とするこの登攀は積雪状態をえ通常であるならば可能であるといふ自信は得たが、三月下旬より四月上旬

までの向で、アタックに必要な最少三日間の晴天に恵
れる可能性をばたしてどの程度期待出来るかと言う疑
問が残る。その芽の烏気圧の動きが、如何なる特徴を
持つかを知る時には前々より気象に絶えず留意しなけ
ればならないと思ふ。

5 釧岳東面偵察及び荷上げ

(八峰の末端からのトレース)

期向 11月2日(晴) 11月7日

メンバー 大崎、村井、谷垣、白井、三沢、峯田

11月2日(曇時々雨) 11月20立山荘(ホテル)

16.00天狗小屋

この向、各自より荷をすつ二往復する。17.20岩岩

11月3日(曇) 6.35 8.20岩岩より天狗小屋を往復

とびく 14.20岩岩より釧岳前小屋を往復。これで10人10

日分の食料、燃料を荷上げした。

11月4日(雨後晴) 11.45小屋発、15.40小屋帰着。真

砂我求尾根の最初より岩峰まで行き、釧岳への下降路と

入峰の一峰への取つきを偵察。全員同一行動

11月5日(晴) 6.00二隊に分れて出発 0.5.ニ

人は釧岳を下降し、0.3の沢をつめたが霧の連続のため

左岸の尾根に逃げ四の沢へのコルに出た。(17.00) 霧

がつけば日没近く、急いで四の沢を降る。途中から南

中ゼランブの老木をより降つたが霧は凍り始め、非

常に時間がかかった。22.00長次郎谷出合の岩陰でビザ

アーク。平蔵谷出合までの残雪が青氷と化し、クレゾ

アス多く夜間行動は危険な為小屋に帰るのを断念する

村井、谷垣等四人は真砂岳東尾根を辿り真砂沢出合

へのびる支尾根を釧岳へ降り、小屋へ帰った。(22.00)

11月6日(晴) 6.00大崎、白井は岩小屋を出発、

10.00小屋帰着、谷垣、峯田は別山尾根を本峰頂上へ。

村井、三沢は釧岳を下り平蔵谷出合上段で0.5ニ人区

確認し、本峰へ向つた。15.00全員小屋帰着

11月7日(雪) 岩岩を登り下山

冬山、春山の偵察と荷上げにメンバーが分散し十分

百射を運ぶことが出来なかつたが、ハシゴ谷乗越の

手前の尾根から釧岳に下りオミ尾根に取付くといふ尾

通しが立つた。レカレトリースしてないこと。連続

しているナイフリツダが積雪期に置れるか否か。一峰

東面の雪崩の心配。此にルートがないかどうか、等々

宿合山夏

千丈沢及び

槍ヶ岳周辺

未知の奥が多く、春山で環場へ来てから再び偵察することになった。
(記 大島)

一般に夏の合宿地としては飯や穂高が選ばれることが多いが、我々も過ぎる年間、これらの山で合宿していた。けれどもこれらの山の混雑がりは年々はなはだしくなり、まに新鮮さも乏しくなつたので、今年の合宿地はこれ以外の場所をさがすことになつた。いくつかの候補地のうち、豊富な雪渓とあまり人に知られていない、静かな上に変化に富む岩場のある北鎌側谷が合宿地に選ばれた。

北鎌尾根を全般村に見ると、独標以南の千丈沢側には岩登りの対象となる岩場があるが、天井沢側や独標

以北には森林が発達してゐて岩場は殆んど見られない。千丈側の岩場を穂高や飯でよく知られている岩場と比較してみると、その最大の特徴は狭く、急な沢が複雑に発達し、数多くの枝沢に分かれている地形が極めて複雑なことである。この奥は特に、ここに初めて合宿する我々にとつて重要な奥で、ある程度の探険的な興味をそえられる奥でもあつた。またこの附近には殆んど知られていない沢があるが、この中東沢の遊行が篠田先生のアドベイスによつて計画の中に組み入れられた。

合宿参加者は以下の通りである。

野田(ハシ)、平田(ハシ) 佐藤、田井、大工原、森村
田村、村井、大島、西垣、酒井、打出、五百蔵、森田
白井、保母、錦田、谷垣、高橋、守野、前沢、金子、
米沢、丸尾、梶本、三沢、加藤、松井、
それに卵として玄箱、岡田、

7月13日 先発隊大隊発。田村ら三名は先に千丈沢
へ入り偵察とキヤンプ地の選定、整備を行つた。大工原
ら2名は洞野で食糧の購入にきる。
7月15日 本隊大隊発

7月16日 快晴 大町より五路電所迄の上倉登
1630才五路電所着

湯根まで入る予定であつたが大町での連絡がスムー
スでなかつた為と倉への乗詰が遅れた。懸念していた
白狐5号は本邦を外れ、好天に恵まれた。

7月17日 快晴 オ五↓BC 6.30才五登 9.00湯根
1730BC 着

高瀬入のルートは起伏の少ない茶なルートであるが、
非常な時間を要し、六の天出合より少し上流の右岸の
キヤンプ地に入る。場所が狭いが仲夏、長いキヤンプで
ある。

7月18日 曇時々小雨

沢の概略を知るために偵察、いづれの沢も急なゴル
ジエをなしているが、六の沢はゆるやかに、傾斜や雪蓋
は新入の雪渓技術訓練に最適であり北鎌尾根からの下
山ルートとして、大槍を越えるわずらわしさを避け
得る唯一のルートである。五の沢は岩場の中核部には
くつもの枝沢を広がれ、踏踏した谷で、主要なリツツ
は殆んどこの沢から取付くことになる。

へここの地名は慶応大学の呼称と、法政大学のそれ

の二つがあり、我々は尾根については慶応の、沢につ
いては法政の呼称を使つてゐるが、非常に不便である
全般的な名称の統一が必要であらう。

7月19日 ↓26日

この期間の定着合宿中の登はん対象は、A稜、B稜
C稜、D稜 C稜ツルム、六の天左方の小尾根、小槍
硫黄岳、中東天などであり、天候のはつきりしない日
には双六岳、西岳、南岳方面へ歩いた。北鎌側面の各
稜は最匠の掛人などにくわしいので時間記録の一例に
補足的説明を加えるに止める。

最もアプローチの短いのがC稜ツルムである。正面
の高度差は30m程度であるが草村と硬い岩のミックス
した非常な急傾斜で膝丈登はんを強いられる。中程に
5程の広い斜面がありこの上に見事な凹角がある。私
の記録では11ピッチ、5時間。また正面左方にまっす
ぐつき上つたクラックがあり、玄橋、再井が2日に登
つた。恐らく初登はんである。

A稜は最匠の2ピッチが非常なナイフツジである。
そこに至る3〜4ピッチは素晴らしいフェースである。

C稜は上半部はコンティニューアスでも登れる容易な

尾根であるが、取付きは各パーティイまちまちである。口稜は最もスケールが大きく、アプローチも最長である。大きく三段に分れていて取付に洞穴があり、冬期にビバークした記録を入れた痕がある。取付きより少時間、さくろピッチ。取付以前から相寺手本之がある。

硫黄岳、赤岳は北鎌尾根千文沢側の展望台として最も優れているが、岩穴極めておろく、登山の決断を求めむべくもない。いづれも廻れた天をつめて稜線へ出るが、この地形もよく知られていない、赤岳↓硫黄岳の稜走はあまりにも岩がもろく、危険である。

中東沢へは村井、白井らが試登したが相憎の降雨による溜水で目的を達し得なかつた。

なお、合宿中の天候は8/23必日が雨又は曇一時雨であった以外は、絶好の晴天で相寺の行動が出来、一昨年と悪まれなかつた夏山合宿も久し振りに相寺の収穫があつたと云えよう。

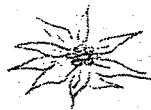
7月27日 快晴 BC ↓ 湯候 (解散)

撤収を行之、湯候で各縦走隊毎に別行動。後立山パーティは濁へ、他は湯候にキヤンプ。才五郎池所は預

けた縦走用の荷物を荷上げする。桶井は飛騨乗越至由帰阪、村井は双六小屋へ向う。

以上の旅な経過で夏山定着合宿を終えたが天候も良好で、各部員の熱意も相寺に發揮され、北鎌尾根を登山に目的にもほほかなつた成果が得られたことと思ふ。唯一の痛恨事は事後の記録の整理が不充分であつたため貴重なスケッチや記録の一部を散いつれてしまつたことである。

リーダーとしても残念なことである。記録整理の爲に強力な記録集・中機函を作るべきであらう。



一般山行報告

槍ヶ岳北鎌尾根

期間 4月29日 — 5月4日

メンバー 野田、佐藤、大島

4月29日(晴) 25時温泉発 11:40 12:40 湯原
13:20 13:30 才五路駐所 16:10 湯原(三角小屋)

普温泉の桜と高瀬溪谷のコブシが非常に美しかった。
4月30日(晴後曇) 6:20 出発 8:20 千天 11:35

北鎌沢 11:40 12:30 偵察 13:30 尾根取付 19:30 ビ
ツアゲ地。水鏡より残雪あり、北鎌沢は雪崩の危険
を感じたので、出発より一時間の所で右岸の小沢をた
ゆ、日大ルートを経て独標に出ようとしたが尾根の上
部は雪のナイフリッジの連続。日も暮れたのでクレバ
ス中でビブアツク。夜半より小雨。寝るため殆んど

眠れず。

5月1日(小雨) 7:10 出発、7:30 引返来 10:05 日大
小屋 相変らずの雪のナイフリッジが雨水を含み、足
元が不安なものと、クレバスが多いため、安全線を取り
小屋へ戻る。全身ずぶぬれとなる。

5月2日(快晴) 6:40 出発 7:55 10:55 北鎌沢の
コル 14:10 独標基部 15:20 独標頂上 ビブアツク。昨日
の失敗を頼み、早朝の内に沢をつめる。稜線上では腐
れ雪と風傾斜と重いザツクに悩む。この向かもレカニ
頭を見る。独標上、満天の星をながめてのビブアツク
はすばらしいかった。

5月3日(晴後雪) 8:20 出発 11:20 北鎌平 14:20
槍頂上、17:10 肩の小屋。千丈側はカチカチの堅雪、天
丈側は、降までもぐる濡れ雪という事で変化があつて
おもしろい。夏なら20分もかからぬ稜の登降に、濡れ
雪と重荷と風雪に悩まされ肩の小屋に飛込んだ時は、
既に日が暮れかけていた。

5月4日(曇後晴) 7:40 出発 7:55 11:01 一候
小屋 11:40 独標 12:40 慮天園 東鎌尾根を経て蒸岳ま
で縦走する積りであつたが、休憩の日数、食料、残雪

庵などを檢当して捨天を下ることにした。横尾からは夏のごとき騒々しきであつた。穂高の残雪、梓川の新緑、雪解け水、そして蛙の響み、やはり五月の上高地であつた、とにかく五月の山を踏喫した。(詠大島)

五月の内蔵助平

メンバー 兼清、中村、西井

五月28日 曇のち晴

追分12:00 — 雷鳥沢4:30

五月29日 晴

雷鳥沢7:10 — 真砂平7:50 — ハシゴダン出合12:20 —
ハシゴダン乗越3:15 — 内蔵助平3:40

直砂平を過ぎる頃から、雪けいがかられる。北ノ平山を後に見て、ハシゴダンを登る。広く明るい沢である。乗越手前で膝までのソツヘルを強いられるが、乗越からの展望は素晴らしい。足下に雪の内蔵助平、右に立山東面のカール、左の黒部別山の彼方に黒く走る赤沢を眺めず眺める。

五月30日 晴 停帯

バサツと首を立てて、雪に埋れていた岳樺が青空におどり出る。枝先に青い小さな新芽がほころんでいた。

五月一日 雨 停帯

五月二日 晴

内蔵助平7:00 — 黒部出合7:00 — 御前谷出合12:00 — 八

内蔵助平4:00

黒部別山の絶壁を丘に見て内蔵助沢を下る。ブソシエが右々に出ている。黒部出合から御前谷出合まで、雪の合間に出ている山道をたどりながら進む。御前谷出合附近は丁度オ四発砲所建設の最中であつた。飯場わきの小径から、御前谷に入る。雪はあらかじめ消え、雪どけ水が雑となつて流れている。草村と岩の左岸を、いに進むこと二時向半、右岸ハスノーブリツダを渡り雪の急斜面を登り切ると、沢は広くひらけ、内蔵助平の乗越まぶたんたんとした登りになる。

五月三日 晴

内蔵助平 — 黒部別山

黒部別山に大きな雪ひが張り出して、なだらかな尾根となつてゐる。剣の展望が素晴らしい。

5月24日 晴

大町ルートを経て下山

なお、釜山への尾根をトレースする予定だったが、天候が悪化しそうだったので、後日を期することにした。文献は冠松次郎著「黒部」である。(西井記)

赤石岳

メンバー 平田、田村、玄瀬、西垣、西川

四月二十九日 (晴) 序郡大島よりバスで大河

原へ、シスターボートの車等の声に悩まされた。

トラップに便乗して、釜沢へ1200、昼食をとつて小波川の右岸ぞりに小波湯跡まで来た。夏はこより凌ぎをくり返しながら玄河原までゆくのだけれど、水量が多く渡れないので、地図にもある右岸沼いのへつり道をゆく。産道にちかい道で崖くづれた所ではピツケルでステツツを切つたりして進む。薄暗くなつて左側より大きな沢のはいつてくるのがつかつた。その岩の上に「板屋谷、上流に岩小屋あり」とかいてある。これ幸いとそこにまるとにする。1200着岩小

屋はクマも泊れそうなので中で火をたきスキヤキをする。

三十日 (曇) 岩小屋1200 あいかはらず右岸通

し、踏跡のような道に夕日をたよりにしたりしながら進む。高山沢をすぎキタ沢の手前で川の水も少くなつたので河原へおりの。

ももまでのしびれる程冷い凌ぎを二回して1600やつと玄河原の小屋へ着いた。釜沢から夏なら五、六時頃のところ二日もかかつた。

五月一日 (雨、夜曇) 停滞

二日 (晴) 5:00発初め夏道どおりにゆく、森林

限界のあたりよりアイゼンをつけ、夏道は大聖寺平へトラバース気味に着いているがそのまま小赤石への尾根を直登する。頂上1300以上のやぐらは半歩雪にうまり小赤石は東側に雪死がでていた。くさつた雪の中を百向洞山ノ家へ、山ノ家は大沢谷からの尾根の末端より氷ほご登つたところがあり少しわかりにくい。1700。三日 (晴) 山の家の始大沢のゴルより、大沢へ下る1800 軌道にのせてもらうことにしたがなかなか来ず、その上北又渡までしかゆかなかつた。比又

より最盛バスに間に合うよう急いだが少しのことご向
に合はず、その後は木沢村の前旅館にとまった。

立山 剣

期間 4月28日～5月5日

メンバー 大工原、前沢、保母、綿田、白井

丸尾、

4月28日 20:10 大段巻

4月29日 (晴時々曇) 美女平から上ノ小平まで
バス。上ノ小平から荷物ば雪上車に託しスキーのみか
ついで歩く。12:30ホテル着、12:30ホテル発、スキーも
かつぎぬ貫の荷にあえいだ。途中で昼食、天狗附近で
ほとんどバテかけ、あとはフラフラと8分房岩にたどり
着く。今年は雪が多いとかで、まだ木はなく雪をど
かしていた。20:00夕食

4月30日 (曇) 立山の東面を見るに行く。7:05房岩巻
10:30一ノ越着。ここにスキーをデポし、アイゼンをどっ
ける。御山谷の斜面をトラバースし、タンボ沢の頭の
東面を見る。ここに昼食し、女いでタンボ沢の頭の上

つて立山東面を見る。各尾根は岩峰が連つており、天
は雪崩のあとが著しい。稜線から大きな雪庇が東面に
出ている。天の傾斜はアイゼンをきかすれば、登れそ
うである。15:00一ノ越着、ここからスキーで房岩に帰
る。18:00夕食 22:30寝る

5月1日 (雨、風強し) 停帯

5月2日 (快晴) 4:40 起床。オートミールを
作ったので、朝食に時雨がかわらない。4:25房岩巻。

7:30御前表越着。ここでアイゼンをつける。斜面をト
ラバースして直接黒百合のゴルに出る。7:35前飯。平
蔵コルの手前で、昼食。10:50平蔵コル、カニの横、バイ
は完全に鎖が出ている。11:25剣頂上着、すばらしい眺
めをたのしむ。12:00頂上巻。カニの横、バイで大分待た
された。剣に調子よくいつたので、一服、剣で30分程
一服。14:30御前着。楽しみはしていた雷鳥のグリセー
ドは、雪がくさくさで出来ず、減念だった。12:00房岩着
5月3日 (快晴) 4:00起床 8:30出発 直砂と
大沢の間の、小さなピークから出る尾根を登る。7:00
ピーク着。ここでアイゼンをどける。稜線はさすがに
寒く、アイゼンが快適にきく。10:00大沢頂上、頂上附

丘は岩の上に薄米が張っている。10.30 雄山神社、寒いのでお参りもそこそこ、山崎カール南側の尾根を駆け降る。途中で昼食。下るにつれて暑くなる。12.45 彦泊着。スキーをする。

5月24日(曇、小雨、下界は晴) 4.15 起床。パツキングをせし、残った食糧を買つてもらう。10.00 彦泊着。天狗まではスキーをかついで行く。11.00 天狗でスキーをけ出せ、11.40 ホテル着。昼食。13.10 ホテル着。ここからは、ストックで押さぬと、すべらない。14.50 上ノ小平着。ここからバスで下山。富山で一休み、夜行で帰阪 (大工系)

中尾峠——徳本峠

メンバー 打出・佐藤(下)

五月二十九日(晴) 夜行と長時間バスにゆられたので、二人共調子が出ず、中尾峠についたのは四時すぎで、峠附近には雪が残っており、水には不自由しなかつた。

槍見温泉(12.45)——中尾峠(4.10)

五月三十日(晴後曇)

焼の小屋より西穂山荘に行く道がはつきりせず、相当地間がかわつた。天気があやしくなつたので、西穂に行くのをあきらめ、独標より引返した。西穂山荘の前でグリセードの練習をしていた明大ワンダーホゲルの連中が部員の一入が足の骨折で騒いでいた。明神館にたつたのは四時頃。そこからからみで徳天を往復して、その時は明神館でとまる。

焼の小屋(7.00)——西穂山荘(11.00)——独標(12.00)——明神館(3.30)

五月三十一日(晴)

前夜上高地からバスで帰るか、徳本峠を越えて、島々に出るか大いにもめたが、天気がすばらしく良いので峠を越えることにした。峠の上で一休みしていると、巨大のパーティが新人勧誘のため、二三人ほど登つてくるのに出会つた。一二年は十貫ほどの荷をかつぎ、三年はからみであつた。酒沢にでも入るのだろう。岩奥留まで快調にとばした。小屋には人がおらず、食べ残した食糧を餌えに人の背に残していく。二股の取入口より単軌本軌道上を島々に向つてとばす。夏にくる

所ではないと思いたら。

明神館(730) — 惣本峠(710) — 岩奥留(1030)

— 二岐(110) — 島々(320)

今日の山行きは二人でのんびりとした峠越を目的にしたので目的は達せられたと思う。五月の径りから六月の初めにかけて天気が良いといふことがわかった。崖林をさげたので、人もあまりおらず、上高地の緑を染しむのにはもつてこいの時期だった。(佐藤)

小豆島、柵岳

メンバー 金子、五百蔵

期間 6月/日

記録

坂出番(400) — (半泊) — 同落(500) — 橋着(530)
取付番(35) — 登はん開始(100) — 昼食(240) — 1200
— 柵岳頂上登はん終了(42) — 頂上(1517) — 取付
610 — 同落(125) — 坂手(215)

岩は概して大まか、オニピツナの釘り上げ気味にトラバースする所と、オニピツナのトラバースがちよつ

と緊張する程度で、楽な岩場だ。バリエーションを送るが、景色も良く、滑る岩で、観望をかねて行くには絶好。但し、観望シーズンに上坪から行くと、行き先の地では取れないから御注意 (五百蔵記)

愛知川

メンバー 兼清、西井

6月15日(晴)

大阪 2.00 — へ日市 1.10 — 黄和田口 1.30 — 折戸峠 落電所に泊る。

6月16日(晴)

折戸峠 0.10 — ダム 1.40 — 白滝谷出合 0.10 — 天狗巻 1.00
出合 1.30 — 上水晶谷出合 3.00 — 国見峠 1.30 — 湯ノ山
初夏の土曜、日曜を利用して、新緑の溪谷をわらわはきでバシマバシマ歩くのは楽しい。更に日が許せば御在所の岩場にも行ける

文獻 越匠成の山

山と溪谷社

(西井記)

雲ノ平——剣縦走

メンバー 西垣、五百蔵、森田、白井、金子、三

沢、松井、加藤

7月27日 合宿を差つて全員湯殿へ集つた。縦走の荷が重すぎた。後で食いのばしをしてよいからということにして腹一つばし食料区つめこむ。合宿のつかれもあるし、これから出発するのだから栄養をとることも必要だろう。

7月28日(晴) 7:40湯殿登 11:20フリモ沢出合

合宿三保レンゲ、レンゲの登りは中々のアルバイト

7月29日(晴) 7:30登11:30野の平スイス庭園にテントを張る。西垣と金子は岩奥のつりに祖父沢へ残りは雪の平を散歩する。岩奥は小といのをやつと三匹つてきた。これを全員で食べながらほんの一切れずつだつた。

7月30日(晴) 五百蔵、金子、西垣、三沢は雨天

ヶ原大東、越山、森田、白井、加藤、松井は水詰、赤中へそれぞれ空身で往復する。

7月31日(晴) 8:30雲の平発 9:30栗原沢出合
16:00太郎峠

8月1日 8:20太郎発、10:00栗原峠 18:30越中沢岳
越中沢の頂上には雪がのこり快適なテント場があつた

8月2日 8:10発 五色10:00一の越 15:00 ガラ峠で
立山温泉へ下りる五百蔵とわかれる。一の越では文し
ぶりにスカートをはいた人をみて喜んだ。

8月3日(晴) 8:45発 雄山7:45 三田平10:10
剣沢にテントを張り空身で頂上へゆく。頂上14:00力二
の横ばい附近は登る人おる人が言い合ひをするほど
の混雑やむをえず使の岩を登る。下りは平蔵をグリセ
ードでおりにた。

8:50 テント着

8月4日(晴) 8:00発二股10:30池の平13:30
千人池附近はテントがはれず池の平がテント指定地に
なつていた。

8月5日(晴) 5:30発アソ原必上 部軌道にしま
いこと乗乗のきだが無蓋車にのせられたためトンネル
の中でびしょぬれになりとんだ所ではじめて雨にあつ
た。樺平10:00発富山14:00着

鳥帽子―針之木―白馬

期 間 7月28日〜8月4日

メンバー 大島、齋田、丸尾、宇野、梶本

7月27日(晴) 夕30奥十文キヤマンフサイト(合宿地)

11.30湯候、16.30湯沢出合

7月28日(晴) 夕30出巻へブナ立尾根V夕30にせ鳥

帽子岳啓りの雪渓横にキヤマン

7月29日(晴) 休養 ある者は黒岳まで、又は野口

五郎岳まで往復

7月30日(晴) 6.30出巻夕30不対岳12.00船窪小屋縦

走中、最悪の日であり全員コツテリのびた。

7月31日(晴) 夕30出巻14.00針の木峠16.00針之木と

スバリ岳のコレにキヤマン

8月1日(晴) 5.45出巻8.40新越11.30種池14.30冷小

屋上方の雪渓筋にキヤマン

8月2日(晴) 5.10出巻夕6.45新南槍頂上13.40五巻

岳16.45五巻小屋 昨日より驟然人が増す

8月3日(晴) 夕30出巻8.00尾松小屋ここより空身

で白馬往復

8月4日(晴) 11.00出巻、八方尾根をユルリと下る

船本峰から三の窓を過つて池の平

期 日 8月14日〜8月19日

メンバー 白井他々名

8月14日(曇) 夕30弥陀ヶ原ホテル出、12.10地獄谷

5.10船山荘(泊)

8月17日(曇後晴) 6.10船山荘出、夕4.40本峰、2.30

三の窓コル 3.30出、夕7.50小窓三ノ窓出合 11.30池の

平小屋(泊)

今日は夕時回来のアルバイトだった。これはメンバ
ーに横れない者州居にため本峰から三の窓の向で意外
に時向をとつたことと8月中期の雪渓の状態を計算に
入れていなかつたためと思われる。三の窓の雪渓はア
イゼンなレではおられない状態だった。小窓三の窓
出合から北の平までは夜歩いたが合宿後の縦走の時直
つていたのでまよわずに池の平についた。

8月18日(雨) 帰郷

8月19日(曇) 8.10池の平出12.00阿曾原峠、阿曾原ノ

東沢―黒部上廊下―平

メンバー 村井(レ) 谷垣、保母、酒井(食糧)

高橋(裝備)

春の黒部川上廊下横断計画に参加した我々は興味の
巽谷の静寂とした音の姿に接することが出来た。中元
のタル沢附近より見る上の黒ピンカの上流、及び上下
流所方向に望まれるさしせまるが如き所岸の壁は、我
々の心には、暗黙の内に夏の上廊下湖行の夢を掲かせた。
7月27日(快晴) (湯股9.00―三ツ俣16.00) (双
六2.00―三ツ俣12.00)

合宿校全員三ツ俣に集結し、湖行に必要な裝備を
突検する、テントも支柱ブランドシートを皆き整置化
を計り、食糧にも心を配つた。

7月28日(快晴) (三ツ又8.00―東沢乗越11.30―
三ノ沢出合15.30)

横れぬ地下足袋に此れからの教しい渡渉を感ひつつ、
野溪今迄有えやらぬ東沢に足を踏み入れた。水重は別
年に見ない程多く、野溪が残つていゝるのも珍らしい。

好天に恵まれ、ブトに悩まされるも湖行はかどる。
野口五郎の機織よりの三ノ沢出合附近にテントを張る

7月29日(快晴) (三ノ沢8.00―黒部出合14.00
三ノ沢出合に掛小屋を待つ岩奥取り崖の取巻を登て
から湖行中も岩奥が鋭くなる。谷垣がよどみに乗り上
がら岩奥を手のつかみにするに及んで皆夕食の材料仕入
れに精を出す。古い荒木の推積地を廻り越すと濃紺の
黒部川上流に出る。川仰おい乗る砂五にテント地を設
ける。紫の静、林々な色酒の石の大群、酒罎を取りま
く山塊は緑一色である。その夜の星座、美しかつたこ
れ。白く冠松次郎氏の行の姿を想像しながら岩奥の塩
焼きに舌鼓を打つ

7月30日(出合8.00―下の黒ピンガ11.00―引返レ
突合時―テント4.30)

テント地よりすぐに渡渉が始まる。前日までの修長
な一日は許されない。丘岸通りに蹟を行く。下の黒ピ
ンカ手前で行きどまり20m程泳いで直下に産するもそ
れより知れ程は水重多く前進不可能だ。やむなく石岸
に渡り、ヨロイの如き壁を右方に耐え岩間の高巻をす
る。ピンカを通り越すと完全な廊下だ。廊下の樽谷に

任剛とれながら左岸のへつりを罷けるも口元のタル又
手前にて行きどまり、前途を断念。引き返し河原にテ
ントを張る。数日に及ぶ腰までの時には胸に産する液
涕で全員瘦劣こんぱいだ。残者を追いつかざる

7月31日 (快晴) (テント此の 出合にの、
平々))

朝老を一身にあび筋下に身を引かれつゝ、みさ返す。
今回の計画は十分な準備を経て行なわれたのだから、全
員の無遅願及び例年になく水量の増不成功に終つた。
がフラジで痛めた足を引きずりながら平に向う我々の
心に、精足感が宿つていたのは断じて瘦我儘でなかつ
たはずだ。双六小屋の小老の言う三回目のお成り説は
我々の心の支え、否これからの目標を手えるものであ
らう。

8月1日 (快晴) (平々の、針ノ木味4.00)

8月2日 下山

(村井記)

黒部源流——東沢

期間 7月29日—8月7日

メンバー 野田、前沢、黒木、高橋
昨年来た時は、もう四五日遅く、白い霧のような氷
が一面に降りていた岩苔平(青天ヶ原)は、今年も澄
色のユリが花ざかりであつた。

昨年と同様美しいと感じた。大抵のところは二度目
に来た時は、あまりに期待が大きすぎたつかりするも
のであるが、ここは、そうでなくて嬉しかつた。

雪が平を出たのが昼前で途中踏跡を見失ない奥の夕
ル沢ぞいに下つたので、玄石の岩小屋についたのは四
時頃だつた。静かなところで、水量が多かつた。

シラフカバールと、ツエルトだけだったので寒く、よ
く眠れなかつたが、翌日、六時に出発して稜線に向つ
た。例年より水量が多いらしく、幾度も高巻させし
必要のないところまで高巻させたのかもしれない。一
ヶ所だけカンバを切つて、丸木橋をかけたところもあ
つた。このため時間を喰ひ、葉師末まで五時間程かか
つた。葉師末附近は、のんびりした河原であつた。葉
師末出合は、雪ヶ平への登り口で、昨年旋歩したとこ
ろだが、癒えていた程のことではなく、小川のように感
じた。赤木沢附近は、聞いていた通り、ゴルジエにな

つていて、水にうつった顔が美しかった。

祖父天附近では三人共バテてしまい、祖父平で、誰からともなく座つてしまつた。考えてみると、空身とは云え、朝から今まで（二時半）歩きずめで、寝不足だから仕方がない。

祖父天は少レ登ると、体の調子が悪くてテントに残つた黒木が、釣の名人振りを發揮して、鮎を釣つていた。雲ヶ平の祖父岳のふちとのテント場につくころには、地下足袋の足を動かすのが困難なほどバテていた。その時は、鮎に舌づつみをつた。

翌々日、東天を下つた。

始め、五郎の水を通りたかつたが、遠いので東天系窓から下つた。景越の少し下は、一面の御花畠で花を踏むのがかわいそつであつた。茨につくと、大浜右岸に踏跡があり進なく昼ごろ、鮎釣りの小屋についた。小さな小屋で、中につりどおなどがおいてあるのが見えたら、着かつたので、そこから二時間程下つたところまでテントを張り、黒木が尺以上もある鮎をつた。

東天は、期待していた通り、静かで、美しい沢で、針葉樹と、流れの石の具合が何とも云えずよかつた。

翌日、思つたより時間がかかり昼ごろ黒部本流に出た。上層下をのぞく計画であつたが、もう山にも入らなうれたので、針ノ木峠を越えて帰ることにした。針ノ木峠で入の多いのに驚いた。

7月29日 湯原 — 三俣レンゲ

7月30日 三俣 — 雲ヶ平 — 玄石

7月31日 立石 — 源流 — 雲ヶ平

8月1日 雲ヶ平湖遊

8月2日 雲ヶ平 — 東天乗越 — 東天

8月3日 東天 — 黒部出合

8月4日 出合 — 平 — 南天出合

8月5日 南天出合 — 針ノ木峠 — 大町

雲の平行

期間 8月22日 — 8月28日

メンバー 大工原 玄瀬

8月22日（曇後時）13.20大町発、14.20葛湯温泉着、大工原と落ち会う。雨の降自炊小屋着

8月23日（晴後曇）8.40葛湯温泉発、11.00濁川小屋着

東沢往復。濁小屋泊

8月24日(晴時々曇) 6.30濁小屋発、7.30湯股発、
8.30未だ、10.30三俣連華着。仔藤新道は意外に長かつた。
三俣には上卸下組の食糧があり、とても助かつた。

小屋泊

8月25日(曇後晴、夜雨) 雪の平岳散歩、踏釣りの
人を思かけた。一箇向位、踏釣りでもし乍らここで遭
したいものです。

8月26日(風雨後曇) 帰齋

8月27日(曇) 6.45三俣小屋発、7.30双六発

10.30大野間乗越発 15.10猪田川の左、右俣出合最澄バス
を止して、今田館君

8月28日(快晴) 高山を全て帰阪

今度の山行程、ゲルピニストのつらさを味わつたこと
はない。しかし神様はよくしてくれましたので、困つた者には
必ず救いの手をさしのべてくれる。(玄瀬誌)

九重連峰

メンバー

異木

期前 八月二十七日〜三十日

時間記録紛失のため出発と到着の時間はおよそしか
わからない。

8月27日(晴) 10.30大分県管理畜場発。帰齋老の
入道より夜行で熊本、經由竹田に廻つてまで一理もして
いない為、途中木陰で昼寝して15.30玄華院温泉着。ま
わりを単山にとりかこまれた美しい坊ガツルの小高原
のはずれにある硫黄泉。石栗の木、馬蹄木が多くその
名をとつたアセビ小屋も丘くにある。

29日(晴後曇) 大船山を往復、ガスのため早
めに降りて午後は坊ガツルに散歩。放牧の黒牛とテン
トと小川の落着いた景色

30日(快晴) 前二日の暑さをこりてる時限出発
九重山頂に着くと丁度阿蘇山が露れればかりで煙の
巻はまぼ小さかつた。後は收産峠より硫黄冷泉、玄瀬
には30着、あまりの冷さに手、足、顔を凍つたのみで
すぐバスで久大観の麓中村まで出た。

穂高（屏凡北壁・北尾根）

8月30日（晴）7月2日

メンバー 大島 若、玉井康雄

8月30日（晴）1609 大段巻

前穂北尾根の屏凡岩からの絶登とジマン飛騨巻が
目的であった。

8月31日（快晴） 0540 飯原 0710 上高地 1100

1230 横尾にて昼食 1300 飛凡正面ルンセ押出し

1500 入高テラス。1600 引返す 1800 正面ルンセ押出し

1840 横尾山荘

飯原から入ると時間と金の経消になる。おかげで午
後から屏風岩へ出掛けることになった。ルートは容易
といわれる比叡ルート。横尾林道から3のガリーを下
り本谷に出る。下流に向つてケルンに導かれて細い押
出しに着く。僅かな踏跡をたどり取付きの尾はらしの
よいテラスに出る。麓の穂の巨大なオーバーハングが
すばらしい。これより頭の上へくぐるとブツシユの中を
木登り、うんざりした隙、早付の外傾したネリテラス
に着いた。頭上に中央カンテ 入高テラスらしい。奥

にトラバースして正面横断ルートが縫っているのを確
かめて麓の稜の方へトラバース。下がすつぱり切れて
いるし、傾斜が垂直なのでブツシユにつかまつていて
も安心感が無い。アスガものすごい崖中玉井が不頼に
なり大霧は一入麓の穂に何つたが時雨切れて引返す。
下りは念の背ザイルを取り出レブツシユの中をコンテ
イニアス。今日はすしり分れたアブとブツシユで面
白くなかつたので明日は酒天より前穂に出ることにし
た。小屋泊りの快適さ、時計をばめて鳥に入る。

8月1日（晴） 0700 横尾 0915 酒天ヒユツテ

1040 朝食 1130 56のゴル 1420 1430 前穂頂上 1600

前穂1630 穂高小屋、酒天は雪多くスキーヤーも多かつ
た。56のゴル道もピツケルがあつても邪魔ではなかつ
た。北尾根は四峯と三峯が面白い。前穂頂上では別重
班がテントを張つていた。対尾根よりがすが出はじめ
夜になるとますます寒くなつた。

8月2日（晴） 0540 穂高山荘 0900 横尾 1200 上高

地 ジマンへ行く予定であつたが寒いが入の冷あきら
める。小屋泊りでは停滯が出来ないのでやむなくザイ
テンを下ると頭が強く吹きあげはじめ横尾についた頭

は完全と稱れた。拙本の風呂屋に廻轉したに於着いてみると残念にも公休日で休つかりし程。とにかく明るく自由な山行であつた。

(五井)

滝谷、ドーム中央稜

メンバー 金子、五百蔵

期間 10月10日〜12日

証 録

10月10日(晴)

上高地バス迄乗務——酒沢小屋着

北穂小屋まで行くはづだつたんだが

10月11日(快晴)

酒沢小屋登る100(南稜)——北穂頂上11.40

のんびりと北穂へ。頂上で昼食の後、金子はキレツト

登まで、五百蔵は複製板かかめてドーム附近を、それを

れ散歩

10月12日(ガス—薄晴—曇りガス)

小屋登る。ガスドーム基部を30—同塔を20—オコエ屋根

12.00—中央稜取つき10.20—昼食12.20〜13.15—ドーム頂上15.50—小屋着16.40

朝起きてみると一面のガス。その切れ目からのぞく
滝谷の岩々は蒸気を含んだ西風をまともにうけて、数
センチの厚さの霜で真白におおはれている。ぶきぶか
うなり声をあげ、うずまくガスと共に吹き上げて来る
風は耳の感覚がなくなるほどに冷い。少々F—9.17
をなくしたが、とにかく出発することにした。ドーム
附近まで来ると少し晴れ間が出たので、30分ばかり陽
なれば、こぼしてF—9.17をとりもどし、オコエ屋根
を下る。下附近のプロツケンを見たが、その珍らしさ
よりも、我々などよせつけさうにもない中央稜の感容
やガスにぬって南へ来る若石の音から受ける不安の
方が頭を離れぬままに中央稜に取りついた。最初のピ
ツチのいやな所は体の厚さほどしか痛のないナムニ。
背中とお腹とお尻を使つて、いも虫の如く登る。オコ
エのピツチではスリツアれて思わず大声を上げる。オコ
エピツチでルートを失う。いやな気持。取付での不安が
再び頭をもたげる。ガスで行先の見えぬ不安、打ち壊
されたハーケンを見つけた時の安心感。最後のピツチ

のハンブで、逃えずはがれて落ちて来る霜をかぶりながら、つかれた麻でカラビナにぶらさがっているところづく登るのがいやになる。だが、今来た所を下る事を考えるとぞつとして、やむなくハンブを棄てず、登はん終了。麓がガス。太陽は何処かへ行つてしまつてゐる。セカンドの確保。じつとしてゐると恐しく登り。だが、自力で登つたのだと思つと、そんな事は気にならぬ。夕食はガスソバ。でも、軽しかった。

10月13日(曇一晴)

岳川谷を下るはずだったが、前夜までの凸凹がめんどうになつて南嶽を下る。(五百蔵)

燕岳 — 常念小岳

期 間 10月15日 — 10月17日

メンバー 樫本勉一名

10月15日(快晴) 松本着々42 — 有明巻6,30

宮城5,46 — 中房巻巻着11,35 巻12,40 — 合戦川屋16,35(巻) 丹勢巻白風の被害により有明 — 中房間のバスは不通

で、途中教り所壊れた橋を渡る。

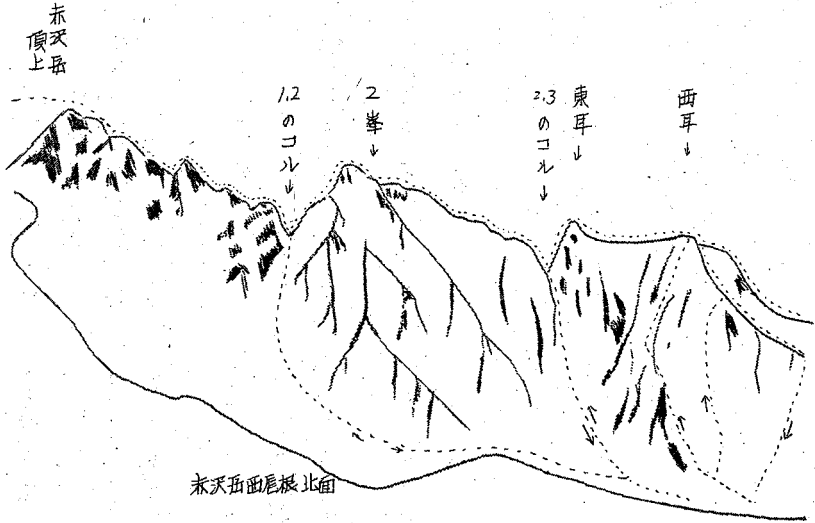
10月16日(曇のち小雪) 合戦小屋巻6,46 — 燕山荘10,00 — 大天荘14,16(10) 稜線近くからかなりの新雪があり、吹き留りでほひざと投するラッセルが強いられ大いど時向を食う。午後に降り雪が激しく降り、視界全くきかず大天荘に右る。

10月17日(晴のち曇)

大天荘巻6,00 — 常念小屋7,55 — 烏川橋13,35 出天町14,10

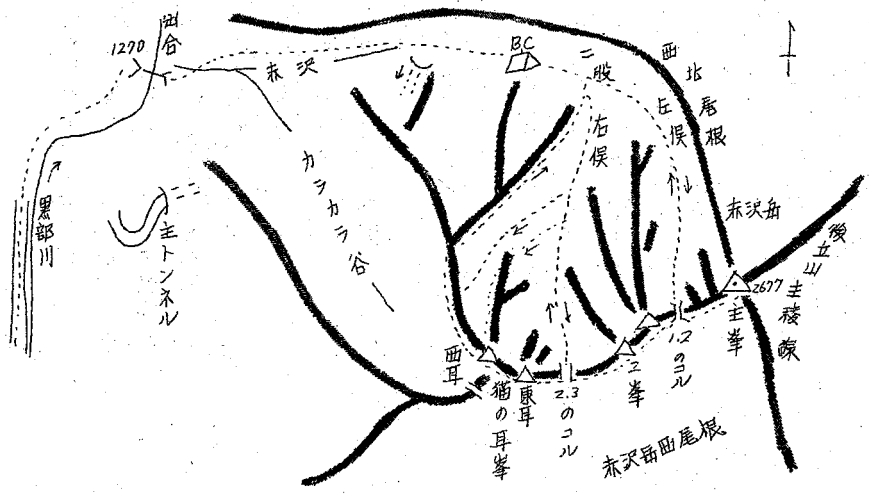
台風接近のため穂高まで行く予定を急変し、常念小屋を降り下山する。

一の沢を渡る道はかなり罷れており、時々道を見失う。今度の山行は経路台風で痛められ散々であつた。しかし晩秋の山々は峰々の新雪に紅葉が張り映え美しいプリント模様をなし、それはやがて来る冬山の前奏曲であるかのように感じられた。



赤沢岳尾根北面

赤沢岳尾根よりスケッチ
トレース (穴元)



——猫の耳に懸せられたのは昭和三十年の黒部横断計画に於いて湯沢田尻根から眺めた時からである。その後一部が部員の念願から猫の耳は離れ得ないものとなつてしまつた。しかし部の積雪期横断という大計画の前に、私たちの猫の耳行はのが／＼となつてしまつた。その向、又明の進歩は黒部を思ひのがさなかつた。黒部の千古の難関とは失われダム工事の密破の音が谷から谷へ響きわたつていた。今後はダム工事の完成とともに黒部もオニの上高地となりんとしている。私たちのこの記録が将来の黒部の発展の槍石となれば幸いである。——

黒部より赤沢岳西尾根

一九五八年の記録

期日 一九五八年六月二十六日 七月六日

メンバー 穴戸昭 広橋昭 笠松 田井 玉井

田村

六月二十六日(晴) 大段巻(富士山へ)

七月七日(雨) 弥生ヶ原ホテルまでワイゼルで

天狗平でキヤンプ、風雨強くナイロンテントの支柱折れ全員ビニロンに つまる。

六月廿八日(曇) 天狗平終日 30 一の越は 10 御山谷を下りタンボ沢出合で 17 30 キヤンプする。千物のため出発はおくれ赤沢まで行けなかつた。

六月廿九日(曇) タンボ沢出合 10 00 黒部出合 10 15 赤沢出合 11 橋 12 10 赤沢をつむトンネル橋穴 14 45 すこれ上つてキヤンプ 16 45

工事のため兼に赤沢出合に着く。赤沢は出合迄雪があり容易に登れた。適當な場所がなく雪溪の横の小な崖地に BC を作つたが、余り快適な場所でなく、積雪の多い年ならば当然雪洞の危険があると思われる。

七月三十日(晴) 赤沢を二股の上までつめ廣瀬を行つた。一パーテイはテントより三時間半で右候を 12 のコルへ登つた。コル附近は狭いレンジで急傾斜である。他のパーテイは右候を猫の耳(赤沢岳オニ等)の下へつめ取村ミルトを調べた。

七月一日(雨) 樽帯 千歳には止んだが若石多し。七月二日二人が三パーテイに分れてアタツプする。穴戸、広橋昭) 05 30 BC 巻 右候から猫の耳の田耳直

下まで雪渓をつめ、岩場にとりついた。巻石の多い、
逆石の壁をエビツチで西耳からダイレラトに出ている
尾根とりつき、西耳頂上にはつした。西耳ピークは、
右候パーティーと13の合流し東耳ピークよりコンテイニ
アスでスバリ剛をからみ33のゴルへ下るが如、ここは
両側をハンブレに壁にかこまれたすこいヤレットであ
る。ゴルから右候をエビツチスタツカットで下り、あ
とをグリセードで飛ばす。既着の。

〔田井、田村〕 05.55 BC 登左候をつめ12のゴル85
着ゴルより岩峰がたいに主峰へ出る(09.30)下りはス
バリ剛のブツシユぞいに12のゴルへ戻り、稜線ぞいに
12.20才エ峰にエつエ峰の3峰の壁はものすこく赤茶け
に逆石の岩で構成されている。猶の耳パーティーとコ
ルをかわして12.30 聖由4.30 BC へ来る。

〔笠松、玉井〕 07.00 登右候をつめ箱の耳直下で右
に上つてゐる急なルンどを登る。稜線の手前でフレバ
スな石とさげ、うすい雪ののつたスタゲを登り西尾根
稜線の小さといゴルに出る(11.00)ブツシユを滑りで西
耳ピークに13.10 着き西パーティーは合流

5月3日(晴)この日も同じパーティーで動く

〔玄橋、突戸昭〕 06.00 BC 登右候を23のゴルへつめ
ゴルよりエ峰へのリソツを登る。11.45 エ峰着、左候パ
ーティと合流して12.30 聖由4.30 主峰着。左候を通
つて17.45 BC へ帰る。

〔玉井、笠松〕 06.00 登左候をエ峰からの激しい若
石に悩まされつゝ12.30 聖由よりエ峰へ行き昭と合流

〔田村、田井〕 09.20 登右候より23のゴルを由箱の
耳を大きくスバリ剛をからんで11.45 東耳に出る

ブツシユの中を西尾根を下り、2ノ0の氷柱よりニ岐
めがけて支稜を下るも末端附近で荒上帯に出これに巻
いてニ岐に落ちる17.30 BC 着

5月4日(雨) 夜半テント近くの天が雪崩れ不気
味である。11.40 BC 登徽杖、工事場の好意で工事中の
大町トンネルを通過信州側にぬけた。(累部側12.05
大町側出口13.00)

このトンネル通過に際しては丁AC 南西支那教にす
ばに認識し通りである。 (田井、玉井)

最後に赤沢西尾根について総括図に見てみよう。
登攀時期としては無雪期は天歩き、天から尾根に取付
く場所及び、ブツシユが向題になると思われ、積雪期

七大きな雪崩れが出つた五月初ころが最適だろう。
 キャンプサイトは私たちがBCを改善した場所よりも、
 もう少し上の二股附近がよいと思うが、いづれにしても
 も注意しないと雪崩れに思舞れそうな危惧がぬぐい難
 い。雪が多い年ならばアフローチが長くなる欠点はあ
 るが、赤沢出合に置く方が無難だろう。西尾根から赤
 沢側へ派生している尾根は、いづれも黒部剛が赤沢け
 ら逆側の岩壁からなっていて、ここは到底登られそ
 くない。私たちがトレースした以外では二峯直接尾根
 がニアリエーション、ルートとなりえよう。

雑

算

一九五九年度 役員

チーフリーダー 田村俊秀

監督(副) 尾藤昭二、西川元夫

大島若(装備) 玉井康雄(副監督) 笠原卓爾(副運)

佐藤茂(サブリーダー) 村井忠雄(新入員) 大工原恭(

会計) 玄瀬貞雄(サブリーダー) 酒井次郎(マネジャー)

田井英男(図書)

一九五九年度 一般会計報告

収入 前期繰入 四八四七 円

部費 入金金 二二一〇〇

体育会援助金 九〇〇〇

諸会費残金 一三五五

昨年度会計残金 二、八三五

前報告計残金 七〇〇

雑収入 一、八〇〇

計 四二、六三七

支出 装備 二二、七五三

テント購入の良が修理 一〇、八〇〇

通信費 一、八四〇

舟運及び日本山岳会々費 三、八〇〇

雑費 二、三二七

支出計 四一、五二〇

残金(次期繰入) 一、一〇七

計 四二、六三七

(平田)

一九五九年冬 テント寄附
会計報告

今年も多勢の方々から御寄附いいただき誠にありがたうございました。おかげ様で冬用テント（テトロン5×6入用）を新調する事が出来ました。専くお礼申しあげます。尚テトロン生地について水野連次郎氏改新保正樹氏から多大の御配慮をいただきましに事を感謝いたします。尚残金は10年誌発行の準備金として銀行預金にしております。

収入	寄附（42氏）	42,000円
支出	テント布地	24,000円
	加工	15,000円
	通信費	3,356円
	雑費	3,900円
支出計		21,146円
残金		20,854円

寄附者氏名

- | | |
|------|---|
| 医学部 | 田里勇吉、新谷五郎、恩地裕、大久保寛己、伊藤侯夫、徳永篤司、松久博、住吉山也 |
| 理学部 | 尾藤昭二、岩永剛、穴戸元、片山敏、水野健次郎、新保正樹、大高輝夫、加藤幹太 |
| 工学部 | 細見一仁、大村一生、岡本清裕、高木決夫、川戸俊治、池田滋、梶原信男、遠藤常忠、久原三郎、川崎勇、宮本貞雄、二本節夫、空中国、菅沢忍、椎木二郎、立花直君、西川元夫、村瀬泰弘 |
| 薬学部 | 三枝礼子 |
| 歯学部 | 石沢伸久 |
| 法学部 | 山本范二、玄嶺茂、岡田博、四方大中 |
| 文学部 | 由比沢梅也 |
| 経済学部 | 水村裕一 |

(以上42氏)
(兼清 大工原)

ピーク29峰遠征

ピーク29峰登山計画をめぐって

徳永篤司

P29峰、田隊長の現地通信によれば、本年度アレモンズ
ン期にネパール、ヒマラヤを目標す登山隊は次の10
隊であるとのことである。

1. ピーク29峰 (ス. 8575 M) 日本 (森田 軍治)
2. ランタン・リルン (フ. 2445 M) 日本
3. ジュガールヒマール (ス. 9433 M) 日本
4. カニザロバ () 英国 (J. S. Tjorn)
5. スプトエ (ス. 8333 M) 英国 (J. W. Edmunds)
6. 植物調査隊 (アンナプルナ山) 英国 (B. James)

小型飛行機、グライダー使用

7. マカルー (ス. 8700 M) 英国 (H. Hildberg)

無酸素登頂を目標

8. アンナプルナ三峰 (ス. 9700 M) 印度 (M. S. Kohli)

9. フモリ (ス. 7350 M) 印度 (N. Kulkarni)

10. エツエレスト (ス. 8400 M) 米國 (W. P. Hackett)

この内アメリカのエツエレスト遠征は例の国境問題
を不許可になり、ヒラリーの率いるマカルー隊も、ア
マダブラム峰を無許可で登つた為、現契が悉くまされ
ていたが、その後どうやら登れることになったと伝えら
れている。

こうして政治的配慮による計画実現の有無はさてお
き、これら諸國がネパール、ヒマラヤに持ち込んた10
指に及ぶ種々の登山計画は、世界の登山界が何れを考え
どの林に進んで行くこととして行っているかを知る上に重要な
資料を提示している。

1950年のアンナプルナより1960年のドーラ
ダリ登頂に至る10年間に、地球上の8,000 M峰はこ
とごとく登り儘され、これに続く8,000 M峰も、目
下らしいものは次々と登られて行つた。云わば1960

年は登山界における一つの大きな転換期であり、この
転換期は各国の登山界がどの様に考えているかといつ
たことが本年度或いは昨年度山頂の登山計画に現われ
ていると云えるのである。こうして意味合いより前掲
の各登山計画及び別表の昨年度の計画を分析すると、少
く共次の様な傾向のあることが指摘され得る。そのオ
一は、8,000m峰がなくなつた以上5,000m峰の
減された峰々に順次登り初登頂をねらつてゆくという
オールドツクスなやり方である。英国のヌブツエ（偵
察隊？）と段々のピークは夫々エベレスト、マナスル
という巨峰といきさつをもつとは云えこの代表的な隊
であり、これにカンパチエン、ジヤヌーといつたもの
を加えたとすると8,000m峰は既に登られた8,000m峰
に優るとも劣らぬ登山的興味と意義をもつもので、何
れも簡単に登り儘くされるとは考えられないがしかし
こうしてオールドツクスな方法が将来5,000m台を
割つて6,000m台の山々に迄河処までもキ一線の登
山界に在りて推進され支持されるとは考えられない。こ
うして意味で、ピークやヌブツエ、ジヤヌー等の計画
は極端に云えばメイダマーエキスペディションを以て

行われる最後の華々しい初登頂争いであり、この傾向
は以後はマチマブチマリヤ、プロモリ、アマダグラム等
によつて代表される純アルプス山登山への方向に引き
つがれるものと考えられるのである。

オ二の傾向は、エヴェレストの北面ルートやアメリ
カのK計画、J.A.C.のカンチ計画によつて代表される
バリエーション、ルートよりの5,000m峰登頂であ
り、過去において登山が歩んで来た途より考えて容易
に予想し得る方向である。オ三はヒラリーの唱える酸
素を使用しない8,000m峰の登頂である。酸素を使
わずに登頂された8,000m峰は可なり多いけれども
それらが何れも5,000m以下であるという事實は生
理的な背景をも加えて、マカルー以上の高峰に対する
無酸素登頂をバリエーション、ルートによる登頂と同
価値のものに評価することを許すであらう。以上とは
別に、種々の興味ある傾向も見のがす訳にゆかない。
例えば雪男を先頭とする所謂学術調査が少くなり遠征
が次第に純粋のスポーツ登山になりつゝ、あることや、
小型飛行機を持ち込む隊が現われたり、ヒラリー隊の
如く入れ替り立ち替り諸かがヒマラヤに常駐している

といつた状態など、こと二まかに鬼れば更に空目すべ
き突が多い。日本の山々を舞台としてヒマラヤ登山の
トレーニングをして来た状態から、現柱は小規模なヒ
マラヤ登山を定場にして前記の様な登山目標を達成せ
んとする状態に移行しなければならぬ時期に来てい
るのかも知れない。

この様な背景の下に計画され、行われてゐる以上、
P-29登山隊の持つ使命は、P-29の損家並みに登頂
といふオ一目的を除いても実に多種多様である。先ず
登山隊は出発出来なければも母体である山岳部がばら
ばらになつたといふのでは何にもならない。遠征準備
を通じて堅まつて来た組織が更に固定化され、強化さ
れていなければならぬ。又ヒマラヤへ行った隊員達
は一人でも多くのヒマラヤ経験者を増やすといふ原則
に基いて、ヒマラヤへ行くべくして行つたといふ人々
ばかりである。

私達の山岳会の今後の方針や、今後の遠征計画が、
これらの人々の手によつて推進されぬはけであつたな
らば、P-29計画は失敗に帰するといつても過言ではな
くなるのである。

〔1960年度〕

- 1 ヒマルナエリー (七、八六四m) 日本 (山田ニ郎) 登頂
- 2 アピ (七、一三二m) 日本 (津田康祐) 登頂
- 3 ジュガトルヒマール (七、〇八三m) 日本 (杉原久行)
- 4 ドーラギリ (六、二七二m) スイス (M.アイゼリン) 小型飛行機使用、無酸素登頂
- 5 アンナプルナニ峰 (七、九三七m) 英印 (J.ロバート) 英印3、ネ2、根成部隊
- 6 がネツシエヒマール (七、四〇六m) 英 (D. J. フレリス) オニ登
- 7 エベレスト (八、八四〇m) 中国 (史占春) 北面ルートより登頂
- 8 エベレスト (七、〇〇〇m) 印度 (G. シー) 南峰以上に到達
- 9 アムネマチン (七、一〇〇m) 中国 (台進考) 登頂
- 10 トリズルニ峰 (六、七六四) 三峰 (六、七六四) エーゴ
- 11 デイステイギルサール (七、八八五m) オーストリア (W. ステファン) 無酸素登頂
- 12 マツシヤブルム東峰 (七、八二一m) 米 (G. ベル) 登頂

- 13 K² 米嶺バ(W.D.ハケット)
- 14 イエテイ調査隊 英米、ニュージーランド、E.ヒラリシ
- 15 デイオ、テイバ(六〇〇一M) 日本(細川沙弥子)
- 16 ノシアソク (ヒ、四九〇M) 日本(酒戸政二郎)

帯入登山隊

登頂

P-29 峰登山準備過程日誌

昭和三五年
9月14日

O.U.M.C. 理事会に於て徳永提案のP-29計画
原案採択。ノタ6ノ年春期を期し、藤田会
長を隊長とする登山隊を送ることを決定

出席者 徳永、大島、家田、佐吉、尾藤、
呼井、西川、木村、広橋、宮本
穴戸、平田

18日 計画概要普及び登山隊参加希望アンケート
を全会員に送付

19、20日 藤田会長、徳永理事計画案をもち上京、

10月5日 P-29計画を洋田J.A.C. 関西支部長に説明
了解を得る

29日 P-29登山計画書印刷出表上り(400部
后に300部追加)

26日 準備委員委嘱状発送

26日 準備委員委嘱状発送

6日 第一回ヒマラヤ登山準備委員会
(以後ノ月未迄毎週一回開催)

準備委員会構成

委員長 藤田

事務局長 徳永

総務 徳永、大島、佐吉、田島

装備 庄吉、木村(祐)、空申、広瀬、大島彦

食糧 西井、前沢、新保、(以上大塚)

医療 田島、三枝、山本(篤)兼精、(以上東京)

松久、尾藤、田村

撥入 住吉

通信器 宮本 甲井

輸送梱包 坪井、田村、高橋、四宮、吉見

写真 山本(監)、穴戸、兼青、松久

土産物 平田

歩外 源永、住吉、田島、岡田

贈物寄附 住吉、尾藤、田島、三枝、坪井、玉井、佐藤、玄稜、大島(巻)、大工原、藤田

田村、高橋、松久、新保、尾原

部内募金 玄橋、西川、新谷、河原(輝)

資料 大島

庶務 玄橋、大工原

会計 岡田、西川

梱包作業 住吉、尾藤、西川、山本(監)、兼青、田村

大工原、玉井、佐藤、西井、前沢、黒木

金子、曲垣、打出、高橋、白井、三沢

堀本、高田

J.A.C理事会にP-1設計圖案提出(田島)

部内募金(一口五千円、2口以上)予約依頼状発送

10月19日 毎日新聞大阪本社(神前事業部長)

22日 日高J.A.C会長訪ネに際レP-1登山許可陸

勢方坂獲

住吉、尾藤(隊員決定)

26日 ギヤルツエン(シエルパ) バルワラ(荷

物運送) 神原(ネパール政府) ヒマラヤ

ンンサイエテイ交渉) 各隊へ依頼状発送

10日 松田雄一氏の未成を得て種々指示を受く

準備委員会ルーム迄大学構内記念館二階に

設置

14日 村木清次郎氏の未成を得て種々指示を受く

19日 ヒマラヤ登山実行委員会開く(花好文さん)

出席者: 藤田、水野捷、新谷、尾原

堀本、大島、住吉

実行委員会構成

委員長 藤田

水野健次郎、陶集三(以上理) 山口次郎

11月28日

尾原信男(以上工) 新谷五郎、原池裕
(以上医) 齋永壽司、大野輝夫、住吉山
也(以上準備委)

隊員輸送は日通航空、A.I.I.及びE.I.機使
用、装備輸送はV.Y.K.及びE.I.機使用を決
定、交渉開始

西川、山本(雁)両隊員決定

装備、食料の最終リスト決定

寄附依頼品目リスト完成

食糧寄附依頼交渉開始

12月3日

ギヤルツエン、ノルブよりバサン、フター
三号をリーターヒレで証分し来る

12月7日 一披券金準備活動開始(藤田、水野、岡、新原
大崎)

12月8日 皇太子御夫婦、カトマンズ御訪問

12月9日 大政医業岳病舎より医業岳寄附受領

12月10日 現物寄附依頼開始

12月17日 山本(毛)兼清隊員決定

12月19日 装備類の内日数のかかる羽毛製岳靴の発注
開始

23日

ネパールの政変により、コイラテ首相等殺害
される。
那須インド大使より外務省に入電(ヒマラ
ヤン、ンサイテイにシエルパの申請を行うと
同時に入山許可がおりる予定に付、早速
にシエルパ申請を行われ度し)

昭和36年

12月2日 準備委新年集會

4日

ヒマラヤン、ンサイテイ宛シエルパ契約
依頼申請書発送(直送)、同時に5000イ
ンド・ルピーの前渡金を送金す。
シエルパ依頼開始

5日 ルームに事務員(島根子)を置く。

6日 P-12入山許可下付(外電)

7日 証者発表(午後3時、岩坂大塚下会館)

8日 毎日新聞社発表

10日 東京放送後援、カマラマン参加の件決定

旅行計画日盛へ呈出

券金用印刷物作成（後援会趣意書、P-39）
 計画書、隊員名簿、寄附申込書）

登山後援会メンバー

会長 赤堀誠長

- 青木 大 今村茂男 大島堅造
- 岡田 実 小田原大造 佐藤義雄
- 正田健次郎 杉 道助 刺 桂三
- 中井元次 日高信太郎 堀田左三
- 本田親男 榎 有恒 水野淳太郎

ノ月13日 本日よりルーマン吉直（現牧垣寺）南始

16日 本日より寄附金集荷に現役全員動員

集荷、梱包場所は記念館一階を使用

19日 医薬品梱包開始

20日 本日より東京（田島、兼清等）との定時通

話開始

23日 梱包作業開始 26日迄、徹夜 平行してパ

ンキング リスト作成開始

27日 正午、梱包、リスト完成

一四〇〇 辰巳商会業者倉庫へ集荷し、総閲
 検査通過。船積用梱包終了

ベンガル老運賃同盟の了承をうく
 ノ月28日 オ一便、N-Y-X 運賃北へ船積開始

722 cubic feet

4732.6 kg

(内訳)

表備 一、六二六、四 kg

医薬 四、五、八 kg

食糧 一、九三四、〇 kg

老翁系船隊員決定（尾藤、山本、西川、

兼清）

渡航手続開始

渡航申請会前交渉（藤田、古市、田島）

30日 パンキングリスト（オ一便）完成

31日 正午 健電丸大段出発
 （カルカッタ入港予定 3月17日）

2月2日 段工積荷（オニ便）集荷開始

一般募入金箱の

3日 老翁隊員手附接種開始

7日 湖外渡航申請会にて外貨申請通過

外貨認領 計一、三三、二六〇、〇五ドル

藤田隊長以下6名分

田松旅費 卍三、四四五、八〇

純外貨 卍七、一二九、〇〇

小秋元氏分

田松旅費 卍 六六八、一〇

純外貨 卍一、一三九、五〇

ヒマラヤン、ソサイテイより次のシエルパ
決定の通知あり

(サーダー) パサン、フター三号(ダーダリン)

(ゴッフ) ペンバ、ノルス(ダーダリン)

(シエルパ) アンダフ、アンノルブ、

ダノルブ、アンナンギヤル

2月8日 東京放送救護のカメラマン小秋元隆邦氏へ
運動部副部長) 決定

隊員身体検査(阪大病院 松久)

10日 先発隊員上京 パスポート、インドビサ下

村

ネパール内通信板預入にビナヤど指定する

旨現地へ通知

2月13日 夜半、オニ梗梱包完了

14日 オニ梗 神戸港シヤパン エキスアレス倉

庫へ集荷

秘岡匠造 B.I fine "Sudhanka" 積込

又

オニ梗(普通梱包のまま)

172.8 cubic feet

172.8 kg

(内装)

装束 九六七、〇kg

医薬 一三〇、〇

食糧 四九七、〇

15日 全パツキンダ・リスト 完成

16日 ビルマビザ下付

14.00 先発隊員(Sybilana乗船(神戸)

17.00 隊長、毎日新聞共催社行会

(若大機構内松下会館)

12.00 ヒマルチユリ登頂陳謝書字会

19.30 準備委社行会

2月17日

全パツキ、ギリスト内原方面送付（外務省
主由分ク部。英文計画書ク部及公文書系
附。ニューズリー及ガクタツタ日本公館
ネパール政府、バルワラ、カルカッタ、穆
ノータンワ税関等へ直送）

17.00 先発隊買乗船

23.40 *Siddhanta* 出航（カルカッタ着予定
3月12日）

18日

ネパール政府よりP.P.入山許可下附の旨外
務省に入電

20日

インド気象庁、オールインド放送へ気象通
報依頼状送付

ネパール政府へ隊員増加並に無諒候持込
に因する追加申請送付（直接及が外務省至
由）

24日

晴途 *B.I. Line*（カルカッタ発）3月3日）予
計

ロムよりシエルパ変更通知あり、アザバ（
サーダー）パンバノルブ（コック）、アンダ
ワ、ミンマツエリン、カルマオンゾ、アン

ナンギヤルとなる

3月4日

本隊上京、パスポート、インドビザ下附

6日

東銀カルカッタ支店迄、外貨送付（東銀
トア、ロード支店）

8日

山本（茂）、西川内隊員、午后ラングーンより
カルカッタ到着（リトン、ホテル）

7日

本隊付丹空港発上京、カミ便ヒレテ無諒候
本隊（藤田隊長、住吉副隊長、山本信）

種

ルーム宿

11日

オ一回残務整理委員会
メンバー、徳永、大島、本橋、岡田

木村、大工原、大島（若）
本橋（田崎）

以右毎週土旺兩曜

15日

隊員増加並に無諒候持込許可書到着
募金目標額に達す、以上徳永至意

（注）上記の口述は藤田会長監在中の為募金関係の口

勳状発の詳細は記入されてない

エヴェレスト遠征（一九五三年） に於ける食糧計画

L. G. C. ピュウ 著

（徳永 訳）

ヒマラヤ登山隊の食糧は一般に英國本土やインドから運んだ貯蔵食糧と現地調達した食糧より成り立っている。現地では米、じゃがいも、ツアンパ、レンズ豆、卵、鶏、肉類等が調達されるが新鮮な野菜や果物は大きくして手に入らない。初期のエヴェレスト登山隊は、色々な貯蔵食糧を携行したが、今日では、紅茶、粉乳、砂糖、ジャム、ビスケット、バター等、現地調達の出来ないもの以外は現地に依存する傾向がよくなつて来ている。

(一) チョーオニー遠征（一九五二年）の経験

一九五二年に行われたチョーオニー遠征で栄養や食糧の向題が調査された。種々の高さで各目のペースをもつて登っている状態における隊員の酸素消費量を

表一

一九五二年チョーオニー遠征に於ける食糧の分析及び熱量のバランスシート

期 間	高 度 (m)	概 取 した				熱量消費量 (cal)
		蛋白質 (g)	脂肪 (g)	含水炭素 (g)	カロリー (cal)	
30/Ⅲ ~ 17/Ⅳ	アプローチ 3200 ~ 3350	108	110	713	4,247	4,370
1/Ⅳ ~ 10/Ⅳ	クライミング 5300 ~ 6350	42	71	596	3,189	3,960
15/Ⅳ ~ 17/Ⅳ	レスト 4,650	64	90	640	3,626	3,220

測定すると、アプローチの時期や高所帯在期間における大雑把なエネルギーのバランスシートを作る事が可能である（表一）。この表によるとアプローチ期におけるカロリー必要量は殆んど實際に与へられた量と等しくなっているが、これが高張つねり、平素食べつけないものは却つて一部の人々に消化器障害をもたせている。食事のメニューは表一に示す如くで、高所帯在中には食欲不振が著し、毎日摂取する食糧の相当な部分が飲料水中の砂糖の形で取られていた。又一部の隊員はパイナップルや糖といった特殊なものを探したが、

高所帯在中における摂取カ

表二

チヨ-・オエ-遠征(ノタゴ2年)のメニュー

高度(m)	早 食	朝 食	行 動 中	昼 食	おやつ	夕 食
アプローナ 300~350	ツアンパ ミルク 砂糖(ミルク が受が砂糖 入り) 紅茶	グレープナッツ ミルク 砂糖 バーコンと卵 バター・ジャム チヤパテイ 紅茶	ビスケット チヨコレート スウィート	チヤパテイ バター ジャム 紅茶	紅茶	スープ カレー、米 ポテト レンズ豆 コーヒ
チヨ-・オエ- 5800~ 6850	—	バター・ジャム ビスケット、 ミルク、砂糖 紅茶、グレー プナッツ、	スウィート なつめ チバどう	ビスケット バター ジャム 紅茶	紅茶	ペミカン スープ、 バーコン ポテト コーア
チエール 6650	—	グレープナッツ ミルク、砂糖 バーコン、卵 紅茶	ビスケット 紅茶	チヤパテイ ビスケット バター、 ジャム 紅茶	紅茶	ペミカン ポテト コーア

ロリーの不足はかなりの体重減少を招き、三六〇〇以上で滞在した最初の二四日間における体重減少は平均五磅(二・二七kg)であった。

こうした現象はこれまでの登山隊でもみられた事柄であるが、チヨ-・オエ-での食糧の減退は過去のエヴエレスト登山隊よりは一層低い所でおこっている様に思われる。チヨ-・オエ-隊の少い食料摂取量は不充分の高所順化のあらわれでもある。長く順化されたこの遠征の后期になると、隊員の全身状態も食慾も回復している。チヨ-・オエ-において食事が大して取れなかつた他の原因として、単純な食餌や食慾を減退させる様な食物が考えられる。こうした事柄に基いて、来るべきエヴエレスト遠征には高所順化に更に時間をかけ、もつとどうまいものを食べさせ、更に大膽な改善が行われることになつたのである。

(三) エヴエレスト遠征(一九五三年)

一九五三年のエヴエレスト遠征に際しては、食糧計画は従来の慣習を放棄し、新しく、軍隊の作戦中に用いられている様なコンパクトなレーション(コンポーション)を採用することになつた。この様なコン

藤田隊長以下6名分

田松旅費 卅三、四四五、八〇

池外貨 卅七、一二九、〇〇

小秋元氏分

田松旅費 卅 六六八、一〇〇

池外貨 卅一、一三九、五〇

ヒマラヤン、ソサイテイより次のシエルパ
決定の通知あり

(サーダー) パサン、ポター三号(ダーガリン)

(ゴック) ヤンバ、ノルス(ダーガリン)

(シエルパ) アンダフ、アンノルブ、

ダノルブ、アンナンギヤル

2月5日 東京放送収蔵のケメラマン小秋元隆邦氏へ

運動部副部長) 決定

隊員身体検査(阪大病院 松久)

10日 先発隊員上京 パスポート、インドビサ下

付

ネパール内通信依頼人にビナヤを指定する

旨現地へ通知

2月13日 夜半、オニ便桶区完了

14日 オニ便 神戸港シヤパン エキスプレス倉

庫へ集荷

税関通過 BI line "Siddhanta" 積込

又

オニ便(普通桶区のまま)

172.8 cubic feet

172.8 kg

(内訳)

装備 九六七、〇kg

医薬 一三〇、〇

食糧 四九七、〇kg

15日 全バツキング・リスト 完成

ビルマビザ下付

16日 1400 先発隊員(Siddhanta 乗船(神戸))

1700 隊長、毎日新聞共催壮行会

(老大学構内松下会館)

1800 ヒマルチユリ登頂映画試写会

1930 準備委壮行会

2月17日

全パツキ、ギリスト南原ヲ通送付（外務省
主由分ク部。英文計圖書ク部及ガ公文書系
附。ニューズリー及ガカツタツタ日本公館
ネパール政府、バルワラ、カルカッタ、穆岡
ノータンツワ秘閣等へ直送）

17.00 米海陸軍乗船

23.40 *Stokharna* 出航（カルカッタ着予定
3月12日）

18日

ネパール政府よりP.P.ヲ入山許可下附の旨外
務省に入電

20日

インド気象庁、オールインド放送へ気象通
報板報ヲ送送

ネパール政府へ隊員増加並に無線機持込
に關する追加申請送付（直接及ガ外務省至
由）

22日

晴遠 *Bl. June*（カルカッタ発ク月3日）予
計

H.G.よりシエルパ変更通知あり、アザバ（
サーダー）、パンバナルブ（コック）、アンダ
ワ、ミンマツエリン、カルマオンゾ、アン

ナンギヤルとなる

3月4日

本隊上京、パスポート、インドビザ下附

6日

東銀カルカッタ支店迄、外貨送付（東銀下
ア、ロード支店）

8日

山本（茂）、西川兩隊員、午后ランズンより
カルカッタ到着（リトン、ホテル）

7日

本隊、丹空港発上京、オミ便トシテ無線機
本隊（篠田隊長、柱吉副隊長、山本衛）

3月10日

小利丞（A.E.I.にて羽田発、カルカッタ到
着）

ルム南嶺

11日

オ一回、残務整理委員会

メンバー、徳永、大島（輝）、玄橋、岡田

木村、大工原、大島（若）

玄嶺（田崎）

以後毎週土旺兩差

15日

隊員増加並に無線機持込許可書到着

17日

募金目標額に達す、以上徳永空息

（註）上記の日誌は篠田会長座在中の海難倉庫焚の事
助状元の詳細は記入されていな

エヴェレスト遠征（一九五三年）
に於ける食糧計画

L. G. C. ピエツ 著

（徳永 訳）

ヒマラヤ登山隊の食糧は一般に英国土やインドから運んだ貯蔵食糧と現地調達した食糧より成り立っている。現地では米、じゃがいも、ツアンパ、レンズ豆、卵、鶏、肉類等が調達されるが新鮮な野菜や果物は大きくして手に入らない。初期のエヴェレスト登山隊は、色々な貯蔵食糧を携行したが、今日では、紅茶、粉乳、砂糖、ジャム、ビスケット、バター等、現地調達の出来ないもの以外は現地に依存する傾向がよくなつて来ている。

(一) チョー・オエー遠征（一九五二年）の経験
一九五二年に行われたチョー・オエー遠征で栄養や食糧の問題が調査された。種々の高さで各目のペースをもつて登っている状態における隊員の酸素消費量を

表一 一九五二年チョー・オエー遠征に於ける食糧の分析及び熱量のバランスシート

期 間	高 度 (m)	採 取 し た				熱量消費量 (cal)
		蛋白質 (g)	脂肪 (g)	全炭素 (g)	カロリー (cal)	
30/III ~ 17/IV	アプローチ 300 ~ 350	105	110	713	4,267	4,370
1/IV ~ 10/V	クライミング 5300 ~ 6350	42	71	596	3,187	3,760
15/V ~ 19/V	レスト 4,650	64	90	640	3,626	3,220

測定すると、アプローチの時期や高所滞在期間における大雑把なエネルギーのバランスシートを作る事が可能である（表一）。この表によるとアプローチ期におけるカロリー必要量は殆んど実際に与へられた量と等しくなっているが、これが高張つたり、平素食べつけないものは却つて一部の人々に消化器障害をもたらし、食糧のメニューは表に示す如くで、高所滞在中は食慾不振が著し、毎日摂取する食糧の相当な部分が飲料水中の砂糖の形で取られていた。又一部の隊員はパイナップルや雞といった特殊なものを経験した。

高所滞在中における摂取カ

表

チヨ-・オエ-遠征(ノラケ二年)のメニュー

高度(m)	朝食	朝食	行動中	昼食	おやつ	夕食
アプロ-チ 300~350	ツアンパ ミルク、 砂糖(ミルク と砂糖が砂糖 入り) 紅茶	グレーナッツ ミルク、砂糖 バーコンと卵 バター、ジャム チヤパテイ 紅茶	ビスケット チヨコレート スイーツ	チヤパテイ バター ジャム 紅茶	紅茶	スープ カレー、米 ポテト レンズ豆 コーヒ
チヨ-オエ- 5,800~ 6,850	—	バター、ジャム ビスケット、 ミルク、砂糖 紅茶、グレー アナッツ、	スイーツ なつめ チバドウ	ビスケット バター ジャム 紅茶	紅茶	ペミカン スープ、 バーコン ポテト コ、ア
チエ-ル 4,650	—	グレーナッツ ミルク、砂糖 バーコン、ポテ 紅茶	ビスケット 紅茶	チヤパテイ ビスケット バター、 ジャム 紅茶	紅茶	ペミカン ポテト コ、ア

ロリーの不足はかなりの体重減少を招き、三六〇〇k以上で帯座した最初の二四日間における体重減少は平均五磅(二・二七kg)であった。

こうした現象はこれまでの登山隊でもみられた華柄であるが、チヨ-・オエ-の食糧の減退は過去のエヴエレスト登山隊よりは一層厳しい所でおこっている様に思われる。チヨ-・オエ-隊の少い食料採取量は不十分な高所噴水のあらわれでもある。良く噴水とれたこの遠征の后期になると、隊員の全身状態も食慾も回復している。チヨ-・オエ-において食事が大して取れなかつた他の原因として、単純な食餌や食慾を減退させる様な食物が考えられる。こうして手柄に基いて来るべきエヴエレスト遠征には首折噴水に更に時間どかけ、もつとうまいものを食べると比る杯に大膽な改善が行われることになつたのである。

(三) エヴエレスト遠征(一九五三年)

一九五三年のエヴエレスト遠征に際しては、食糧計画は従来の慣習を放棄し、新しく、軍隊の作戦中に用いられている様なコンパクトなレーション(コンポーション)を採用することになり、この様なコン

ホー・レーシヨンの利失は次の如くである。

(1) ヨーロッパ風の食事を供給出来る

(2) 嗜好性とバラエティに富んだ食餌が出来る

(3) 整理と荷造りが簡単化される

(4) 食べ過ぎや浪費によつて主要食料が欠乏するの故

防止出来る

(5) 運賃と調理(ヒマラヤでは全部シエルバが料理する)

によつて食物が汚染されることを少く出来る

以上の利失の代りに、食糧の重量と費用とが増大す

るといふ欠失があり、重さが増えることはそれ程でも

ないが、輸送費が高つくことは大きなマイナスであ

つた。五、四〇〇m位の背上げに要するポーター賃は大

したものではないが、ヒマラヤでのポーターによる輸

送は、あるシーズンとが、ある高度以上では特別の装

備を必要とするので尙更になる。我々の場合でも延

二、三〇〇人分の食糧の添購入額は燃料で費つた五万石

並ぶ石井尾当の食糧を除き約四、五万石であつたが、英

国本上からカトマンズ迄の食糧輸送費は約一〇万石で

ポーターに依存してカトマンズからエラレストのバ

ーヌキヤン平迄の輸送費は約五〇万石であつた。

コンポー・レーシヨンの詳細はハントの公式報告

「エラレスト登頂」に記載されているがこれは二種類に

分かれ、一つはオ三表(A)に示す普通食の時のコン

ポー・レーシヨンであり、他の一つはオ三表(B)に

示す殊な六四〇〇川以上で使用するアタツク食であつ

た。

普通食のコンポー・レーシヨン

普通食コンポー・レーシヨンの概略は次の如くであ

る。フード・ボックスは防水、防湿のファイバー、ボ

ード・ケースに、一四人一日分の夕食、朝食及び行動

時の食料を入れて約二〇kg毎に包装され、食料は乾豆

始め玉種類の肉類、四種類の野菜、粟物、乾菜、ケーキ

オート・ミール、ビスケット、バター、ジャム、マー

マレード、チヨコレート等で各食品毎に五詰にされ

ていた。肉類と野菜、粟物、ケーキを種々に組み合わ

せることにより、色々と変わったメニューが一週間の向

毎日変わつてあらわれる様になつており、それらのボ

ックスは夫々色分けされていた。ある一日のメニュー

はオ三表の如くであつた。

ビスケットボックスは一、五、二kgの本箱で内は六つの封

(A) 普通食コンポーネーション

① コンポーネーションボックス (14人/日分, No. 7, メニュー 日曜日)

(食) 品目	缶数	単位重量(オンス)
朝食(下等)		
オートミール・ビスケット	1	12
ベーコン	5	12
バター	2	15
ジャム	2	9
マーマレード	2	9
チーズ	2	8
チョコレート・スイーツ	3	12 1/2
食塩	1	4
マッチ	1箱	
主食(上等)		
ステーキ・ステーキ	8	16
えんどう豆	3	10
ケーキ	4	10
スープの素	2	2 1/2
缶切り	2個	
ラトリン缶	1箱	
缶切り	1個	

② ビスケットボックス (6オンス箱 x 1/4 x 6, 1人/日6オンス)

③ 飲料ボックス (28人/日分)

品目	缶数	単位重量(オンス)
砂糖	4	19 1/2
紅茶	2	10
粉乳	4	8
即席オートミール	1	16
たねめきなつめ	2	8
たねめき干ぼどう	1	16
コーヒーはこア	2	13

切れた瓜を入れ、その一つ／＼に一五粒の一七〇グラム包装のビスケットが入っていた。ビスケットは一人一日当り一七〇グラムであつたが、一三〇グラムで充分であつた。食料ボックスは一五入りのファイバートボールド・ケースで、一四人二日分の砂糖、オートミル、紅茶、コーヒー、コ、アが真空包装で入れられていた。又、飲料ボックスには缶詰は使われなかつた。(オ三表)以上の食料の補助として、現地で調達したじゃがいも、水レンズ豆と時に新鮮肉が当てられた。コンポー、レ、イシヨンは現地で入手したものを除き、一人一日約四、八〇〇カロリーであつた。

チヨ、オユーでの研究に基くと、必要熱量は四、五〇〇カロリー以下で良かった。過剰の食料は、ダーザリンから遠征に加わつたシエルパ達の食料であるアタ、米、ツアンパ、じゃがいもをおぎなう為に当てられた。しかし、シエルパ達が料理してゐるので、食料の内のある一定量が少くなることは予想されていた。

ア タ ツ フ 食

コンポー、レ、イシヨンは兼早重量の關係で不適当であり、又糖分の要求が非常に少くなるような高所

オ三表 (B) 組合わばアタツク食 (2人/日分、各自の好みの
 品物を知えて使用)

品 目	包装数	単位重量(オス)
ロード・オーツ	2	/
粉 乳	2	3
砂 糖	4	7
ジャム	/	2
スウィート・ビスケット	2	3
ミントバー又はバナナバー	2	2
チーズ	2	/
ココア	/	/
紅 茶		1/2
スープの素		2/4
レモンパウダー	2	//
食 塩	2	5/2 (8)

で使用する為には、三時向夜食用の特別レーシオンが用意された。これは真空包装された基礎的な食品に限られ、アタック食を補う為には隊員達の旧々の嗜好に合わせて英國から運ばれて来たびりたぐりであつた。アタック食のカロリー値は必要よりも高く、そして夫々の人間が即席で加減し、とても食べられないと感ずる様なものは除かれた。実際にはと。町のアタック食はB、C(五、四〇〇M)での計画に基づいて組み合はせられた。加減された夫々のアタック食の単位はオミ表の如く、一つの袋に包装され且一人一日分よりなつていた。本来のアタック食はオミ表に加えて、ヒログラムの脂肪酸のペミカンと入五グラムのグレイファナツツ(これらはナモト・オエーでは良いと思われたが、エツエレストでは除かれた)を含んでいた。

一九五三年の遠征の食料に關する隊員達の感想は、帝國隊アンケートにより集められた。それによると一人の隊員を除き、他の全員は齎せられた食料を嫌ひ、コンボイ・レーシオンをとることに同意しており、大部分の人々はもっと現地食を望み、特にもっと菓を嗜み、缶詰の肉などは残す手を差んでいた。しかし

し、ヒマラヤ遠征の帰途食料がなくなると何時も経験することであるが、眞肉は常に入手出来るとは限らないのである。

無難な注文ではあるが、攻襲時に包装された食糧は全員に対して必要な基礎的な食品のみを含むべきであり、今日の遠征隊がやつてゐる様に、旧入信人が送んできた食糧で用意されるといふことが望ましい。コンボイレーシオンは予想されたよりも更に高い所でも必要とされ、六四〇〇Mのオミキヤンプでも必要であつた。これは、一つには一九五二年のときよりもよく消化されていた事と、一つにはバライエティに富んだうまいものが多かつたからであらうと思われる。又高圧のクワツカーや調子の良いプリマス・コンロが食華の難儀を助け、飲料による水分の補給を完全に成し得たのである。

更に同じキヤンプでは、前記の組み合わせアタック食が荷足すべき結果もたらされ、これは又、昨年のスエズ隊がサウス・ゴルに残したものを念ひ、サーフィン、蜂蜜、ツイタミート、SALCISON などによつておぎなわれた。

隊員達は高所キャンプが激賞され、あつた改変射向中の二日乃至五日間、この組み合わせアタック食で命をつないだ。体重の変化を調べると、隊員達がこの遠征のどの期間でも、前年のナヨー、オユーの時より良いコンディションを示していたことがわかる。即ちアインボチユ（四〇〇〇m）到着後の二六日間における体重減少の平均値は僅か〇九kg（マイナス三六kgからプラス一四kg）に、ナヨー、オユーの同じ時期では平均五kg（マイナス二七kgからマイナス六三kg）の減少であつた。この時期は、隊員が四、〇〇〇mから五、四〇〇m位の高度に帯在して、六、〇〇〇mに登つてゐる所謂高所順化期間である。主としてウエスタン・チーム（六三〇〇一六四〇〇m）を避けて、短期間ヒミロ〇mや時には八〇〇〇m近く迄登つた二ヶ月間における体重減少の平均値は、入kg（マイナス五kgからプラス一四kg）であつた。

遠征の種々な時期におけるカロリー値や食事の届目はオ田表に示す如くで、アプローチ期間ではカロリー摂取量は一九五二年に匹敵するが、宿防の摂取量は三割になつており、嘗試した食餌が少なくなつてゐる。

オ田表 エグレスト遠征各時期における食餌の分析

高 度 (m)	蛋白質 (g)	脂 肪 (g)	含水炭素 (g)	熱量 (カロリー)
アプローチ期	110	231	453	4,328
ベースキャンプ5,500	51	190	437	3,786
CM~CN 6,250~6,450	75	184	478	3,869
アタック期	46	54	638	3,208

ベース、キャンパス及びウエスタン、クリームでのカロリー摂取量はチヨール、オエー遠征の所々滞在期間に摂取されたよりも多い。数々の裏付けはないが個人差は相違が多く、同じギヤマムプでは同量の食物が夫々のフライマーに与えられたが、皆が全部食べたとは限らない。ローツエフエイス及びそれ以上(六七〇〇ル)での食争については量附な記録が少々残されている。右表中の値は粗み合わせアタク食の各栄養素より算定されたもので、一部のフライマー達はそれを殆んど全部食べたと云っている。全部或いは殆んど全部に近い砂糖が消費されたことは全員が認めることろであり、それだけで二五〇〇カロリはある。ウオードは彼自身とノイスが才四キヤムプからオヒキヤムプに至る間の四八時間に取り付けた食物を記録しているが、それによると一入一日当りの熱量は二六〇〇カロリとなつてゐる。ヒラリーは、彼とテンジンが入五〇〇ルのギヤマムプでの旅にして一夜を明かしたかを述べているがそれによると、彼らは三、四杯のラサード、スプーンで出盛り一杯の砂糖を夫々の紅茶に入れ、ミルクを加えて飲み、サーミンとピタウイート、ビスケットを食

べてゐる。登頂の翌日、帰途の才四キヤムプで、ヒラリーはオムレツ二杯と一七〇グラムの麩を食べ、約一立のレモネードを飲んでゐる。

一九五三年遠征の全期間を通じて、摂取した食物の量は一九三五年シプトンのエツエレスト遠征に遙かに上回つてゐる。シプトンは、五、二〇〇ルと六、四〇〇ルの間では食物は二、〇〇〇カロリ以下でもよく、もつと上では一、五〇〇カロリ以下でも良いと云つてゐる。

本計画では、雪をとかして水を作る所を高所における水分摂取の問題に特に考慮が振られた。一九五二年春のエツエレスト、スイス隊のフライマー達は極度の脱水状態に陥り、サウス、コル(七、八五〇m)で過した三日間に彼らは一人一日当り、五立以下の水分しかとらなかつた。この水分の不足こそが、彼らを苦しめた極度の衰弱現象の原因であつたと考えられた。チヨール、オエーでは、一日二立乃至四立の水分が飲料やスープとして取られた。こうして水分補給に対する考えはエツエレストにおいても立証され、エツエレストでは恐らく全期間を通じて水分補給量が一日の必要量を割つたことは一度もなかつたと想われる。

六七〇〇Mの高さに至る迄、隊員達は一日二・三回小便をし、検査された一人の一日の全尿量は二・二リ一五立であつた。登頂期前では登山道のクライマーは一日二回小便をしたことを記憶しており、この事實は七・六五〇M以上で過した一七時間位五人のクライマー中唯一人だけ尿の出た隊員であつたフインチの意見とと比較してみると興味深い。

要にとり上げるべき課題はビタミンの問題である。ビタミンは、三ヶ月間保存食で生活するといつた状態では当然不足勝ちになる。一九五三年では、その前年のナヨー、オユーと同様に、各隊員はビタミンC七五mg、ビタミンA五〇〇〇単位、ビタミンD五〇〇単位、ビタミンB₃三mg、リオフラビン二mg、ニコチン酸二〇mg、葉酸一mg、ビタミンB₁₂一mgを含む総合ビタミン剤を携帯した。しかし乍ら一九五三年の登山隊の食餌はアタック食を除きビタミンを多く含んでいるからこうした葉は必要なかつた。だがビタミンCは、一日の食餌中に一回喝しか含まれていなかつたから補足する必要があつた。

検 討

以上述べた事柄により、ヒマラヤ登山隊の戦力というものは、従来行われて来た様な食糧計画よりも、もっと種類を多くし、口に合つたヨーロッパ風の食物を用意することによつて強化することが出来るといふこととを示している。今迄食べることのない豚肉、まるで田舎料理のような嵩ばつたものを食べれば隊員は、沢山な荷分と、一、二ヶ月の内におこつて来る消化器障害に苦しむであらう。経歴によれば、大抵の場合に現地食に対する適応力が著しくすぐれている。エツエレストの林岳高度のある困難な山への遠征には、たとえ経費が少々高くついても、手のこんだおいしい食料を持つて行つて、隊全体の能率をあげ、病人を出さない状にすべきである。筆者の経験では、教しつて疲労状態におかれの場合、人間は全然味覚を感じない食餌を嫌々食べるよりもむしろ何も食べたくないし、のどのかかわきが消されない限り食べることも出来ないものである。食物を十分に取らない事が、水分の欠乏と共に二三日以上続くことと社等の能率が低下して来る。六七〇〇M以上になると、酸素不足による体力の減退は避けられな

いから、この場合、食物と水分の欠乏により更に衰弱してゆくことを防止するといふことは重要な意味をもつものである。華実山登りといふこと柄を肩れても、飲食の欲求を満すべし適当な処置も行えないようでは本来の目的も既に失敗に帰しているといつても過言ではない。

フライマーが高所で糖分を非常に欲しがるという事実は既に以前より認められていた事柄であるが、この欲求は彼らに十分な糖分が供給されるといふことが殆んどなかつた程強烈である。甘いものなど好きでない人達とさえ、高く登るにつれて糖分を要求するのである。砂糖は高所では甘味が少い体に感じられ、多量の糖が飲料を甘くするために用いられる。この高所における砂糖への強い要求は、呼吸生理学的にも理由をもつものである。仕事の量に相当する酸素摂取量は、低い呼吸商のときより高い呼吸商（炭酸ガス発生量を酸素消費量で割つた値）のときの方が少い。ハッストンは、六、一〇〇mで呼吸商が混合食による〇入から純粋の含水炭素による一〇に上昇したときの米柄酸素分圧は、六〇〇mに降つたのに匹敵するといふことを指し

してゐる。(六、一〇〇mで混合食を食べているより、純粋の含水炭素とつた方が酸素分圧が低い、筆者注) 体重の減少は、高所に滞在したときの特長であつてパークロフト、マイル、ヒンズストン、ウァレン、パウワー等の遠征隊と同様の結果が観察されている。これは極端な状態と密接な関係があり、高所衰弱の最も特徴的な症状の一つであるが、体重の減少があつても健康状態や厥の仕事を案外うまく行つてゐるものがあるので、或程度は体重の減少があつた方が、登山といふ激しい仕事を上には都合が良いかも知れないのである。一九五二年のチヨール、オニール遠征の結果より、我々は或る程度の体重減少は酸化過程の附随的現象であると解釈しようとした。それ故に、エツレストで高所噴化と食餌を改良したことによつて、体重が良く維持出来たといふことを極めて興味深く感ずるのである。(紙面の関係より総括の項を除いた) (訳者注)

参考文献

Barcroft, J. (1925). Cambridge, University Press

部内募金中間報告

(少目25日現在)

①	大	保	克	三	10,000
	川	島	勇		10,000
	宮	本	貞雄		10,000
	匠		三	5,000	
	二	木	節夫		10,000
	空	中	勝		10,000
	醫	天	忍		10,000
	村	賴	泰弘		10,000
	田	端	剛		10,000
	木	村	征三		3,000
	堀	下	重彦		5,000
②	大	保	克	三	10,000
	森	永	篤	司	20,000
	松	久	博		20,000
	家	田	千尋		5,000
	東		雄		10,000
	小	沢	運夫		10,000
	岩	永	剛		10,000
	林		一	2,000	
	坪	井	圭之助		10,000
	穴	戸	元		5,000
	片	山	徹		15,000
	恩	地	裕		5,000
	園	里	勇吉		5,000

Bauer, P. (1931) : Im Kampt um den Himalaya,
Munich : Knorr & Hirth.
Dill, J.B. (1938) : Heat, Life and Altitude,
Cambridge, Mass : Harvard University Press.
Hingston, R.W.G (1925) : Geogr. J. 65, 4.
Houston, C.S (1947) ; J, Aviat, Med, 18, 237.
Hunt, J. (1953) : The Ascent of Everest
Striborn, E, (1938) : Chem. & Ind. 57, 1231,
Wayren, G.B (1937) : Geogr. J. 90, 127

右記一五三年のエヴェレスト登山隊に
高所委員会より隊長として派遣された生
理学者ピエウ博士の報告は既に十教諭に
上り、チヨ、オユー、エヴェレストよ
り南極横断に至る、何れも専門分野にお
いて高く評価されるべき貴重な文獻であ
ります。昨年、当会は博士のこの方面の
全論文の寄贈と翻訳出版の承諾を得たの
に順次掲載に掲載してくゆく予定です。

法 聖 文

田島	汎	20,000
土屋	直	5,000
由比	也也	10,000
木橋	茂	15,000
木村	裕一	10,000
岡田	博司	15,000
野田	憲一郎	5,000
平田	彰	10,000
横山	保枝	5,000
一山	幸代	5,000

工 21名 157,000

医 17名 162,000

齒 2名 30,000

理 5名 50,000

法 聖 文 10名 100,000

合計 55名 501,000

齒 藥

梶	忠男	10,000
三枝	礼子	20,000
西	瑛 齋美	1,000
中	高 康右	10,000
池	田 滋	5,000
吉	田 達三	10,000
仙	夜 正	5,000
岡	三太郎	10,000
野	崎 善藏	5,000
河	原 暉	10,000
池	田 稔夫	5,000
砂	越 竹夫	5,000
小	林 義郎	5,000
酒	井 英之	10,000
坂	谷 信次	10,000
新	谷 五郎	10,000
大	島 輝夫	15,000
加	藤 幹太	5,000
大	村 一生	10,000
山	本 達一郎	10,000
岡	本 靖裕	10,000

医

理

装 備

オ ー 硬

オ = 硬

ナイロンザイル

3mm 200m / 本
 4mm 200m /
 6mm 250m /
 " 100m /
 11mm 40m /

8mm 40m / 2 本
 " 50m 2
 9mm 40m 2
 " 50m 2

テント 23 張

2 張

アイスハンマー / 個

ロックハンマー 2 "

カラビナ 61 "

ロックピトン 44 "

160 個

アイスピトン

50 個

あボ女 (繩バシゴ用ステツプ) 170 個

繩バシゴ 2 本

フイツクスドバー 10 本

ローソク 626 本

赤 燭 600 枚

電 池

単ノ 360個 (半数耐寒用)

単2 720個 (耐寒用)

単3 400個 (")

67.5V 20個

プロパンランプ

1ヶ

プロパンバーナ

7台

プロパンボンベ

4本 (10kg入)

石油コンロ

5 台

8台

薪ストーブ

1 コ

1コ

けいねん

99 コ

34コ

ケロシン

92 L

38L

シヤベル

3 個

テルモス

22 個

酸素ボンベ

15 本 (170気圧)

観測器具

一式 (31kg)

200mm望遠レンズ

1台

食糧

単位重量 net/gross(㊦) ㊦ / 便数 ㊦ 2 便

㊦ 米	160/165	1,470袋	
即席ラーメン(85㊦5コ入)	425/440	408㊦	
おかし	150/150	160㊦	22袋
ウエハー	100/100	48㊦	
フラッガー	140/150	80箱	
乾パン	150/150	350袋	
ビスケット	140/140	40㊦	
小麦粉	500/500	30㊦	210袋
ホットケーキミックス	450/480	28箱	20箱
奥塩(含カニ塩, コンビーフ)	220/300	264缶	174缶
乾燥肉(真空冷凍乾燥)	100/110	0	83
コンデンスミルク(缶入)	385/450	35缶	9缶
乾燥果物	100/100	148袋	19袋
炭物缶 (平均)	480/550	154缶	
砂糖	500/510	364袋	52袋
固型スープ素 (平均)	8/8	1150コ	
かきめしの素(缶入)	380/450	43缶	
スイートコーン(㊦)	190/250	32缶	2缶
ポタージュスープ素	60/65	0	80袋
缶茶(缶入)	110/150	138缶	50缶
缶入バター	225/300	70㊦	10缶
乾燥野菜(葱, 瓜乾燥)	200/210	177袋	
〃 (真空冷凍乾燥)	10~15/10~15	0	128袋
醤油	500/1550, 1.9㊦/2.0㊦	52㊦	9㊦
スキムミルク	400/430	72箱	24箱
サラダ油(アルミ缶入)	380 ^{cc} /400	32缶	16缶
ベーコン(真空包装)	300/310	48袋	
〃 (特殊包装)	3㊦/3.3㊦	0	8㊦
佃煮(真空包装)	100-200/100-200	158袋	
はちみつ(缶入)	24㊦/2.6㊦	10缶	
缶入ビール	350 ^{cc} /430	154㊦	
アイスキー	720 ^{cc} /1400	0	12本

以上の他 主食として 白玉粉, 片栗粉, マカコニー 若干) あり
調味料として マヨネーズ, みそ(真空包装) 相当量

テレビを見ながら

お好きな音楽を聞きながら

安栖で美味しい



洋・和食
喫 茶

阪大食堂

へ どう ぞ

阪大医学部記念館一階

編集後記

遅延に遅延ばかりね、まことに申訳なく思います。
こゝにささやかながらオ十一号をおくりします。

巻末に目下遠征中の阪大山岳部ヒマラヤ遠征の資料を
若干加えまして、

これは次号にはもつと完全な型で発表されることにな
るでしょう。
(佐藤)

大阪大学山岳会「特報」第17号

一九六一年六月 発行

発行所 大阪市北区常安町
大阪大学学生課内

大阪大学山岳会

編集人 佐藤 廉

印刷所 大阪市西区江戸堀北通二 電停西

美研社

電話 (44) 五〇〇八番

会 員 名 簿

会 長		会 員	
藤田 卓治	(医学部)	豊中市麻田九七	阪大工学部精舎工学科教授
和田 豊種	昭32	大阪市北区南森町五二(分一四一三)	阪大医学部名誉教授
小浜 基次	昭3	大阪市住吉区帝塚山東三ノ四	阪大医学部第二解剖教授
堀 鬼次郎	〃4	箕面市箕面町桜ヶ丘九九(櫻井四一)	服部診療所長
水野 祥太郎	〃5	神戸市灘区御影町祥家御影庄宅三〇三号	阪大医学部教授
国里 勇吉	〃5	茨木市沖之町	副業
小林 義郎	〃9	大阪市西淀川区野里町一ニ九五(淀川一三〇六)	神戸赤十字病院院長
野口 晋一	〃10	京都市左京区下鴨官川町五四(77七九。三)	船員保険病院長
坂谷 信次	〃14	姫路市時形町	副業
河原 信二	〃14	神戸市東灘区住吉町垣内ニ二六(御影ニ二〇六)	副業
新谷 五郎	〃14	豊中市桜塚元田一丁目一四八(豊中三〇七)	大阪国立病院院外科医長
小沢 淳二	〃14	東佐野市天神山下尾屋敷(東佐野八六五)	東佐野病院院長
酒井 英之	〃15	大阪市南区千早町一四(分八五七一)	日本生命本社医務室
意地 一裕	〃16	西宮市今津二葉町三九(又八七四〇)	阪大病院婦人科
坂田 裕	〃18		奈良医大教授

友田洋一	昭22		通信病院
大久保勝己	昭23	尾所市塚口竹町二丁目	帝産厚生病院泉佐野診療所
伊藤峻夫	昭23	箕面市箕面町平尾七三〇	大手前病院産婦人科医長
渡辺修治	昭25		阪大病院才二外科
吉川定範	昭25		阪大病院才二外科
徳永篤司	昭26	神戸市東灘区本山町岡本樹林住宅一四	芦屋病院外科医長(芦屋四三五六)
松久博	昭26	枚岡市額田五八八王子方(枚岡九六三)	朝日新聞社診療所(230-1-31)
冢田千尋	昭28	(伊丹二〇二二)	伊丹市民病院
住吉仙也	昭29	西宮市羽衣町九七(303-1-6)	川崎病院(神戸5-1-3-5)
尾藤昭二	昭30	布施市柳厨五五五布施市民病院内	布施市民病院外科(25-1-1)
東澤大	昭30	大阪市阿倍野区段南町中六丁目一六	阪大徹研天野研(必三三五七)
小沢大	昭30	西宮市甲子園九番町七ノ二甲子園南住宅四〇五	阪大病院才二外科
岩永剛	昭30	宝塚市武庫山六四	乃根山病院外科(豊中25-1-2)
坪井圭之助	昭31	豊中市熊野田旭ヶ丘公園住宅二二号の五〇八	紀南綜合病院外科(田辺一五六七)
林伸一	昭31	神戸市灘区森茂町一ノ二	国立長病院内科
片山徹	昭32	和歌山県田辺市奏五一〇 紀南綜合病院内	
(理学部)			
水野健次郎	昭32	芦屋市三木町六三	美津表副社長

山口	香太郎	物 13	芦屋市船町七三	東大原子核研究所
岡村	雄二郎	物 15		阪大理学者化学科教授
新保	正樹	北 15	西宮市松蔭莊九〇	大阪市大理工学部
塩野	良之助	〇 20	神戸市東灘区住吉町新堂四五	美澤農技術研究所
堀野	喜久夫	〇 23	神戸市東灘区住吉町新堂一四三(御影)一二六九	Institute of Agricultural Chemistry, University of Pilsen, Pilsen, Czechoslovakia, U.S.A.
堀山	俊樹	〇 23		(在米)
大島	輝夫	北教 27/24	大阪市住吉区須田町九公団住宅四ノ三〇一	大阪大学中央研究所
加藤	幹太	生 27		住友化学大坂製作所樹脂課(必五四〇)
細見	一仁	生 28	豊中市旭ヶ丘一〇一七住宅公団旭ヶ丘西地二九号地一〇六号	京大理学部生物数室本庄研究所
塚谷	弘	北 28	大阪市西成区玉出本通一ノ一〇	阪大歯学部在学中
大村	一生	物 29	豊中市刀根山三丁目七〇	椿本工一ノ製作所工作課
山本	進一郎	物 31	横滨市港北区日吉町七九八芹野正男方	日本電気玉川工場
岡本	靖治	物 31	福岡県若松市下泉町九 日吉若葉寮	日立金属
高木	俊夫	北 31	堺市上之芝町四丁目五二八	阪大理学部大学院蛋白質研
(工学部)				
川产	俊治	教 5	豊中市本町二丁目八三(豊中五八九一)	大阪工業製作所専務取締役(必二四五一)
山口	次郎	電 7	阪屋川市大字大利一三七	阪大工学部電子工学科教授
仙波	正	船 7	岐阜市加納朝日町三丁目五	仙波能率事務所

五步一誌郎	川村 宏	長岡 振吉	吉田 正三	福田 正若	大沢 信一	遠藤 常忠	坂上 秀夫	黒川 敬一	田村 複造	池沼 清二	河原 肇	吉見 峻一	梶原 信男	池田 正夫	手塚 正夫	斉藤 俊貞	高島 幸男	村上 竜郎				
机15	机15	机14	机14	机13	机13	机13	机13	机13	机12	机12	机12	船11	船11	机10	机9	机9	机9	机9				
西宮市鳴尾町平田四八	豊中市内田二五〇(豊中五六三)	名古屋市熱田区玉の井町一〇	東京都豊島区千早町二〇二六	東京都豊島区千早町二〇二六	東京都豊島区千早町二〇二六	東京都豊島区千早町二〇二六	東京都豊島区千早町二〇二六	東京都豊島区千早町二〇二六	高槻市松立六五	稲井市宮永町一〇五	芦屋市大樹町三六(芦屋四三二六)	大阪市阿倍野区山崎西之町三一	大阪市阿倍野区山崎西之町三一	横滨市南区栗田六五	神戸市葦合区野崎通一の一	神戸市葦合区野崎通一の一	京都府乙訓郡長岡町南田下町(神足二六)	山口県下松市末元社宅後宅一〇号	舞鶴市余部下旭屋四〇八四三の一	尾崎市富田園和一〇三一	姫路市網干区新在家九四〇	堺市北浜意町東一丁目二五(堺九〇四)
京阪神急行車輦部才一技術課技術課長	汎建製作所	大隈鉄工所技術部長(阪神線)	荒川林産化学工業KK	日本陸長薬品KK	航空方調査課	岡電和歌山支店工務部	新明和産業	福井精練KK	田村香料KK	新明和工業	日本郵船大阪支店工務課長	いすゞ自動車大森製作所長	大有産業KK社長	白土製作所並戸工場	飯野重工業製造船所	大阪鍛造KK	大ヒル網干工場長	明老精機製作所代表				

近	宮	川	四	入	田	村	岡	音	枚	京	莚	大	與	砂	野	池	盛	西	
本	島	宮	宮	保	中	田		木	本	極		島	村	越	崎	田	岡	圃	
璋	貞		誠	三	行	良	三	靜	裕	与	昌	直	正	竹	善	徹	英	清	
三	雄	勇	裕	明	雄	二	太	男	太	寿	弘	義	己	夫	威	雄	次	美	
精	通	找	船	找	精	重	精	"	"	"	化	船	"	化	"	治	找	留	
27	27	27	27	27	21	20	19	18	17	17	17	16	16	16	16	16	16	15	
東京都目黒区緑ヶ丘五二三九七	尾崎市武庫之荘4の30 (分七四五三)	北海道空知郡赤平町柱友平和台住宅	大阪市阿倍野区相生通三〇一五 (分二九五六)	大阪市南区北桃谷町一丸(南七九〇)	神戸市灘区大和町二の一一川鉄大和町アパート	千葉県市川市八幡町四の一三〇四	大阪府拜島野市菅田三一〇の二三	千葉県市川市長室三の二二	和歌山市長室三の二二	和歌山市長室三の二二	和歌山市長室三の二二	和歌山市長室三の二二	和歌山市長室三の二二	和歌山市長室三の二二	和歌山市長室三の二二	和歌山市長室三の二二	和歌山市長室三の二二	和歌山市長室三の二二	和歌山市長室三の二二
東芝玉川工場	札幌市街街基盤監督所	国鉄監理局機械課長	大同製鋼平井工場	興亜石油株式会社製油課長	神戸工業大久保工場	片倉工業以	鐵貴金屬商	阪大工学部本出助教	入幡化学研究室	防衛庁空幕才三課	川崎製鉄計量器工場	国鉄高崎鉄道管理局	岡田大学工学部機械	住友金屬車軸鑄造事業部工務課	辰巳商會	住友石炭以	早川電機本社工場設備管理部	設備管理課長	東芝玉川工場計劃事業部

三枝礼子	根志男	(葉等部)	木村征二	田端剛爾	平野忠二	米林外茂男	山本信樹	栗看喜雄	堀下重彦	村瀬泰弘	榎木二郎	产井洋夫	西川元夫	嶋越叔雄	立花直治	鷺沢忍	空中西勝	二本野夫
昭29	昭29		通35	通35	通35	通35	通35	通35	通33	通33	通32	通32	通32	通31	通31	通31	通31	通29
東京都区赤坂福吉町一ノ一六	大阪市旭区大宮西之町一丁目四一		神戸市東灘区御影町石屋三六〇	愛媛県新居浜市前田町 敬天寮	大阪府泉北郡高石町南三三三一七	宮崎県延岡市愛宕町三丁目旭化成温安寮	横滨市神奈川区子安台一五 日産子安抽身寮	横滨市港北区篠原町一六九〇	川崎市小杉二ノ二八八一 富士通電機青葉寮(平塚)	松山市吉田 帝人挑栗寮	岐阜県稲葉郡清羽町川崎区柴田方	吹田市南泉町二六三五	大阪府東淀川区下新左町二の五四(38七六五三)	石川県小松市持津町小松製作所才四寮	神戸市須磨区汐見台町五の二五	横滨市鶴見区束寺尾町才八芙蓉寮(横滨5二九五三)	豊中市塚本通一〇二日主造船豊中寮(豊中之四〇〇)	豊中市塚本通一〇二日主造船豊中寮(豊中之四〇〇)
工才イ吹生北寮(昭二〇二)	田辺製薬学術部(昭二〇三三)		三菱電機		旭化成延岡工場	工学部大学区	富士通船機	日立製作所川崎工場送風機設計課(川崎3三七五二)	日産	旭化成延岡工場	工学部大学区	三菱電機		新三菱造船船造機設計部片板設計課	小松製作所	近鉄玉川工場(七八二〇九九五)	帝人松山工場	川崎航空岐阜製作所

一 山 幸 代 <small>(旧准松木)</small>	横山 保枝 <small>(旧准松木)</small>	由比 坂 哲也	(文学部)	岡田 博司	玄 橋 茂	山本 光二	(法学部)	森田 幸夫	野田 憲一郎	辻川 真	木村 祐一	上 屋 直	田 島 汎	(経済学部)	石 沢 命久	坪井 和子 <small>(旧世森川)</small>	坂 (旧住井上)
心理 33	英文 31	英文 28		33	30	29		35	35	32	31	29	28		32	33	30
豊中市寺内一九一八		西宮市甲子園三保町五五		吹田市千里山一八九 (37七九一〇)	西宮市末次町五	名古屋市中区呼勢山町一三七	大和銀行名古屋寮	堺市出島通二丁目一六八	名古屋市西区牛島町トヨ夕自取牛島寮	沼津市三枚橋平町一〇三 在野信雄方	大政市北区天橋筋筋五丁目九五	芦屋市	東京都世田谷区系沢町四ノ六九 住友金属玉川寮		大阪府福島区上福島南三丁目公団住宅四〇五	豊中市豊野田旭ヶ丘公団住宅二二号、五〇八	豊中市穂積股部公団住宅九〇一〇五
大阪府立産業能率 研究所 八五	履屋川高枝	豊中一中 (豊中二四八四九)		本社業務部	西宮市教育委員会 社会教育課	大和銀行名古屋支店		東洋棉花	トヨ夕自取車販売KK	サンヨ一電共	日本アルミ営業部(39二一、二九)	住友金属本社(東区反町第三)	住友金属東京支社 鉄鋼部磁鋼課(31二二二)		阪大歯学部矯正科(3一〇、一五)		

環 牧

田村俊彦
大島浩
玉井康雄
室松卓爾
佐藤廉
田井興男
村井忠雄
玄瀬貞雄
大工原恭
塚母武彦
谷垣兵一
藤田嘉一
森村弘子
火巻龍保留
五百蔵典
酒井次郎
前沢祐一
黒木隆憲

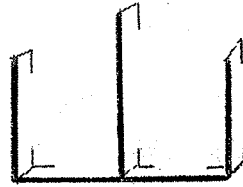
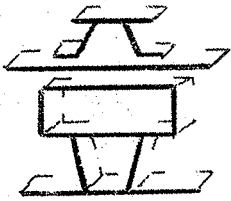
大阪市北区曾根崎上二ノ二六(政三七一)
尼崎市西大島稻葉荘二ノ五〇(婦〇九五三番)
西宮市沢原町九の二 三〇六号
〃 甲子園口二ノ三四七 (西宮夕〇三四六)
尼崎市東雷松字草塚二二三(婦入〇二二牧田)
箕面市桜井六四七 立花方
大阪市北区中崎町四八
西宮市甲子園口二ノ二七二森田方(西宮夕〇三四六室松)
西宮市南越木岩野五一 古田清方(西宮之五六六九)
伊丹市妻町三〇三
豊中市螢ヶ池西町二ノ九 岸本方
枚方市著
大阪市阿倍野区相生通一ノ五六(66三九四四)
〃 西成区旭北通一(64六七七一)
神戸市灘区弓ノ木町五ノ四(神戸夕四九六九)
池田市才田町五二四ノ一 瀬脇方

医専二
工志北四
聖化四
医専二
文仏四
工岩四
工監四
工塔四
齒専二
〃二
工治四
理化四
医専二
工機四
理化三
工電子三
工塔三
〃三

横 網 高 止 藤 大 池 茨
 尾 久 田 森 川 畠 井
 秀 老 邦 老 和 佳
 次 火 明 雄 弘 成 秋 証 勝

豊中市岡町北四ノ七五
 〃 桜塚元町一ノ八四（又九九七二）
 大股所生野区舍利寺町三の一五
 〃 南区高津七番町一五（又八八七五）
 西宮市屋敷町（西宮二）二九一）
 京都市北区平野島居前町三（京都市三三九一）
 枚方市着段大塚（枚方）二五三五）
 大股所阿倍野区丸山通二の四 松山方

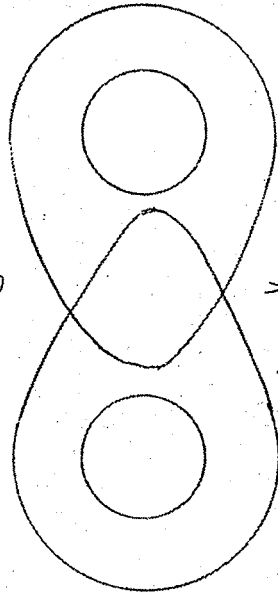
T 志 北
 E
 E
 E
 S
 T 通 信
 T 構
 T 機



用具
専門店

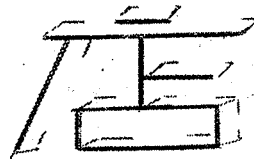
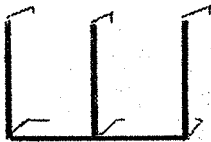
登山者なら
定評のある当店へ
どうぞを

他登山用具
ハーケン・ザイル
カラビナ



夏山用品なら

何んでも揃ふ

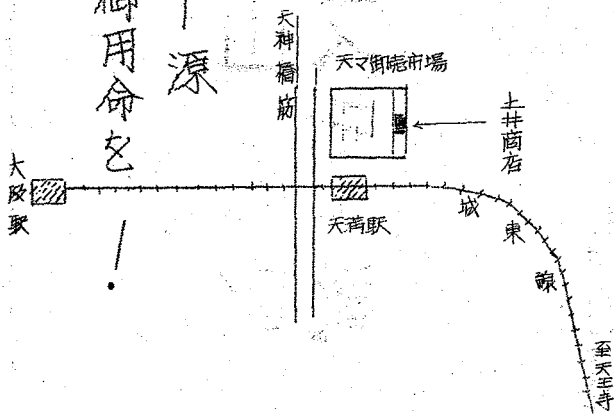


大阪市北区曽根崎上一ノ二四

TEL (34) 4192

登山携行食料品 (卸価格)

最少量にて
最大のエネルギー源
の保存食料品の御用命を



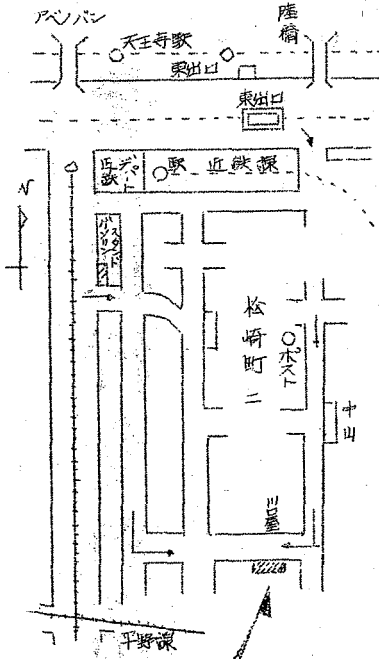
乾物 食料品卸
保証

万 土井商店

大塚市北區光田町2 / 天満御鷹市場内 電話 (35) 59775

大正九年より伝統のある

吉田屋の
山スキー靴靴



吉田屋株式会社

大阪府阿倍野区松崎町二丁目三八番地
電話 天全寺 (7) 九五四二番

◎ 各大洋山岳部の
御用を承つております

パン
食で
いつも
健康

パンの王様

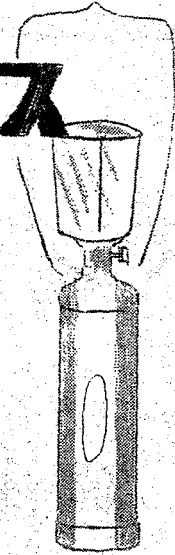


神戸屋パン

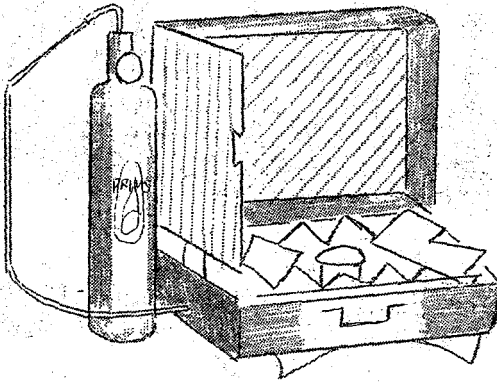
本社工場 大塚・福島・西園 (44) 7791 代表
西淀工場 大塚・西淀川・御舞島 (44) 0712

登山にプリムス

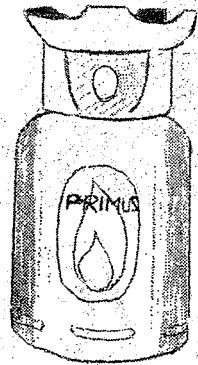
プリムスはスウェーデン直輸入の登山用ガスレンジ-----
 いつでも、どこでもプレツシな料理を即座に炊きあげます。
 プリムスはランプにも使えます。フエフットの美しい光が高原の夜に憩と楽しさを添えます。



(ランプ) / セット ¥4,700



(レンジ) / セット 定価 ¥6,000



(レンジ) / セット ¥6,000

★ カatalog希望の方は引換券を切り取り、はがきにはつてお送り下さい



岩谷産業

(本社) 大阪府東区本町三丁目 TEL (代) ②6 325/・825/

★ カatalog
 引換券
 4
 6

**MOUNTAIN,
WANDER
VOGEL
GOODS**

KankiSports

TEL 312-3922

美津濃

完全な装備で 楽しい登山

夏山用品

オーストラリア製
 ピッケル・アイゼン・ハーケン
 カラビナ・ムガー・クリンカー
 スイス製
 ピッケル・トリゴニー
 スエーデン製
 プリムズゴンロ
 国産品も豊富取揃



本店：大阪淀屋橋・東京支店：神田小川町

(PAT. NO. 482499)



ヒッコリーパック ラミスキー

両面ヒッコリースキーの大革命
 最高材料ヒッコリー材を使用
 した 世界最高級品です。

